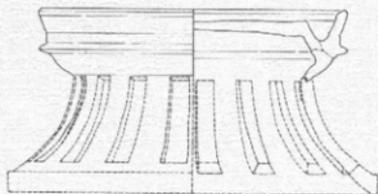


# 史跡 齋宮跡

平成6年度発掘調査概報

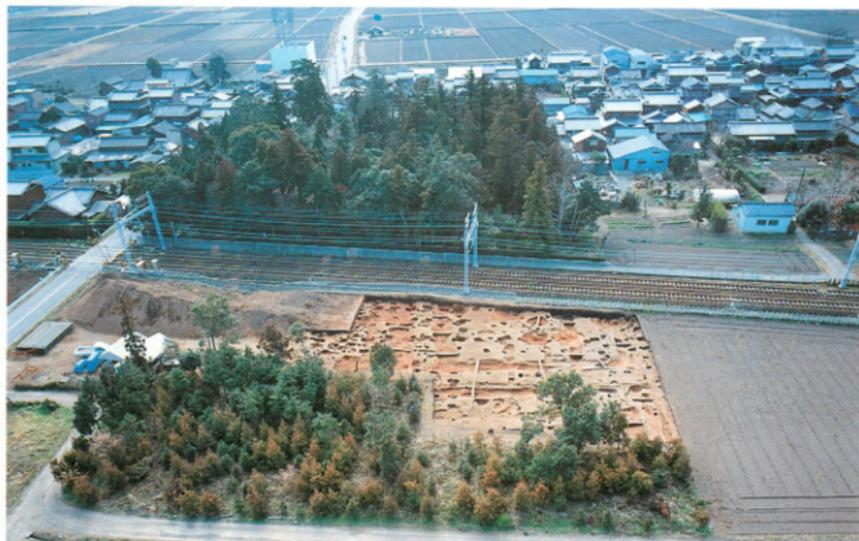


1995

齋宮歴史博物館

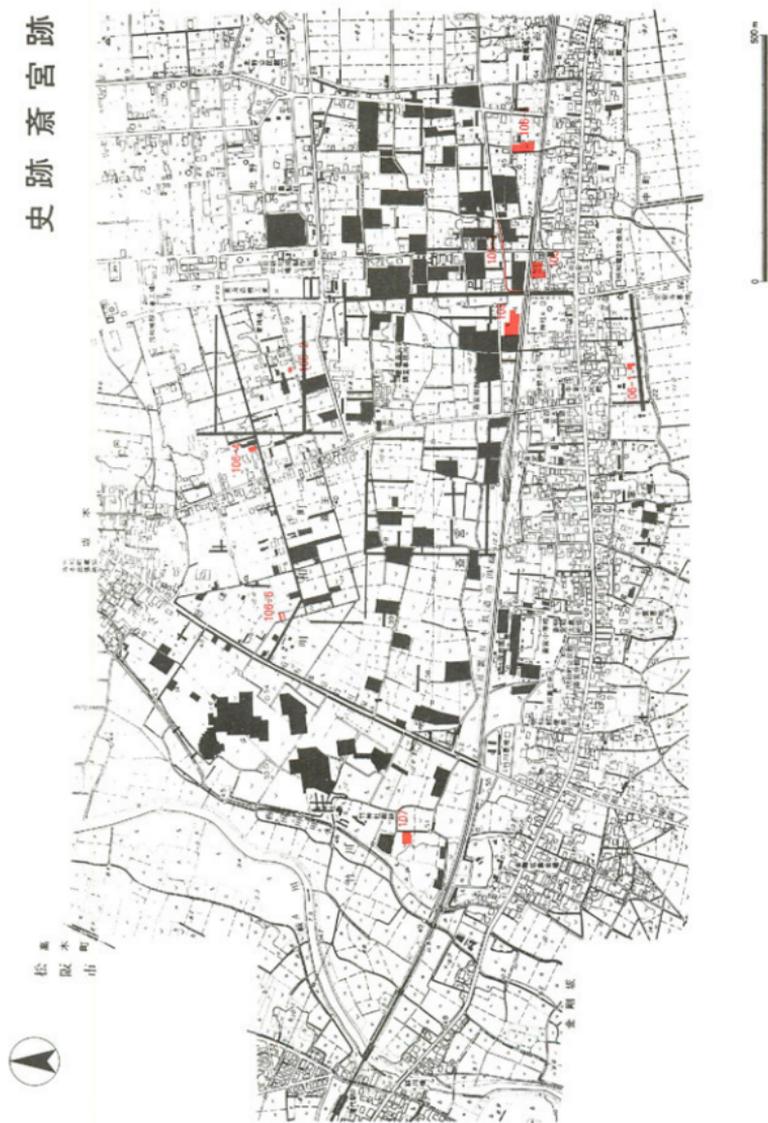


第105次調査区遠景（南から）



第108次調査区遠景（北から）

# 史跡 斎宮跡



第1図 平成6年度発掘調査場所 (1:10,000)

## はじめに

「史跡 齋宮跡」の調査・研究とその成果を広く県民に公開・展示することは、当齋宮歴史博物館にとって最大の使命であると言えます。

とりわけ調査・研究部門は、当館の業務全般にとって基礎とも言える重要な業務分野と認識して、その体制の充実や調査の必要性についても、地域の皆様をはじめとする多くの人々からより一層の理解を得るべく努めているところでもあります。

しかしながら、近年齋宮跡の実態解明にとって少しずつではありますが着実にその成果を蓄積していることとはうらはらに、史跡の調査や保存・活用にとって難しい問題が顕在化してきております。そこで、これら様々な問題に対処していくために、地元住民代表、明和町教育委員会及び当齋宮歴史博物館の三者で定期的に連絡会を開催し、お互いの意見を出し合って、地域住民と行政機関とが協力して「齋宮跡」の保存・普及・振興に資するため協議を重ねております。

このたび刊行させていただく本概報は平成6年度中に実施いたしました齋宮跡の計画的発掘調査の成果の概要をまとめたものでありますが、発掘調査の開始以来25年にして近鉄線以南では史跡指定前の範囲確認のためのトレンチ調査以来初めての本格的な面的発掘調査となった第105次調査、齋宮成立以前の当地域や初期齋宮を知るうえで多くの成果を得た第107次調査、旧参宮街道沿いであって、現在の竹神社が所在して齋宮の中でも特に重要な場所であった可能性も考えられる地域の一角での第108次調査等いずれも今後の齋宮跡の調査・研究にとって極めて有意義なものと言えます。

このような齋宮跡の保存と調査・研究の充実は文化庁をはじめ齋宮跡調査指導委員の先生方のご指導や地元関係機関・各位のご理解とご協力の賜物と感謝申し上げます。

なお文末となりましたが、当齋宮跡の史跡指定以前から今日までの間、齋宮跡調査指導委員として国文学の立場から幾多のご指導・ご助言を賜りました 久徳高文 先生にはさる2月ご逝去をなさいました。これまでのひとかたならぬご指導に感謝するとともに、ご冥福をお祈りいたしまして本概要の刊行にあたってのご挨拶とさせていただきます。

平成7年3月

齋宮歴史博物館

館長 川村政敬

## 例 言

1. 本書は、国庫補助金の交付を受けて斎宮歴史博物館が平成6年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要をまとめたものである。
2. 明和町教育委員会が、国庫補助金の交付を受け調査主体となって実施した史跡現状変更等に伴う緊急発掘調査の報告書は別途、明和町教育委員会の刊行による。
3. 遺構の実測にあたっては国土調査法による第Ⅵ座標系を基準とし、方位は座標北を用いた。
4. 遺構の時期区分は、「斎宮の土師器（三重県斎宮跡調査事務所年報1984）」による。
5. 遺構表示記号は次の通りである。  
SB；建物 SK；土坑 SD；溝 SE；井戸 SA；橋列 SF；道路 SX；その他
6. 方格地割における各区画の名称は第31図に示した。
7. 遺物実測図は、特に標示がない限り実物の4分の1である。
8. 斎宮跡の調査全般については、次の先生方の指導を得た。

京都府立大学名誉教授	門脇 慎二
千葉大学教授	北原理雄
相山女学園大学名誉教授	久徳高文
前奈良国立文化財研究所所長	鈴木嘉吉
財大阪文化財センター理事長	坪井清足
名古屋学院大学教授	植崎彰一
三重大学教授	八賀 晋
名古屋大学教授	早川庄八
財京都府埋蔵文化財調査研究センター理事長	福山敏男
皇学館大学教授	渡辺 寛
9. 現地での発掘調査及び本概報の編集・執筆は斎宮歴史博物館調査研究課の吉水康夫、野原宏司、大川勝宏、赤岩 操があたり、前川友秀、田端由佳、田所美里がこれを補佐した。  
また、遺物整理には島村紀久子、角谷和代、奥田康子、鈴木美智子の協力を得た。  
その他、調査には田中里佳（奈良大学学生）、川合正宏（立命館大学学生）の参加を得た。

## 目 次

I. 調査の経過と概要 .....	1
II. 第105次調査 .....	3
III. 第107次調査 .....	17
IV. 第108次調査 .....	30
発掘調査報告抄録 .....	72

### 表・挿図目次

(表) 1. 平成6年度発掘調査一覧 .....	2
2. 第105次調査時期別遺構分類表 .....	4
3. 第107次調査時期別遺構分類表 .....	17
4. 斎宮跡布掘状掘形建物一覧 .....	21
5. 第108次調査時期別遺構分類表 .....	33
6. S A 7000の柱底面高と地山面の相関 .....	34
7. 掘立柱建物・楯列一覧表 .....	54
8. 堅穴住居一覧表 .....	55
9. 遺物(土器)観察表 .....	56
10. 斎宮跡発掘調査次数一覧表 .....	66
(図) 1. 平成6年度発掘調査場所(1:10,000) .....	i
2. 第105次調査 調査区位置図(1:2,000) .....	3
3. 〃 遺構実測図(1:200)・遺構変遷図(1:500) .....	5・6
4. 〃 出土遺物実測図(SK7179・7156・7157、SD7154・7181、特殊遺物) .....	11
5. 〃 鍛冶山西ブロック周辺遺構配置図(1:1,000) .....	15・16
6. 第107次調査 調査区位置図(1:2,000) .....	18
7. 〃 遺構実測図(1:200) .....	19
8. 〃 SX7200・7201遺物出土状況実測図(1:20) .....	20
9. 〃 SB7210遺構実測図(1:100) .....	21
10. 〃 SK7220遺物出土状況実測図(1:20) .....	22
11. 〃 SX7240遺構(1:20)・遺物(1:4)実測図 .....	23
12. 〃 出土遺物実測図(SX7200・7201、SK7202、その他) .....	25
13. 〃 出土遺物実測図(SK7220、SB7210・7215、その他) .....	26
14. 〃 出土遺物実測図(SK7220) .....	27
15. 〃 出土遺物実測図(SK7220) .....	28
16. 第108次調査 調査区位置図(1:2,000) .....	30
17. 〃 遺構実測図(1:200) .....	31・32
18. 〃 SD7254・7268・7269・7307埋土断面図(1:30) .....	37
19. 〃 出土遺物実測図(SD7252、SK7261・7260) .....	39
20. 〃 出土遺物実測図(SK7260・7288・7290、SD7258・7275・7273 SK7250・7262・7317・7326) .....	40
21. 〃 出土遺物実測図(SK7321・7323・7322・7289・7324 SD7309・7308・7269・7307、SK7305) .....	41
22. 〃 方格地割中枢部における平安時代中期土師器の変遷(1:4) .....	42
23. 〃 出土遺物実測図(その他) .....	44
24. 〃 管状土錘の法量(幅/長、重量/孔径)相関 .....	45
25. 〃 規則的配置の主要建物(1:500) .....	46
26. 〃 主要遺構変遷図(1:800) .....	47
27. 〃 平安時代後期～末期主要溝遺構分布図(1:2,000) .....	48
28. 〃 土師・製埴土器出土分布図(1:500) .....	50
29. 〃 方格地割中枢部付近の微地形試案(1:1,000) .....	51・52
30. 斎宮跡地区表示 .....	70
31. 斎宮跡方格地割区画名称 .....	71

## 写 真 図 版

- 巻 頭. 上 : 第105次調査区遠景 (南から)  
P L 1. 第105次調査区全景 (真上から)  
P L 2. 上 : 調査区東半 (西から)  
P L 3. 上 : S B 7180・7165・7195・7190 (南から)  
P L 4. 上 : S B 7155・7190・7191東半 (西から)  
P L 5. 上 : S B 7155・7160東半 (南から)  
P L 6. 上 : 調査区西半 (南から)  
P L 7. 第107次調査区全景 (真上から)  
P L 8. 上 : 調査区遠景 (東から)  
P L 9. 上 : S X 7200 (北西から)  
P L 10. 上 : S B 7232 (北から)  
P L 11. 上 : S B 7210 (東から)  
P L 12. 上 : S K 7220遺物出土状況 (南から)  
P L 13. 第108次調査区全景 (真上から)  
P L 14. 上 : 調査区全景 (西から)  
P L 15. 上 : 調査区南東部 (東から)  
P L 16. 上 : S B 7315 (東から)  
P L 17. 上 : S B 7300 (東から)  
P L 18. 上 : S B 7310 (西から)  
P L 19. 上 : S D 7269・7307 (北から)  
P L 20. 第105次調査出土遺物  
P L 21. 第107次調査出土遺物 (弥生土器)  
P L 22.           ◇           (S K 7220)  
P L 23.           ◇           (S K 7220・S X 7240・その他)  
P L 24. 第108次調査出土遺物
- 下 : 第108次調査区遠景 (北から)  
下 : S A 7150・7170 (南から)  
下 : S B 7175・7185 (北西から)  
下 : S B 7155・7190・7191西半 (南から)  
下 : S B 7160西半 (東から)  
下 : S A 1411・2675・7151 (東から)  
下 : 調査区全景 (北から)  
下 : S X 7201遺物出土状況 (南東から)  
下 : S B 7227・7228・7229 (北から)  
下 : S B 7231・7233 (北から)  
下 : S X 7240 (北から)  
下 : S A 6999・7000 (西から)  
下 : S B 7285 (北から)  
下 : S B 7293 (西から)  
下 : S B 7299 (東から)  
下 : S B 7313 (北から)  
下 : S K 7281埋土断面 (東から)

## I. 調査の経過と概要

斎宮跡とならんで明和町内に所在する国指定文化財である天然記念物「ハナショウブ群落」や、これにちなんで史跡の公有化済場所の維持・管理の一環として栽培されている花菖蒲の咲くシーズンに併せ、例年6月の第1日曜日を原則として開催されている「斎王まつり」に協賛して実施している現地説明会に向けたスケジュールを考慮して、前年度の史跡現状変更申請に伴う事前の発掘調査である第102-3次調査がようやく3月30日に終了したばかりにもかかわらず、平成6年度の最初の計画発掘調査である第105次調査は、早くも新年度早々の4月7日より開始した。

調査場所は、史跡指定前の遺跡範囲確認のためのトレンチ調査や史跡現状変更に伴う小規模な事前の発掘調査以外に本格的な発掘調査がほとんど実施されていなかった近鉄線の南側に位置しているものの、周辺で蓄積された近年の発掘調査の結果から一時期の斎宮にとって中核的性格を持つ部分ではないかと考えられる地域の一画にあたっている。

約800㎡余の調査対象地は以前にビニールハウスが設置されていたため、その骨組みや基礎の撤去が必要であり、調査スケジュール等との関係から、本年度は東半部の410㎡の調査を実施し、残る西半部については次年度に調査を実施する予定であったが、諸般の事情から急遽これを変更して全面を対象とすることにした。このため、東半部の調査作業は5月9日にはほぼ完了し、写真撮影や実測等の作業後、6月5日には「斎王まつり」にあわせて現地説明会を開催し、約300名の参加を得た。その後埋め戻しに引き続いて残る西半部の調査に着手したものの、例年斎宮跡の普及・啓発事業の一環として小・中学生の夏休み期間中に実施している「体験発掘教室」の現場として計画していた第107次調査と並行したため、10月7日に至りようやく調査の全作業を完了することができた。

調査の結果は、大型柱掘形を持つ10棟をはじめ11棟の掘立柱建物や4条の横列の検出、緑釉陶器片・陶棺片等の出土など多くの貴重な成果を得た。これまでの周辺での知見も含めて新たな問題も少なからず提起されることとなったものの、今後の斎宮跡における実態解明にとって有意義な一歩をしるすこととなった。

続く第107次調査は、前述のとおり「体験発掘教室」の実施にかかるスケジュールとの調整を考慮して、第105次調査の後半に当たる西半部の遺構掘り下げと写真撮影及び実測のための割り付け等の作業が終了して間もない7月18日から開始した。

これまでの周辺地域における限られた調査成果の蓄積から当調査区を含む一帯では、斎宮成立以前と初期斎宮の時期に相当する遺構・遺物が集中することが知られており、特に初期斎宮跡の解明につながる手がかりの把握は、今回の調査において大きな期待のひとつであった。

調査の結果、当初の想定に違わず弥生時代中期の方形周溝墓2基や溝持ち布掘の柱掘形を持つ総柱の掘立柱建物の検出や本概報表紙カットに使用した円面硯の出土等、今後の当該地域の調査にとって参考となる貴重な成果を得て、11月15日に埋め戻しを含む全ての作業を終了した。

この間、8月24日から26日までの3日間には体験発掘教室を開催し、博物館内での斎宮の発掘についての話、土器の水洗・接合等のほか当調査区で実際の発掘作業を体験し、例年にもまして酷暑の中にもかかわらず職員や作業員の指導のもとで子供たちには貴重な経験をしてもらうことができた。

さらに第108次調査は、前年度の第103次調査に続いて方格地割の中でも旧参宮街道沿いで、現在の竹神社が所在して、「斎宮」の中でも極めて重要な性格を持った区画であったことも想定される柳原地区で10月11日から作業を開始した。当該地は保存管理計画の土地利用区分における第1種地区に相

当するため、既に史跡管理団体である明和町により公有化されているものの、調査前は手入れの行き届かない山林として雑草の生い繁る林となっていた。このため、調査の円滑に多大の支障が予測されたため、作業に先立ちその伐開と除草を兼ねて重機により表土除去を実施している。

調査の成果は、前年度の第103次調査により確認されている櫛列S A 7000の延長部分15間分のほか掘立柱建物14棟、土坑39基等の遺構や、緑釉陶器・土師器・須恵器・灰釉陶器等の多量の出土遺物を得て、平成7年3月3日に漸く全ての作業を完了した。この間、早朝に発生した阪神淡路大震災の当日である1月17日には予定していた調査指導委員会を開催し、予期せぬ大災害にもかかわらずご出席いただいた先生方には現地指導も含めて多くの有意義なご指摘を得、2月19日には現地説明会を開催して、寒中にもかかわらず200名を超える熱心な参加者を得た。

その他、三重県教育委員会が調査主体である計画的発掘調査以外に管理団体である地元明和町教育委員会が調査主体となり、斎宮歴史博物館が担当して実施している史跡現状変更に先立つ事前の発掘調査は、本年度も第106-1次から第106-6次調査及び発掘調査を前提としつつも工事立会いの過程で遺構に重大な影響を及ぼすことがないと思われるため本格的な調査には至らなかった町道側溝新設も含め、7件について実施した。

なかでも第106-1次調査は、平成4年度の第96-5次調査で八脚門が検出されて以降に方格地割の南辺に面する7区画のうち、第104次調査に続きその中央南辺付近に位置する地点での3箇所目の調査で、調査前にはここでも八脚門が検出されることも予想されたが5棟の掘立柱建物や櫛列等が検出されたものの第104次調査と同様にその所在は確認することはできなかった。

一方、昨年度の第102-6次調査に続く通称中町排水の改修に伴う第106-3次調査では奈良時代前期の古道の両側溝や一時期の斎宮跡にとって中枢部と考えられている一画を囲む櫛列の一部を検出したほか、第106-4次調査では史跡北辺を東西に巡る所謂鎌倉時代大溝の検出や、第106-5次調査での奈良時代古道の両側溝と方格地割における東から1列目と2列目を画する南北方向の区画道路及びその両側溝を確認する等多くの貴重な成果を得ている。

(吉水康夫)

調査回数	地区名	調査面積㎡	調査期間	地籍・地番	所有者	備考	区分
105	6 AFN	780	H. 6. 4. 7~H. 6. 10. 7	明和町斎宮字鍛冶山2758-1他	佐々木 敬	計画発掘調査	3
106-1	6 AEW-J	180	H. 6. 6. 14~H. 6. 7. 13	明和町斎宮字鈴池338-1 他	森西喜作	倉庫の新築	3
106-2	6 AEE-W	26	H. 6. 7. 7~H. 6. 7. 14	明和町斎宮字楽殿2891-3	向井浩高	住宅の新築	3
106-3	6 AFL・6 APM	200	H. 6. 8. 23~H. 6. 10. 13	明和町斎宮字鍛冶山 地内	明和町	側溝改修	2
106-4	6 AEC-L	180	H. 6. 10. 14~H. 6. 10. 25	明和町斎宮字苅干2861-3	坂本正成	住宅の新築	3
106-5	6 AGO	646	H. 6. 11. 14~H. 7. 3. 31	明和町斎宮字鍛冶山2362-3	青山 尚	倉庫の新築	2
106-6	6 ACC-B	128	H. 7. 1. 23~H. 7. 3. 9	明和町斎宮字塚山3340-4	田畑 学	住宅の新築	3
107	6 AB1-Q	530	H. 6. 7. 18~H. 6. 11. 15	明和町竹川字中畑内414-1 他	沢 恒一	計画発掘調査	3
108	6 AEQ-C	1,100	H. 6. 10. 11~H. 7. 3. 3	明和町斎宮字柳原2779-2 他	明和町	計画発掘調査	1
合計		3,770	内訳：計画発掘調査	2,410㎡、	史跡現状変更に伴う事前調査	1,360㎡	

第1表 平成6年度発掘調査一覧

## Ⅱ．第105次調査

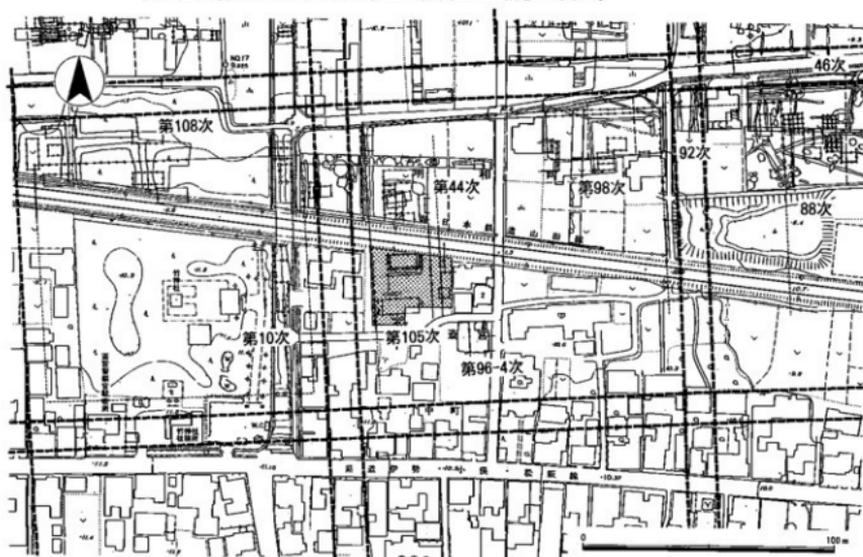
6AFN（鍛冶山地区）

1. はじめに 本年度最初の計画調査として、第105次調査を史跡東部、鍛冶山地区で平成6年4月7日から10月7日まで実施した。本調査区は竹神社の東側約50m、近鉄山田線南側の現況畑地であるが、隣接する住宅等で囲まれるため調査区東半と西半の2回に分けて行い、最終的に調査面積は780㎡に及んだ。

史跡東部には、奈良時代後期～平安時代初期にかけて造営が開始されたと考えられる方格地割が25年に及ぶ斎宮跡の発掘調査で明らかになってきた。これは一辺約120mを基調として幅約12mの区画道路が基盤目状に続き、東西5列×南北4列、合計20の方形区画で構成されるものも考えられたが、平成5年3月史跡南限で発見した八脚門S B6850とそれに取付く東西柵列S A6849により、最大東西7列×南北4列まで拡大することがわかってきた。また、この方格地割のほぼ中央部、鍛冶山西ブロックで実施した第98次調査では、大規模な柵列（板塀）に囲まれた内側に大型の掘立柱建物を検出するなど、方格地割の中核部としてこの区画が位置づけられるようになった。

今回の調査はこの鍛冶山西ブロックの西辺部にあたり、近鉄線を挟んで北側の第44次調査で検出した南北柵列S A1411・2675の南側延長部分を確認し、この柵列の内側に配置される掘立柱建物群の実態を解明することを調査の目的とした。

調査区の現況は標高10.5m前後の平坦な畑地で、遺構面は灰色系の耕作土と20cm～30cm厚のふい黄褐色土の包含層を除去した下部の黄褐色粘土（地山）として捉えた。調査区全体の地山面もほぼ平坦で標高10.1m前後を測る。



第2図 調査区位置図（1：2,000）

2. 遺構 調査区南半は近世以降の攪乱溝等でかなり削平されていたが、検出した遺構としては、奈良時代後期から平安時代後期までに及び、柵列7条、掘立柱建物11棟、溝17条、土坑15基がある。

(1) 奈良時代後期～平安時代初期の遺構 柵列3条、掘立柱建物6棟、溝6条がある。

S A 1411 調査区西辺部、S A 2675と重複する南北柵列で、柵列の方向はN4°Wを示し、柱間は2.95m(10尺)等間で10間分(29.5m)を検出した。S A 1411は方格地割の鍛冶山西ブロックの内側を囲む大規模な柵列の西辺に相当し、近鉄線を挟んで北側、第44次調査では12間分を検出している。この柵列の北端からさらに1間分北の柱穴(未検出)を北西隅として今回検出分をあわせると南側へ28間以上延長するものと考えられる。柱掘形は一辺0.8m～1.0mの方形で、深さは45cm前後である。埋土は黒褐色土で直径約30cmの柱痕跡を検出した。柱穴の底面は標高9.7m前後とほぼ一定する。出土遺物は皆無に等しい。新旧関係は柱穴の切り合いより古い方からS A 1411→S A 2675である。

S A 7150 調査区中央部で新たに発見した南北柵列で、S A 1411の東側約24mで並行し、柵列の方向は同様にN4°Wを示す。柱間は2.95m等間で6間分(17.7m)を検出した。柱掘形はS A 1411よりもやや大型で一辺0.9m～1.1mの方形、深さは約70cm、直径約30cmの柱痕跡がある。底面は標高9.5m前後を基準とするが、柵列の北端から3間目が標高約9.7m、5間目が標高約9.3mであり、約20cmの高低差がみられる。埋土は黒褐色土で土師器の破片が数片出土しただけである。

S B 7155 調査区北西部、東西棟の桁行4間×梁行2間で、柱間は3.0m(10尺)等間である。棟方向はE4°Nを示し、S A 1411から西妻までと、S A 7150から東妻までの距離はほぼ等間隔の約6mを測る。柱掘形は一辺約1.2mの方形で深さは90cm前後、柱痕跡は直径約35cmを測り、S A 1411の柱穴よりも大型である。確認できた底面は標高9.2m～9.3mとかなり深い。埋土は黒褐色土で遺物はほとんどみられない。重複するS B 7190・7191は、柱穴の切り合いよりS B 7155→S B 7190→S B 7191と建て替えられる。

S A 7151 S B 7155の西妻柱筋の南側延長線上で3間分の柵列が延びており、この建物に取り付く板塀が想定される。柱間は不揃いで、南西隅柱から2.1m(7尺)、2.7m(9尺)、3.0m(10尺)を測る。柱掘形は一辺0.8m～1.0mの方形、深さは30cm前後で直径約30cmの柱痕跡を検出した。埋土は黒褐色土で、柱穴底面は2間目まで標高約9.7mを測るが、3間目の柱穴は標高約9.4mとさらに低い。

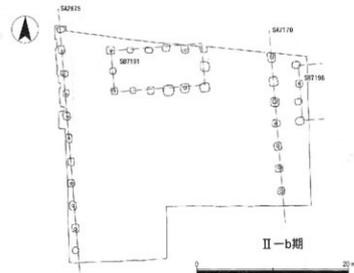
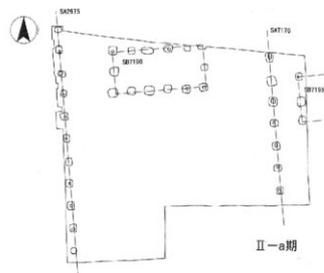
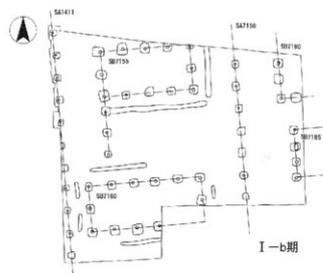
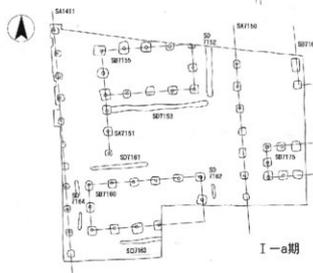
		遺 構 の 種 別											
		S K				S A		S B			S D		
奈良	後 期					I	1411	7155	7160	7165	7152	7153	7161
	初 期	7179					7150	7175	7180	7185	7162	7163	7164
平 安	前 I 期					II	2675	7190	7191	7195			
	前 II 期	7156	7157	7158	7177		7170	7196					
	中 期	7182	7183	7184	7186				7154	7169			
	後 期	7178							7181	7192			
時 期 不 明	7173 7174 7187 7188				7171		7197			7166	7167	7168	
	7189				7172					7176	7193	7194	
									7198				

第2表 時期別遺構分類表

第3図 遺構実測図 (1:200)・遺構変遷図 (1:500)



		I 期		II 期	
		a	b	a	b
S	1411	←→			
	7150	←→			
A	2675			←→	
	7170			←→	
S	7155	←→			
	7160	←→			
	7165	←→			
	7175	←→			
	7180	←→			
B	7185		←→		
	7190			←→	
	7195			←→	
	7196			←→	



- S D7152・7153 S B7155の東・南側に約2.1mの距離をおいて溝S D7152・7153が並走するが、北・西側にも同様の溝が存在するものと思われる。これらは断面逆台形を呈し、幅60cm～70cm、深さ35cm～50cmを測るが、溝底は標高9.8m前後と平坦である。黒褐色土の埋土からは遺物は出土していない。
- S B7160 S B7155の南側約12mの間隔をおいて並ぶ東西棟である。東妻の柱通りはS B7155の東妻柱筋と同じで同時期に併存したものと考えられる。柱間は3.0m等間で桁行5間×梁行2間と最大級の建物である。柱掘形は一辺約1.2mの方形で深さ40cm～80cm、柱痕跡は直径35cm前後を測る。柱穴底面は標高9.3m～9.4mで、黒褐色土の埋土からは出土遺物は皆無に近い。
- S D7161～7164 S B7160の四辺には、約1.5m隔てて並行する溝S D7161～7164が検出された。確認した溝幅は約40cm、深さ30cm～40cmを測り、断面逆台形である。溝埋土は柱穴と同じ黒褐色土だが、出土遺物はいずれも確認されなかった。
- S B7165 調査区北東隅でS A7150の東側に約7.5m隔てて並行し、柱間3.0mの南北1間分を検出したが、建物全体は調査区外へさらに広がるものである。柱穴はS B7196に切られるが、柱掘形は一辺1.1m前後の方形と考えられ、埋土は黒褐色土である。柱列の方向はN4°Wでしかも柱間が3.0mであることからS A7150と並行し、S B7155と同規模程度の南北棟を想定するが、東西棟の可能性も充分残される。
- S B7175 調査区南東部、柱間は2.1m等間で桁行3間×梁行2間の東西棟と考えられる。棟方向はE4°Nで、S A7150の柱通りに対して西妻柱筋が並行し、その間隔は約6mを測る。柱掘形は一辺約1.2mの方形で深さ約80cm、柱痕跡は直径35cm前後である。確認した柱穴底面は標高9.4m前後とほぼ一定する。埋土は黒褐色土と黄褐色土（地山）が混在するが、遺物は弥生土器と見られる小片が3点出土した。柱穴の切り合いから新旧は、S B7185より古い。
- S B7180 調査区北東部で桁行2間分×梁行1間分を検出したが、南北棟の5間×2間が想定され、柱間は2.4m（8尺）等間である。棟方向はS A7150と同じで、西桁行筋までの距離は約5.6mを測る。柱掘形は一辺1.0m～1.2mの方形で深さ約70cm、柱痕跡は直径35cm前後である。柱穴底面は標高9.4m前後である。埋土は茶褐色土で、柱穴の切り合い関係より古い方から、S B7180→S B7195→S B7196の順である。
- S B7185 調査区南東部でS B7175と重複して南北3間分を検出したが、柱間が2.1m等間で南北棟の3間×2間が想定される。柱列の方向はN4°Wである。柱掘形はS B7175よりやや小型で一辺約1.1mの方形で深さは約80cm、柱痕跡は直径30cm前後を測る。底面の標高は9.4m前後である。埋土は茶褐色土、遺物は土師器片が数点出土した。
- (2) 平安時代初期の遺構 土壇1基がある。
- S K7179 調査区南西隅で検出した土壇で東半はS D7181、北半はS A2675の柱穴に切られ、底面ではS A1411の柱穴を確認した。調査区外へさらに広がるもので規模・形状は明らかでないが、長径2.2m以上、深さ約30cmと考えられる。埋土からは平安時代初期とみられる須恵器杯・蓋、土師器杯・皿等が少量出土した。
- (3) 平安時代前Ⅰ期～前Ⅱ期の遺構 櫓列2条、掘立柱建物4棟がある。
- S A2675 調査区西西部、S A1411の柱穴北辺を切る南北櫓列で、10間分（29.5m）検出したが、S A1411の建て替えとみられる。柱間は2.95m（10尺）等間で櫓列の方向はN4°W

を示す。第44次調査では11間分検出し、さらに第106-3次調査では北西隅となる北端の柱穴を確認したため、今回の検出分を含めて南側へ27間以上延長することがわかった。柱掘形は一辺0.9m～1.1mの方形、深さ約45cm、柱痕跡は直径約30cmを測る。柱穴底面の標高はS A 1411とほぼ同じ9.7m前後である。茶褐色土の埋土からは土師器小片がわずかに出土している。

- S A 7170 S A 7150と同様、新たに発見した南北柵列で、東側約4mに並行して6間分(17.7m)を確認した。柱列の方向はN4°W、柱間は2.95m(10尺)等間で、S A 2675とは約28mの間隔をおいて並行することから同時期併存と考える。柱掘形は一辺0.9m～1.2mの方形で深さは50cm～60cm、柱痕跡は直径30cm前後である。底面の標高は9.7m前後を測る。出土遺物は皆無で、埋土は茶褐色土である。
- S B 7190・7191 S B 7155と重複し、柱間をやや縮小して東西棟の桁行5間×梁行2間に建て替えたものである。S A 2675の東側約7mでS B 7190の西妻、S A 7170の西側約9mで東妻の柱筋を揃える。S B 7155の柱間は3.0m等間であったが、桁行で2.4m、梁行で2.7mとなる。柱穴の切り合いからS B 7190→S B 7191の順に建て替える。S B 7191の柱掘形は一辺0.8m～0.9mの方形で深さ60cm～70cm、柱痕跡は直径約30cmを測る。S B 7190は重複するため確認できた柱掘形で一辺1.0m前後の方形、深さは約70cm、柱痕跡は直径30cm前後を測る。柱穴底面の標高はいずれも9.4m～9.6mでS B 7155と比べて20cm以上高い。埋土は茶褐色土系で、平安時代前Ⅱ期～中期と見られる土師器杯・皿・甕の小片が少量出土した。なお、S B 7155では東辺・南辺でS D 7152・7153が存在したが、S B 7190・7191では該当する溝は確認されなかった。
- S B 7195 調査区東辺部で検出したS B 7195・7196は、建物全体が明らかにできなかったが、いずれも調査区外に拡がる建物として捉えた。S B 7195はS A 7170の東側約3.6m隔てて並行し、西妻柱筋を揃える東西棟と考えられる。柱間は3.0m等間、梁行2間分検出したが、S B 7155と同規模の4間×2間が想定される。S B 7180・7196と重複しており、確認できた柱掘形は一辺0.9m～1.0mの方形で深さ約50cmを測る。柱痕跡は直径30cm前後で底面の標高は約9.6mである。暗茶褐色土の埋土から土師器細片がわずかにみられる。柱穴の切り合いからS B 7180より新しく、S B 7196より古い。
- S B 7196 S B 7165・7180・7195の柱穴と重複し、桁行3間分を検出した。柱間は2.4m等間で南北棟の3間×2間と考えられる。柱掘形はやや不定形で一辺0.7m～0.9mの略方形を呈し、深さは約70cmで底面の標高は9.3m～9.5mを測る。直径約30cmの柱痕跡が一部認められた。埋土は黄色土がやや混入した茶褐色土で、平安時代前Ⅱ期～中期とみられる土師器杯・皿・甕の破片が少量確認された。
- (4) 平安時代前Ⅱ期の遺構 土壇8基がある。調査区北東部のS K 7156～7158や、調査区西辺部のS K 7177・7182～7184・7186である。
- S K 7156～7158 S K 7156・7157はS A 7150の柱穴を切っており、いずれも直径約2.0mの略円形土壇で深さ約40cmを測るが、埋土から完形に近い土師器杯・皿が出土している。S K 7158は南辺でS K 7157と接し、深さ約20cmで一辺約1.8mの方形を呈する。
- S K 7177 西端が南北溝S D 7181と接する大形の円形土壇で直径約4.5m、深さ約35cmを測る。埋土は黒灰色土で、土師器杯・皿の破片が少量出土した。
- S K 7182～7184・7186 S D 7181の溝底でS K 7182～7184・7186を検出した。いずれの埋土もやや黒

灰色を呈し、わずかながら土師器杯・皿・甕小片が出土している。S K7182は不定形な長円形で長径約4m×短径約2m、深さ約30cmを測る。S K7183・7186は長径3m前後の略円形で深さは30cm～40cmを測る。S K7184は西半が攪乱土壌に切られるが、深さ約30cm、直径約1.5mの円形土坑と考える。

(5) 平安時代中期の遺構 溝2条がある。

S D7154 調査区東半部、S A7150とS A7170の間で南北方向に続く溝である。溝幅は2.8m前後、深さ30cm～45cmを測る。断面形は浅い半円形を呈し、溝底は標高9.9m前後とほぼ平坦である。茶灰色土の埋土からは、土師器杯・皿小片を中心として遺物整理箱で4箱分出土したが、一部平安時代前Ⅱ期に相当する土器片も混入する。

S D7169 調査区北東隅でS D7166と重複する南北溝で、S B7180の西桁行筋の柱穴を切る。確認長約4.2m、溝幅約30cm、深さ約30cmを測り、土師器小片が出土する。

(6) 平安時代後期の遺構 溝2条、土坑1基がある。

S D7181 調査区西辺部の南北溝S D7181は、溝幅2.5m～3.5m、深さ20cm～50cmで、断面形は浅い半円形を呈する。溝底の標高は北端で約10m、南端では約9.7mとなり、北から南へ緩やかに傾斜する。底面ではS B7160の西妻柱やS K7182～7184・7186～7189が確認されている。遺物としては当該期の土師器杯・皿片が少量出土したが、平安時代前Ⅱ期～中期のものもわずかに混入する。

S D7192 調査区北辺付近で、S B7190の北桁行筋を切る浅い溝である。確認全長は約10m、溝幅約1.1m、深さ20cm前後を測る。埋土は淡茶褐色土でわずかに土師器片を含む。

S K7178 S K7177の東隣に位置する楕円形土坑で、長径約2.5m×約1.5m、深さ約20cmを測る。茶褐色土の埋土からはロクロ土師器等の小片が出土する。

(7) 時期不明の遺構 欄列2条、掘立柱建物1棟、土坑5基、溝7条がある。

S B7197 調査区中央付近、S B7155・7190・7191と重複する東西棟で桁行5間×梁行2間である。棟方向はE7°Nを示し他の建物とは異なる。柱穴は円形で直径約40cmと小さく、深さ約40cmを測り、柱間は2.0m等間である。出土遺物は皆無であるが、S B7191より新しく、少なくとも平安時代中期以降と考えられる。

S A7171-7172 S A7170の柱筋と重複する南北欄列で、方位はN4°Eを示す。S A7171は柱間は2.95m等間で6間分(17.7m)を検出した。柱穴は径約45cm、深さ30cm～60cm、底面の標高は9.6m～9.9mと一定しない。S A7172は柱間は3.0m等間で5間分(15.0m)を検出した。柱穴は径30cm～45cm、深さ30cm～50cm、底面の標高は9.7m～9.8mで高低差は10cm前後である。これら欄列とS A7170との新旧関係は埋土の切り合いでは明確にできなかったが、新しいものとする。

S K7173-7174 S K7173は調査区南東隅で検出した深さ約80cmの土坑で大半が調査区外に拡がり、全体規模は不明である。黒褐色土の埋土からは近世陶器を含むが、大半が土師器鍋片で16世紀代とみられる。S K7174は調査区南西隅でS A2675を切っており、直径1.8m前後の略円形を呈するものと考えられる。出土遺物は16世紀代の土師器鍋片である。

S K7187～7189 S D7181の南半、溝底で検出した略方形の土坑である。S K7187は長径約2.0m×短径約1.5mで深さ約40cm、S K7188は長径約1.5m×短径約1.0mで深さ約30cm、S K7189は長径約3.0m×短径約2.7mで深さ約30cmを測る。出土遺物は土師器細片のみで平安時代前Ⅱ期～中期のどの時期に属するかは不明である。

SD7166~7168 S A7170の東側に約3m隔てて並行し、南北へ直線的に続く溝である。SD7166はSB7165の西側に約2.1m隔てて並走する雨落溝と考えられる。SB7180の柱穴を切っており、SD7169と重複するが、確認長約10m、幅約60cm、深さは約15cmで溝底はほぼ平坦である。埋土は黒色土でSB7165に類似するが、出土遺物は皆無である。

SD7167はSB7185の西側に約1.5mの間隔をおいて並行し、この建物の雨落溝の可能性も窺われる。SD7167はSD7168の下部で検出し、SB7175の柱穴を切っている。埋土は黒色土で確認長約16m、幅約50cmで断面逆台形を呈し、深さ30cm~40cmを測る。溝底の南半ではやや深くなり標高9.7mと平坦である。SD7168は茶褐色土の埋土で溝幅約60cm、深さは20cm~30cmと浅い。この溝上面で確認した小ピットからは陶棺の一部とみられる大形陶器片が出土している。

SD7176 SB7175の北側約1.5mで並行する東西溝で、確認長約1.6m、溝幅約40cm、深さ約30cmを測る。埋土はSB7175の柱穴と類似する黒色土で雨落溝の可能性もあるが、出土遺物は皆無であった。

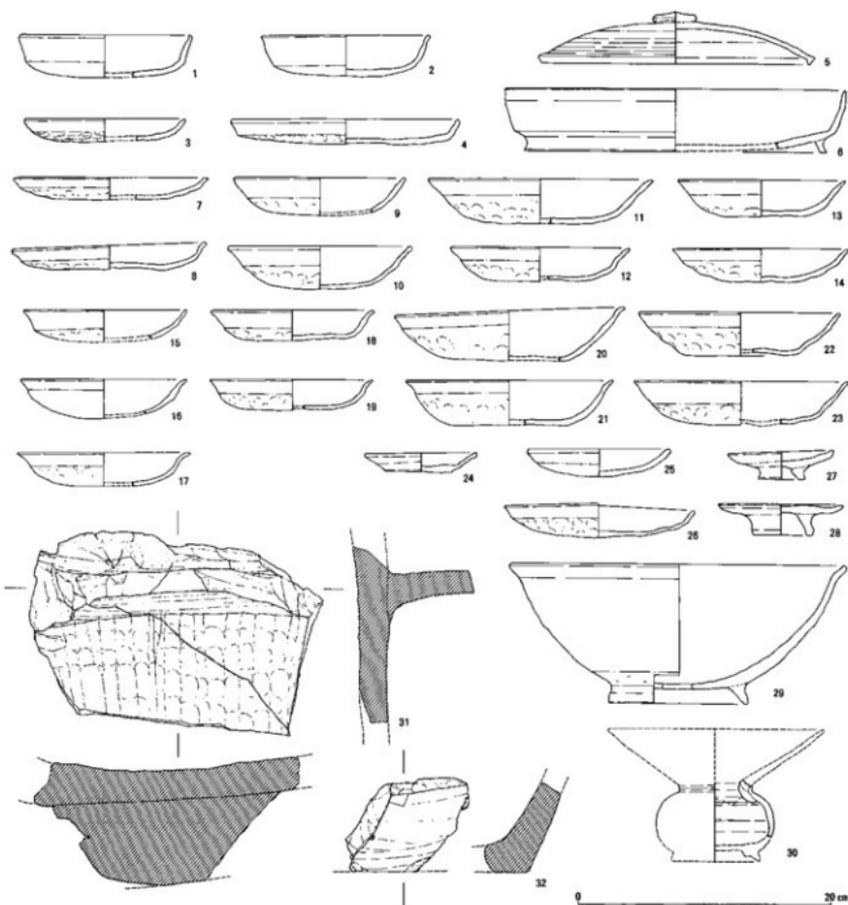
SD7193-7194 いずれも溝幅は約80cm、深さは約20cmと浅く、埋土は黄灰色土である。溝の方向はSD7193では東西方向、SD7194では南北方向を示す。

SD7198 溝幅約40cm、深さ約15cmの南北溝でSB7191の西妻柱筋を切るが、出土遺物からは時期を決定するに至らなかった。

### 3. 遺物

今回の調査では遺物整理箱で約80箱分出土したが、大半が包含層及び擾乱溝・土坑に混在する平安時代の土師器片や近世の土師器・陶器片であり、櫛列や掘立柱建物の柱穴からは極少量であった。一方、土坑SK7179・7156・7157や溝SD7154・7181などからはややまとまって土師器杯・皿等が出土したものの、いずれも完形品は少なく、残存度の低い土器破片が多いのが特徴的である。ここでは平安時代初期~後期までの土坑及び溝からの一括資料の中で実測可能な土器を中心に概述することとし、加えて特殊な遺物についても若干触れておきたい。

- (1) SK7179出土土器 平安時代初期のSK7179からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯・蓋・甕等が出土した。土師器杯(1・2)は口径13.6cm~14.0cm、器高3.4cm前後のものである。(1)は口縁部がやや外反気味にたちあがり、端部が内弯する。(2)は口縁部が外方へほぼまっすぐ開くものである。器面の調整はいずれも口縁部をヨコナデするe手法である。土師器皿(3)は口径13.0cmで口縁部がやや内弯気味にたちあがる。調整は口縁部を横ナデし、底部のみヘラケズリするb手法である。(4)は口径18.2cmと大型で口縁部がほぼまっすぐ外方にのび、端部がやや内弯する。調整はe手法である。須恵器杯蓋(5)は口径22.0cm、器高4.2cmで天井部上半にロクロケズリが施される。須恵器杯(6)は推定口径27.0cm、高台径24.0cm、器高5.1cmと大型である。
- (2) SK7156・7157出土土器 平安時代前Ⅱ期とみられるSK7156・7157から出土した土器の大半は土師器杯・皿である。土師器皿(7)は底部と口縁部との境が明瞭でなく断面弓状となり、口縁端部の上方に平坦面をつくるものである。口径は15.6cm、器高1.8cmで調整はe手法である。法量がほぼ似かよった(8)は、口縁部が外反するタイプである。土師器杯は口径14cm前後、器高3.0cm前後で口縁部が外方へほぼまっすぐ開くもの(9・10・13・14)と口縁部がやや屈曲して外反するもの(12)がある。(11)は口径が18.0cm、器高3.1cmと大型である。器面調整はいずれもe手法であるが、口縁部ヨコ



第4図 出土物実測図 S K 7179 : 1～6、S K 7156 : 7～11、S K 7157 : 12～14  
S D 7154 : 15～23、S D 7181 : 24～29、特殊遺物 : 30～32

ナデの範囲は器高の2分の1程度となる。

- (3) S D 7154出土土器 平安時代中期と考えるS D 7154からは土師器杯・皿・甕、須恵器杯・甕、緑釉陶器、灰釉陶器片等があり、遺物整理箱4箱分出土した。土師器杯(15～19)は口径13cm～14cm、器高2.5cm～3.0cmのものである。(21～23)は口径16cm～17cm、器高3.5cm前後、(20)は口径18.5cm、器高4.1cmと大型の部類に属する。器面の調整はいずれもe手法であるが、口縁部の外反も弱くヨコナデの範囲も器高の3分の1程度と狭くなり、体部との区別が不明瞭となる。色調も白っぽいものが多く、器壁も薄手となる。
- (4) S D 7181出土土器 平安時代後期と考えるS D 7181からは土師器杯・皿・台付皿・甕等が出土

したが、ロクロ土師器片が顕著に認められた。(24)は口径9.1cm、器高1.6cmの小皿である。色調は橙色を呈するものの、須恵質と考えられるものでロクロ土師器皿の成形技法と酷似する。(25)は口径11.4cmの土師器小皿である。(26)は口径15.2cmの土師器杯で混入遺物と思われる。土師器台付皿(27・28)は非ロクロ製のもので浅くほぼ平坦な皿部に高台が付くものである。須恵器鉢(29)は口径26.6cm、器高13.3cm、径11.0cmの高台が付く。底径が小さく体部に丸みをもち口縁端部がやや外反する。底部中央には焼成後に外面から径約2.7cmの穿孔が施される。

- (5) 特殊遺物等 緑釉陶器片13点、判読不明の墨書土器片3点、製塩土器片13点、砥石等石製品3点、釘等鉄製品8点、土錘1点、陶棺と考える大型陶器片2点がある。また、包含層からは「寛永通寶」、「寶永通寶」の銅銭が各1点ずつ出土している。

**緑釉陶器唾壺** 緑釉陶器(30)はSD7154から出土した唾壺の体部片であり、猿投産で淡緑色を呈する。体部最大径は9.3cmを測るが、実測図から復元すると推定口径約17cm、器高11cm前後で、台径約7cmの高台が付くものと考えられる。

**陶棺** 須恵質陶棺の破片と考える(31)はSD7168の上面で検出した小ビットで、また、(32)は包含層から出土した。いずれも陶棺身の残欠で全体は不明であるが、粘土板を貼り合わせ、平面長方形を呈する箱型でやや小型のものを想定する。(31)は棺身側面とみられる厚さ2.5cm程の粘土板に幅7.0cm、厚さ2.0cm程の粘土板をほぼ水平に貼り付けて突帯部とすることから棺蓋受け部と考えられる。また、左側端部に貼り付けとみられる粘土痕跡が残ることから棺身上部角付近と思われる。外面調整は貼付突帯上部では横方向のナデ、突帯部上面は板ナデのまま端部から下面にかけてはナデ、下部は指オサ工後、縦方向のナデ仕上げである。内面の上半は横方向の板ナデ、下半は横方向のナデを施している。(32)は棺身底部と考える破片で底部粘土板の厚さは2.8cm、棺身部は厚さ2.0cm程で、調整は内・外面ともナデ仕上げである。これらの破片はいずれもオリープ灰色を呈し、よく焼成されて堅緻だが、胎土には砂粒を多く含む。なお、県内における陶棺の出土例は非常に少なく、上野市佐那具町御墓山窯跡出土の陶棺などが知られる程度だが、今回出土の陶棺では蓋受け部とみられる突帯部の形態が異なるなどの違いもあり、これらを陶棺とするかどうかも含め検討を必要とする。さらに斎宮跡ではこれまで報告例はないものの、過去の出土遺物の中に類似する陶器片が存するとの指摘もあり、今後の調査研究と資料整理に期待したい。

4. まとめ 今回の調査では、方格地割の鍛冶山西ブロック西辺部で南北櫛列SA1411・2675の南側延長部分を確認し、この東側で新たな南北櫛列SA7150・7170や大型掘立柱建物を検出したことである。これらの発見によりこの区画内の様相が明らかとなった点では貴重な成果であったといえよう。なお、今回の調査結果について、これまで周辺で実施した調査成果を含めて再検討することとした。

**外郭の櫛列(外櫛)** 調査区西辺で確認した2条の南北櫛列は第44次調査で検出したSA1411・2675の南側延長部分であり、それぞれ28間、27間以上続くことがわかった。柱間はいずれも2.95m等間である。これらは方格地割鍛冶山西ブロックの西限に相当する南北区画道路東側溝SD2670の東側約7.0m(24尺)で並行し、このブロック全体の内側を取り囲む外郭の櫛列(以下外櫛とする)で板塼と考えられる。柱穴の切り合いより古い方からSA1411→SA2675であることが判明しているが、調査区南北西側では平安時代初

期とみられる土坑SK7179がSA2675の柱穴に切られ、しかもSA1411の柱穴を土坑底面で検出したことから、SA1411はすくなくとも平安時代初期までで、SA2675はそれ以降に建て替えられたものとみられる。

**内郭の櫓列（内櫓）** 一方、今回調査区中央で新たに発見した南北櫓列SA7150・7170は外櫓に囲まれた区画内にさらに画する内郭の櫓列（以下内櫓とする）と考えられ、外櫓同様に板敷を想定する。SA7150は西辺に相当する外櫓SA1411の東側約24m（80尺）、SA7170はSA2675の東側約28m（95尺）の間隔をおいてそれぞれ並行して6間分を検出したが、柱間はいずれも2.95m等間を測る。これら櫓列の柱穴からは出土遺物が乏しく明確な時期を決定することはできなかったが、外櫓と内櫓の柱穴の埋土がそれぞれ酷似することや各外櫓の柱通りと並行して内櫓の柱通りが対応することなどからSA1411にはSA7150が、またSA2675にはSA7170が併存するものとする。

SA7150は、南北方向にさらに延長するものとするが、今回の調査区から線路を挟んで北側の第29次・第44次調査区で、この北側延長上に位置する南北方向の柱列（SB2705）3間分があり、これをSA7150の延長部分と考えるならば少なくともさらに9間分は続くものと思われる。しかし、この調査区東端の遺構検出状況から土坑等の重複で北側へ延びる柱穴が明瞭にできなかったとするならば、外櫓の北辺に相当するSA6760までさらに延長する可能性も少なからず残っている。

SA7170については、SA7150同様に線路を挟んで北側の第29次調査区で検出された南北方向の柱列（SB1427）1間分がこの北側延長線上にあることが判明した。このことから北側へは少なくとも14間分延びるものと考えられ、確認できた総延長としては20間分に及ぶ。SA7170は第98次調査検出の区画溝SD6810と左右対称の位置関係を呈するものと考えられ、これを確信する結果となった。しかし、柱列SB1427に先行する柱列SB1428が今回の調査区では確認されなかったものの、同一線上に存在するSA7171・7172の延長を含め、今後の検討課題となった。

**柱穴の規模・形状等** 今回検出した4条の外・内櫓の柱間はいずれも2.95m等間であるが、外櫓の新旧で柱掘形規模に違いがみられる。SA1411は一辺0.8m～1.0mの方形だが、SA2675では一辺0.9m～1.1mの方形となってやや大型であり、相対的に旧→新で小→大へと変化する。この状況は第98次調査検出のSA6760とSA6780でも同様に認められた。内櫓では新旧によるこの規模の相違はみられないが、いずれもSA1411よりは大きい。

また、柱穴底面を絶対高でみると、外櫓2条と内櫓SA7170では高低5cm程度の差があるものの標高9.7mではほぼ一定である。SA7150では底面高でややばらつきがみられ、標準的標高約9.5mに対して約20cmの高低差がある。因にSA6760とSA6780では柱穴底面の起伏が顕著であり、20cm～40cmの高低差が認められる。

**櫓列の変遷** 第98次調査では櫓列の新旧関係から大きく2つの配置を想定して概説したが、今回の調査結果により櫓列の変遷をⅠ期（奈良時代～平安時代初期）、Ⅱ期（平安時代前Ⅰ期～前Ⅱ期）として考えていきたい。

**Ⅰ期** Ⅰ期では外櫓の南辺は現時点で不明だが、北辺SA6760、西辺SA1411、東辺SA6770で構成される一辺400尺（約117.6m）の囲みが存在する。さらにSA2800によって東側に160尺（約47.5m）張り出した形状となって北辺が最大560尺（約165m）となる長方形の区画が想定される。内櫓SA7150は西辺SA1411の内側80尺で並行するが、

これに対して東辺 S A 6770 から張り出す S A 2800 が 2 倍の距離に相当する 160 尺で並行し、欄列の規格的配置が目される。

## II 期

II 期では東側の張り出し部分がなくなり、1 辺 400 尺で構成される外欄がそれぞれ建て替えられて北辺 S A 6780、西辺 S A 2675、東辺 S A 6790 となる。また、この囲みの東側には南北区画道路が延長され、この区画の整備がほぼ完成されたものと考えられる。内欄 S A 7170 は西辺 S A 2675 の東側 95 尺で並行し、欄列の北側延長線上が北辺 S A 6780 の柱穴には直接取り付かないことも予想される。

**建物の規模・形状等** 掘立柱建物の中で全体規模が把握できたものとして S B 7155・7160 がある。いずれも柱間が 10 尺 (3.0m) で掘立柱建物の柱間寸法としては最大である。したがって 5 間×2 間の S B 7160 はこれまで検出した建物の中でも最大規模を有する。柱掘形の規模は一辺約 1.2m の方形で欄列の柱掘形よりも大きい。柱穴底面の絶対高では、S B 7155 が標高 9.2m~9.3m、S B 7160 では 9.3m~9.4m を測り、欄列の柱穴底面よりも 30cm~50cm 深く掘削したことが窺える。また、これらの建物周囲を巡る溝や S B 7155 の西妻柱筋の延長線上に取り付くと想定される欄列を検出したことは建物の様相を知るうえで貴重な発見といえるだろう。

**掘立柱建物群の変遷** 掘立柱建物の時期については、柱穴からの出土遺物が細片かつ微量のため、明確な時期区分が困難であったが、欄列との対応関係及び建物の新旧関係や規格的な配置を考慮し、建物群の変遷を想定した。また、内欄の西側と東側では建物配置が異なっており、中心施設の存在を予想する東側ではさらに建物配置を検討する必要がある。したがって、欄列の変遷を I 期、II 期と対応させ、掘立柱建物の配置をそれぞれ a、b に区分して考えることとした。

I-a 期では内欄 S A 7150 の西側で東西棟の S B 7155・7160 が 40 尺の間隔において南北に並び建つ。S A 7150 の東側では南北棟の S B 7165、東西棟の S B 7175 が配置される。S B 7175 を除いて他はすべて柱間が 10 尺等間であることが特徴である。

I-b 期では S A 7150 の西側は S B 7155・7160 が存在し、東側のみ建て替えられて南北棟の S B 7180・7185 となる。

II-a 期では S A 7170 へと推移し、西側では S B 7155 の建物規模は変えずに柱間を縮小して 5 間×2 間とした S B 7190 が建てられるが、第 44 次調査で検出した同規模の東西棟 S B 2680・2685 を含めこの 3 棟が 40 尺の間隔において規則的に配置される。また、S A 7170 の東側では東西棟 S B 7195 が配置される。

II-b 期では S A 7170 の西側で S B 7190 が S B 7191 に建て替えられ、東側では南北棟の S B 7196 となる。

以上、主要遺構となる欄列と掘立柱建物群を中心に概述してきたが、今回新たに発見した内欄 2 条によって方格地割の中核部とされる鍛冶山西ブロックがさらに細分化され、複雑な様相を呈することとなった。また、中心施設の範囲がこの内欄の東側へ展開することが予想されるなど、この区画を考えるうえでは極めて貴重な調査結果になったといえよう。斎宮跡の実態解明に向けて課題は多いが、鍛冶山西ブロックが重要な鍵を握っているものと思われ、今後の発掘調査の進展がよりいっそう望まれる。

(野原宏司)

《参考文献》・笠井賢治「御墓山窯跡出土の陶製仏殿(厨子)」『1994年度上野市文化財年報1』上野市教育委員会1995



### Ⅲ. 第107次調査

6ABI-O (中垣内地区)

1. はじめに 平成6年度第2回目の計画調査である第107次調査は、史跡西部の台地縁辺部にあたる大字竹川字中垣内で、平成6年7月18日から11月15日にかけて面積530㎡を対象に行った。調査地は齋宮歴史博物館から南西へ約400m、近鉄山田線の北側で現況畑地に立地する。

この調査地周辺は、齋宮跡が発見されるきっかけとなった地域で、当時は古里遺跡と呼ばれる遺跡であった。これまでには昭和55年度第30次調査、昭和56年度第36次調査、昭和60年度第58-4次調査、平成2年度第85-8次調査、また平成5年度第100次・第102-5次調査などが行われている。調査の結果、飛鳥時代～奈良時代にわたる竪穴住居や掘立柱建物、平安時代末期～鎌倉時代の遺構が分布することが確認されている。

遺物では三彩陶器や円面硯、銅製鈔帯鉈尾などが出土しており、奈良時代の齋宮において重要な地域である。

これらの調査から、飛鳥時代の柵列(第58-4次調査 SA4281・4282、第85-8次調査 SA6280)による囲みの様子、また奈良時代の柵列(第30次調査 SA1674、第100次調査 SA6940～6942)による囲みの様子が次第に明らかになりつつあるが、それらに伴う掘立柱建物およびその配置等は依然として不明確である。

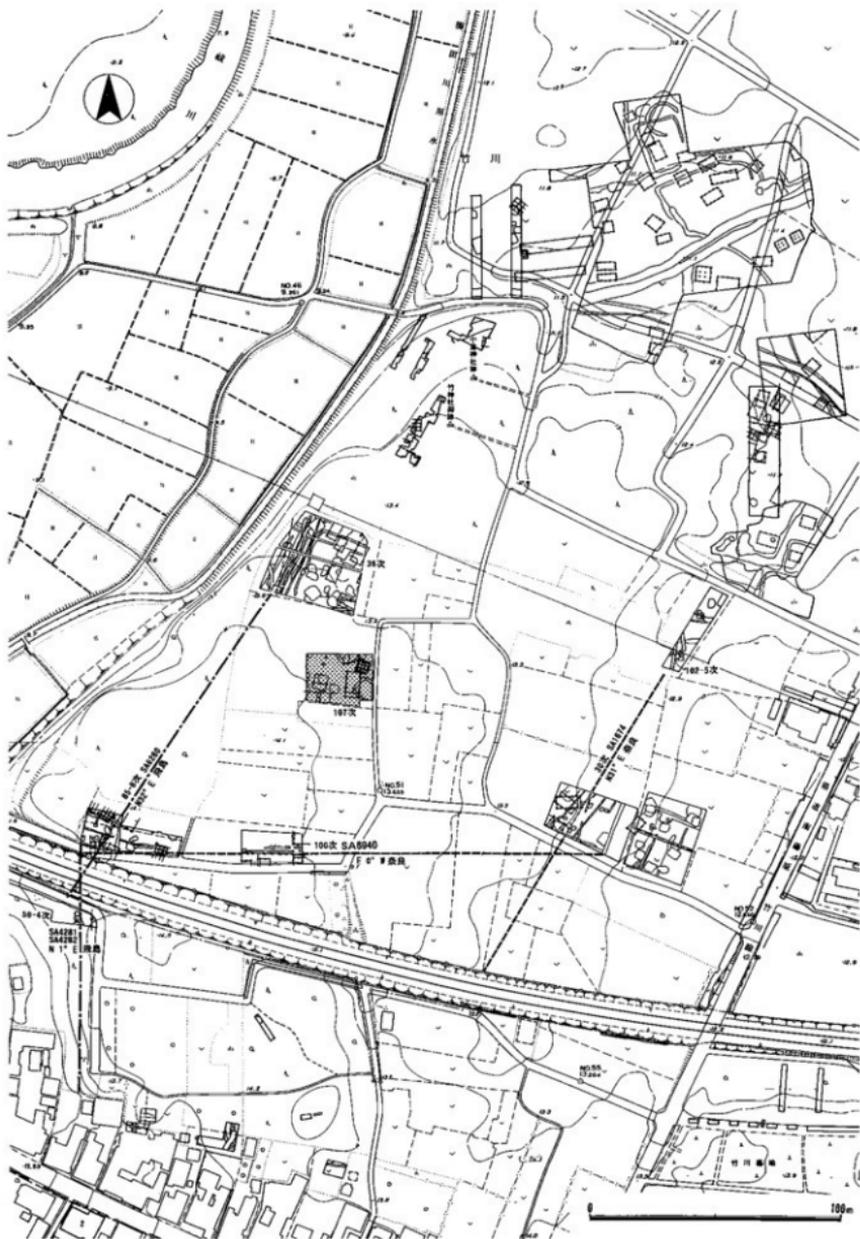
今回の調査は、そうした齋宮の成立期・終末期の様子を考える上で、今まで断片的であった面的な調査を昨年度の第100次調査に続いて実施し、遺構の実態を明確にすることを目的として行ったものである。

2. 遺 構 調査区は、東西26m、南北20mを設定し、基本層序としては上層より表土(灰黄色土厚さ25cm～30cm)、遺物包含層(灰褐色土厚さ30cm～35cm)、地山(黄褐色土)で、調査区東南隅のみ部分的に地山上層に黒色土がみられた。

遺構はすべて地山面で検出している。調査の結果、弥生時代中期の方形周溝墓2基、土坑1基、奈良時代の柵列1条、竪穴住居6棟、掘立柱建物11棟、溝6条、土坑4基、鎌倉時代の掘立柱建物2棟、溝3条、井戸1基、土坑1基、土坑墓2基、時期不明の掘立柱建物1棟、井戸1基を検出した。

	遺 構 の 種 別							
	SA	S B				S D	SE	S K
弥生時代							7202	7200 7201
奈良時代 中期	7209	7205	7208	7210	7215	7223	7224	7214 7217 7218
		7216	7219	7222	7225	7236	7237	7220
		7226	7227	7228	7229	7238	7239	
		7230	7231	7232	7233			
		7234						
鎌倉時代		7207	7221		7203 7211 7212	7204	7213	7240 7241
時期不明		7235				7206		

第3表 時期別遺構分類表



第6図 調査区位置図 (1 : 2,000)

(1) 弥生時代中期の遺構 方形周溝墓2基、土塚1基がある。

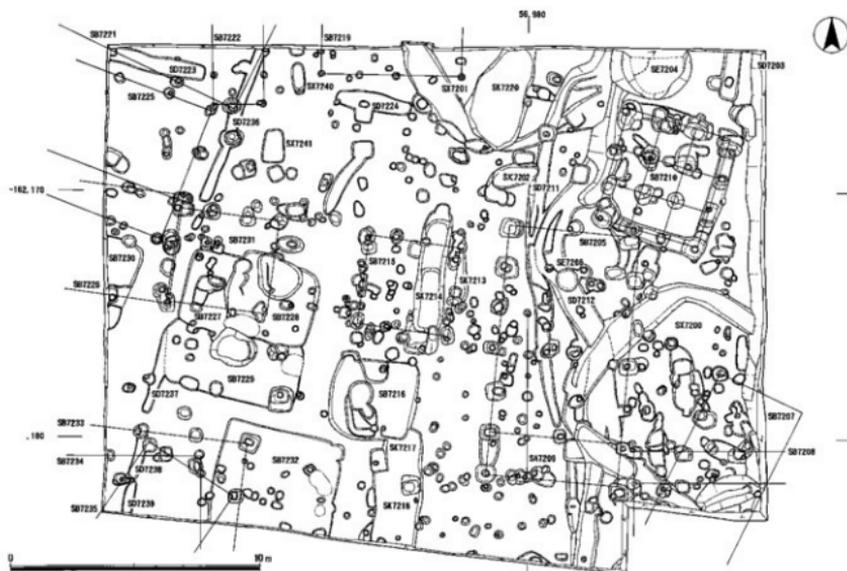
S X 7200 調査区東南隅で検出した方形周溝墓で、周溝の内肩間で北東-南西辺は約7mだが、北西-南東辺は調査区南東隅にかかるため明確に検出し得なかった。溝の幅は、各辺中央部が幅広く1.3m、各コーナー部分の溝幅は狭く0.7mとなる。周溝の北コーナーで弥生土器の壺(10)が口縁部を北に横転した形で出土した。また西のコーナー付近で同じく弥生土器の壺(9)が出土している。

S X 7201 調査区の北端に南西辺と東南辺の周溝を検出した方形周溝墓で、S X 7200と同じく溝中央部で1.3mと幅広く、南のコーナーで0.5mと溝幅が狭くなる。推定規模は北東-南西辺で約6m、北西-南東辺については確認できていない。ここでは、弥生土器の壺が出土している。北から(5)、(6)、(7)の順で各々1.5mの等間隔で並んでおり、(5)は調査区壁面で確認した時点で既に破損していたが、(6・7)は完形でいずれも横倒しになっていた。また据えられた様子は窺えない。

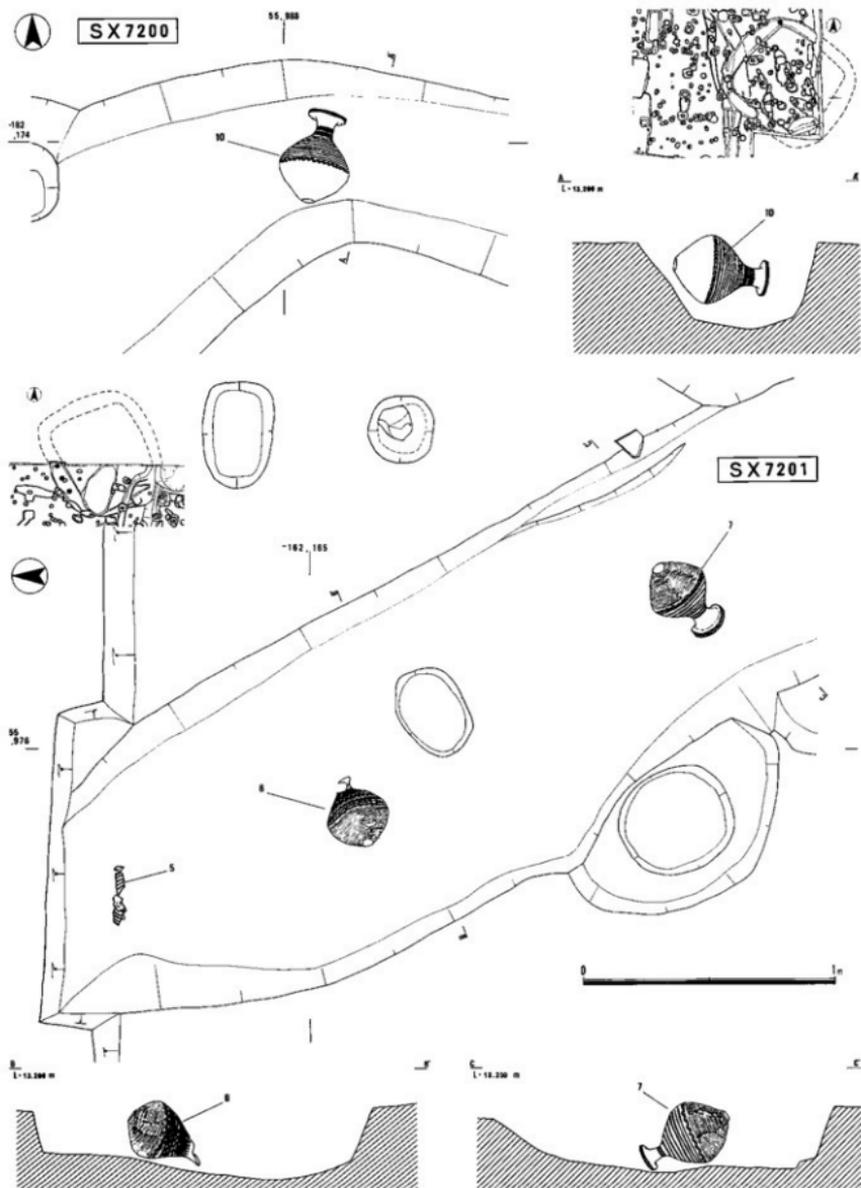
S K 7202 この土塚からも破損はしていたが完形で復元できる弥生土器の壺(8)1個体分を出土している。長径2.0m、幅90cmを呈する長楕円形土塚である。

(2) 奈良時代中期の遺構 竪穴住居6棟、掘立柱建物11棟、櫓列1条、溝6条、土塚4基がある。

S B 7205 調査区東半で検出した5間×2間南北棟の掘立柱建物で、南面に庇をもつものと考えられる。柱掘形は一辺70cm~80cm、柱の直径は30cm~40cmで、調査区内では比較的大型の建物といえる。また若干方位を違えるものの、北妻通りの延長と北桁行筋を、S B 7226に南妻通りをS B 7233にほぼ揃えているのでこれらは同時に建てられていた可能性が考えられ、後述のS B 7210より新しく建てられたものと思われる。



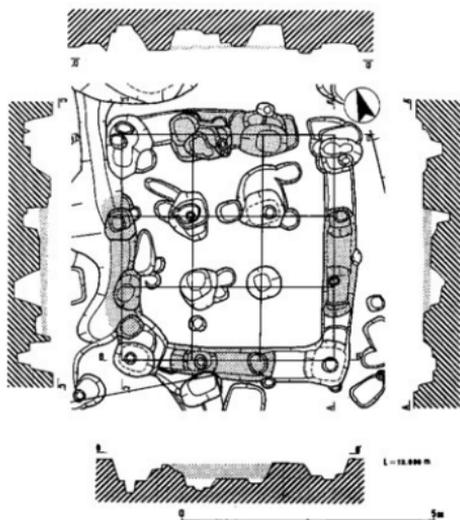
第7図 遺構実測図(1:200)



第 8 圖 S X 7200・7201 遺物出土狀況測圖 (1 : 20)

次数	遺構番号	建物時期	規模	種別
64-3	SB4675	奈良	3×3	総柱
66	SB4410	奈良後	4×2	側柱総布掘
68	SB4560	奈良前	3×3	総柱
68	SB4561	◇	(1)×-	(総柱)
83	SB5800	平安初	5×2	側柱
85-8	SA6280	飛鳥	(7)	橋列
88	SB6238	奈良後	3×3	総柱

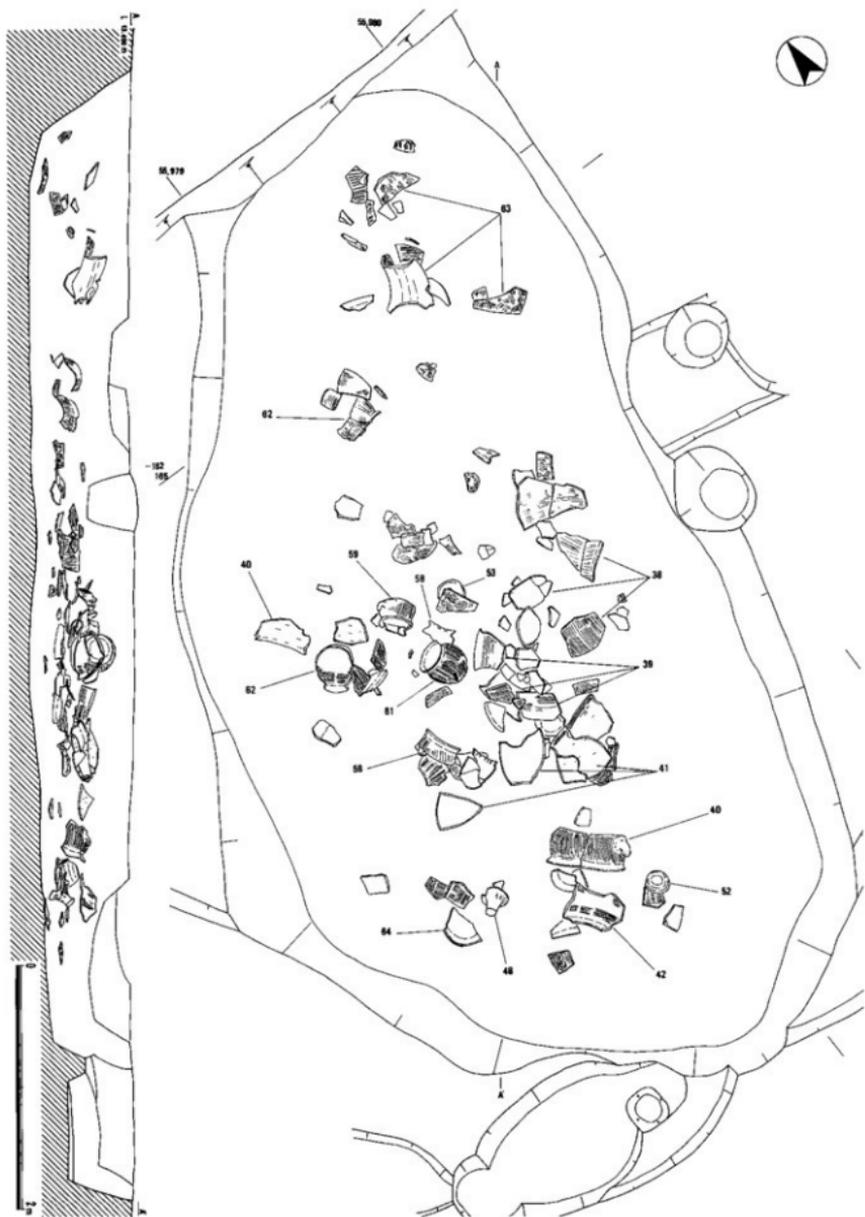
第4表 斎宮跡布掘状掘形建物一覧



第9図 SB7210 遺構実測図(1:100)

S B 7210 調査区の北東隅で確認した3間×3間の総柱建物で、桁行1.5 m前後、梁間1.4 m等間である。この建物は、深さ10~12cmの溝が側柱を一周巡る布掘状掘形をもつ(ただし北東隅のみ陸橋として溝を連結させない箇所をつくる)もので、斎宮跡でも8例みられる布掘状掘形をもつ建物の一例ではあるが、他例と特に異なるのは、一段下げた溝の中にさらに各辺中央2本分の柱掘形を溝状に10cm~25cm下げたから1本ずつの柱掘形を各各つくっていることである。斎宮跡でこれまで検出している布掘状掘形をもつ建物は、上表のとおりである。今回のように三段構えの布掘状の掘形をもつ例は他県の検出例を併せて考えても初めてである。また布掘状掘形から多量の土錘が、北西隅でS X 7201と切り合っているため柱掘形内からは弥生土器壺の比較的大きい破片(24)が出土している。

S K 7220 調査区北辺中央、方形周溝墓S X 7201に重複して検出した長楕円形の土塚である。底部までの深さは40cmであるが、遺構面から約20cmのところまで直径60cmの半円形に囲む石組みがみられる焼土面が現れた。その焼土面上からは鎌倉時代の遺物とフィゴの羽口が出土し、焼土中に第10図の様に奈良時代中期の土器が散在していた。その焼土を除去しながら遺物の状況を記録していったところ、遺構面から約30cmで底が現れたが、土塚底部まで焼土は達していなかった。出土遺物は、土師器杯・高杯・甕と須恵器杯・杯蓋・平瓶・線刻文字のある甕、大型円面硯・甕・鍋などがある。この奈良時代の土塚の出土遺物には、完形に復元できるものが極めて少なく、その出土状況、遺物の復元後の状況からみても廃棄土塚であろうと考えられる。また焼土面はこの土塚の上に石組みを伴った屋外炉のような施設を後世につくったものと思われる。



第10図 S K 7220 遺物出土状況実測図 (1 : 20)

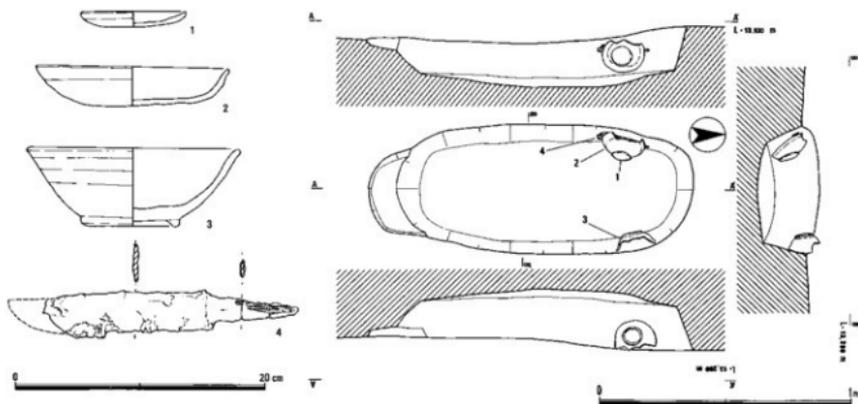
S K 7214 調査区中央にある長径2.6m、短径1.4mの土坑である。遺構面からの深さは60cmとやや深いもので、出土した遺物には土師器・須恵器の甕類が多く、またフィゴの羽口や鉄滓が多く出土している。埋土中に焼土はみられなかった。

S D 7223・7224・7236～7239 幅40cm～60cm、深さ9cmの浅く断続的に続く溝で、S D 7223・7224とで東西辺を、S D 7236～7239までの溝で南北辺を構成した、区画線として敷かれたものと思われる。東西辺ではほぼE20°S、南北辺ではほぼN20°Eと直交する傾きを示し、この方位にS B 7225が棟方向を合わせて建つものと考えられる。

(3) 鎌倉時代の遺構 掘立柱建物2棟、溝3条、井戸1基、土坑1基、土坑墓2基がある。

S E 7204 調査区北辺に接して検出した井戸で、北側3分の1ほどは調査区の外へ続いているため検出できていない。最大径3.2mで、25cm下げたところで直径を2.5mに狭め、壁面はオーバーハング状に抉られているため、遺構面から約1.2mまで下げて掘削を止めた。出土遺物は、鎌倉時代の土師器皿、山茶碗が多量に入っていた。

S X 7240 長径1.2m、短径0.5mの長楕円形の土坑墓である。土坑の北寄り東壁面に山茶碗(3)が、同じく北寄り西壁面に鉄製小刀(4)が壁面に貼りついた状態でその上に土師器の皿(2)、さらにその上に土師器小皿(1)が重なって出土した。この土坑墓上面あるいは周辺からは多くの青磁・白磁が出土している。土坑の形状は異なるものの副葬品の種類としては斎宮駅北側周辺で検出される土坑墓と類似している。

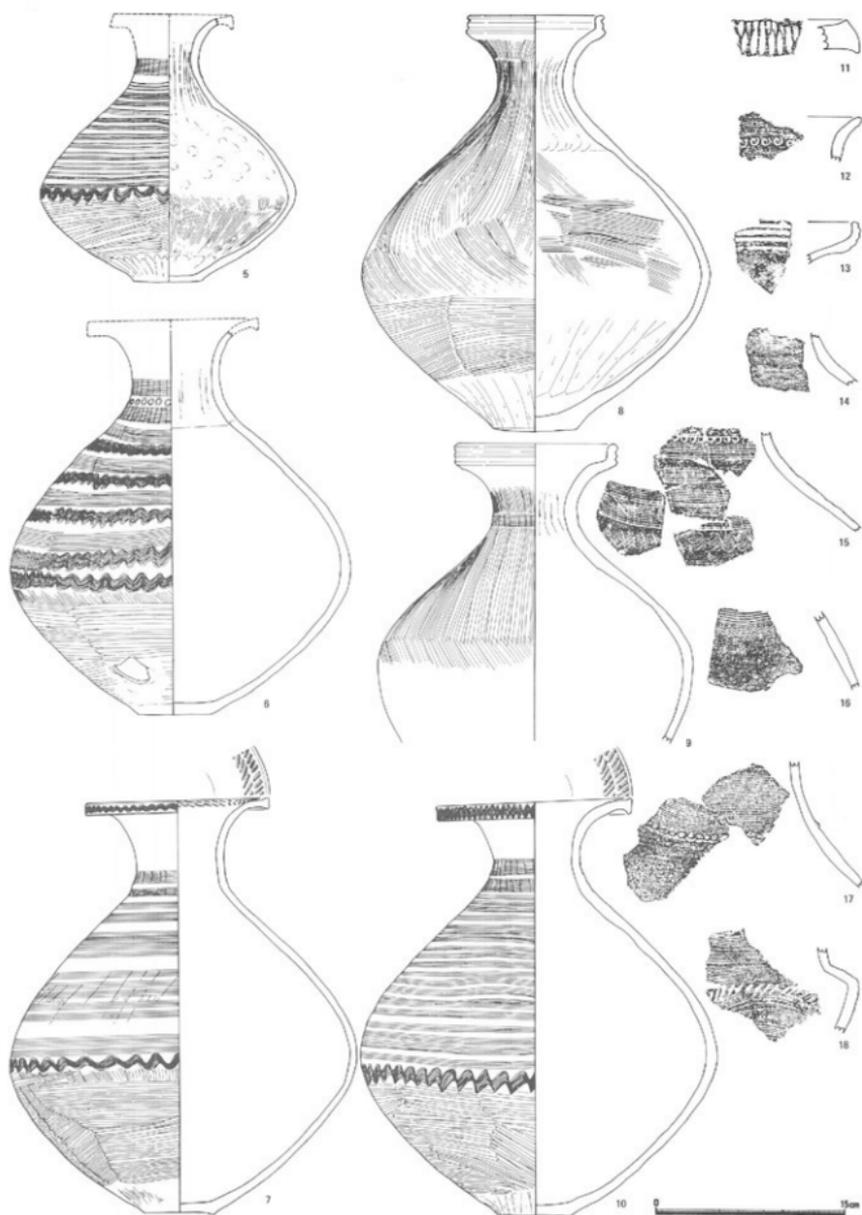


第11図 S X 7240 遺構(1:20)・遺物(1:4)実測図

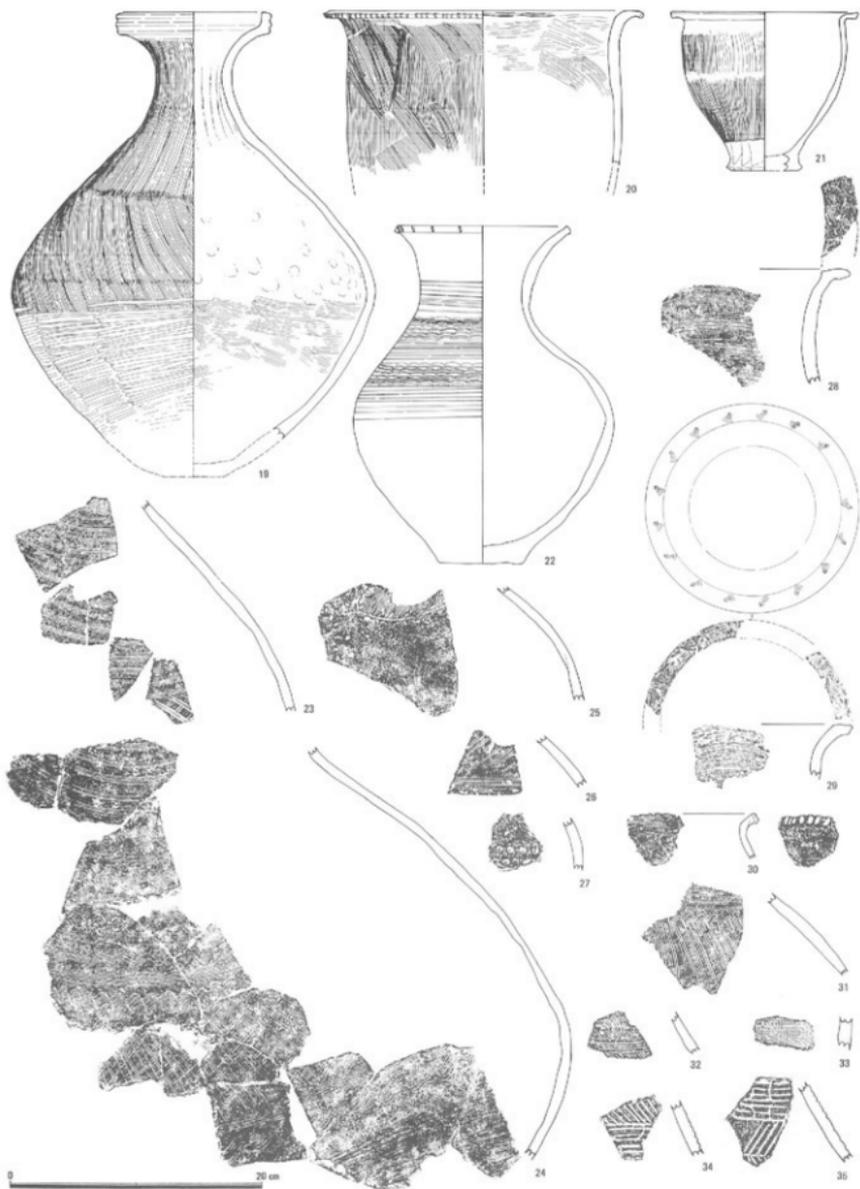
S X 7241 S X 7240の南西1.5mに隣接している、長径1.4m、幅0.8mの隅丸長方形の土坑墓である。S X 7240に比べ遺構面から底部までの深さが12cmと浅いが、土師器小皿が2枚～3枚ずつ重なった状態で、十数枚出土した。その他に副葬品と思われる遺物はないが、S X 7240のすぐ南側に位置することからこのS X 7241も土坑墓と考えられる。周辺ではS X 7240と同じように、青磁・白磁が多く出土している。

### 3. 遺物 主に、遺構に伴って出土した土器についてその概要を述べる。

- (1) 弥生時代の遺物 (5~7)はSX7201の出土土器である。(5)は口縁端部を欠損しているものの、胴部最大径20.2cm、底部径5.5cm、残存高21.4cmと今回出土した中でも小型の壺で、残存状況も良好である。頸部に簾状文1段、体部上半は櫛描横線文12段、波状文1段、体部下半にヘラミガキ、内面にはタテハケがみられる。(6)は(5)の南1.5mで出土したもので、同じく口縁端部を欠損している。残存高31.0cm、胴部最大径27.2cm、底部径5.6cmの壺で頸部に簾状文1段・竹管文1段・簾状文1段、体部上半に櫛描横線文と波状文を交互に4パターン、最後に2段の波状文を巡らせる。下半にはタテハケの上から横方向のヘラミガキを施す。胴部内面はハケ、頸部以上はナデである。さらに(6)の南約1.5mに出土した(7)は、器高33.7cm、口径14.6cm、胴部最大径27.6cmの壺で、口縁内側に連続刺突文2列、口縁側面に波状文1段、頸部に簾状文2段、体部上半にタテハケの上から櫛描横線文12段、波状文1段、下半に同じくタテハケ上から横方向のヘラミガキを施す。胴部内面はハケ、頸部以上はナデである。SX7202出土の(8)は器高33.8cm、口径10.6cm、底部径6.4cm、胴部最大径が27.6cmの壺で、口縁部外面に凹線文、頸部以下体部上半にかけてタテハケ、下半は横方向のヘラミガキ、底部から4.4cm上方のみ縦方向のケズリを施す。内面は底部に縦方向のケズリ、胴部に横方向のハケ、頸部にはシボリ痕がみられる。(9・10)はSX7200の周溝内、北と南の隅で出土した壺で、(9)は口径12.9cm、胴部最大径25.3cm、残存高24.9cmで周溝南隅より出土した。また調整が(8)に類似しており、頸部に1段簾状文が入り、胴部最大径部分でタテハケの方向を右下へのハケへ変換している他は(8)と同じ構成である。(10)はSX7201の(7)とほぼ同寸大、酷似した文様構成のもので、櫛描横線文が19段とやや多く櫛描横線文下のタテハケがみられない他は(7)と同じである。壺体部のみしか復元できなかった(23・24)はいずれもSX7201の遺物であったものが後世のSB7210、SK7220に混入したものと考えられる。櫛描横線文を12段あるいは櫛描横線文と波状文を交互に5パターン繰り返したあとに櫛描の斜格子文を胴部上半まで施すものである。その他包含層出土の遺物として(25)は壺の体部に線刻で絵を描いたようにみえる模様をもつ。残念ながら破片が約10cm四方の小片であるために全容を窺うことはできない。(28・29)は口縁上面端部に類似した施文を行うもので、(28)は幅2.4cmの端部上面に扇形文と波状文を施す。(29)は幅1.5cmの端部上面に同じく扇形文を2.8cm等間隔で口縁全周16箇所に施したものと推定される。また櫛描横線文と扇形文の組み合わせ(32・33)、疑似流水文と斜行文(山形文の一部か)を施した破片(34・35)がみられる。
- (2) 奈良時代中期の遺物 SK7220で出土した土器を(36~64)までにおけるが、完形のは2個体しかなく、いずれも欠損品ばかりである。出土状況からみても、いずれも廃棄された土器であると思われるが、(63)の須恵器大型甕の口縁部内側に焼成前に線刻したと思われる文字がみられるが、判読は不可能である。
- (3) 特殊遺物 (64)の須恵器円面硯は硯面3分の1のみ残存し、推定される硯面の直径は18.4cmである。脚部は欠損しているため推定復元をしているが、脚部透かしについては、上面幅が1.5cm、透かし毎の間隔は2.0cmで計17本の方形透かしが入るものと考えられる。斎宮跡で出土した中でも大型硯の部類に入る。その他、製塩土器1点、土師器ミニチュ



第12図 出土遺物実測図 S X 7200 : 5~7、S K 7202 : 8、S X 7201 : 9・10、その他 : 11~18

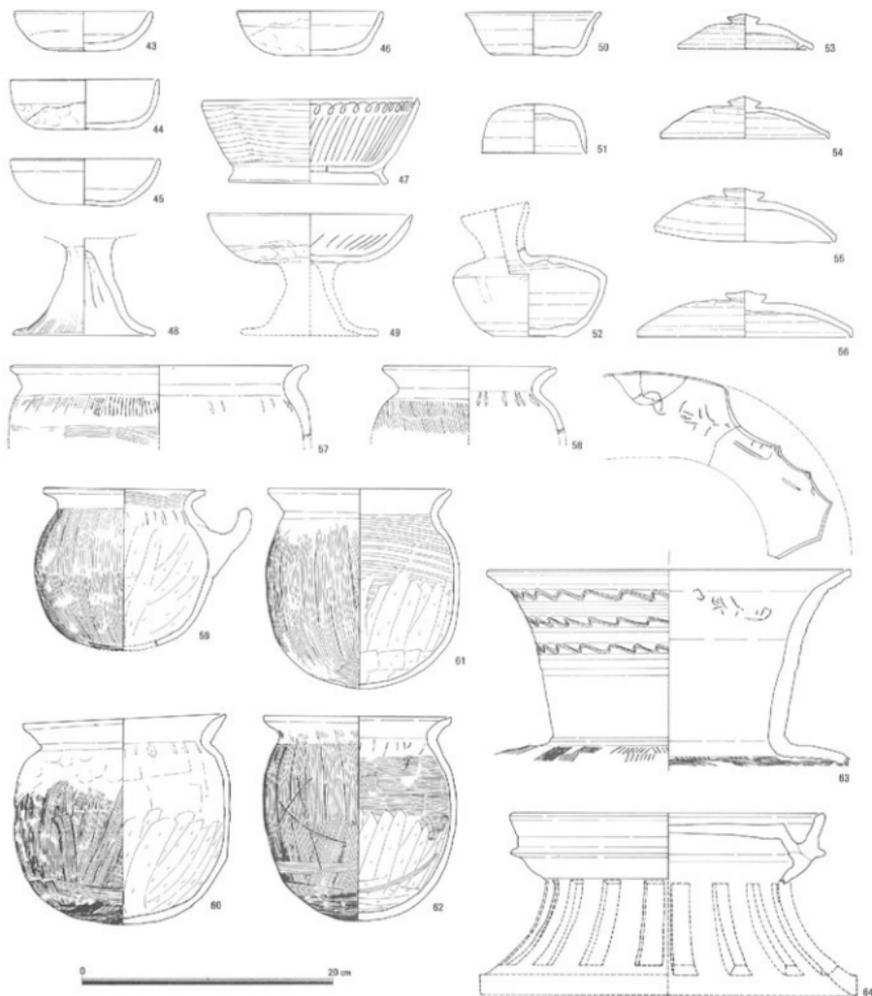


第13図 出土遺物実測図 S B 7210 : 24・26・27・31、S K 7220 : 23、S B 7215 : 33  
 その他 : 19~22・25・28~30・32・34~35



第14図 出土遺物実測図 S K 7220

ア1点、墨書土器山茶碗（「大」か）1点、SK7220及びSK7214から出土したフイゴ羽口7点、石製品として石鍋・スクレイパーなどがある。土鍾は36点と多量に出土しており、そのうち22点がSB7210から出土していて、土鍾は主に幅0.8cm～1.2cm前後、長さ5.5cm～5.8cmの細口のものである。今回鎌倉時代の遺構はあまり多く検出されなかったが、青磁が24点、白磁が16点と、齋宮跡全体のなかで比較的多く輸入陶磁器を出土する古里地区においても調査面積に比して高い出土率を示すものである。青磁は主として龍泉窯系のもので、白磁には壺の底部破片2点、四耳壺とみられる口



第15図 出土遺物実測図 SK7220

緑破片が1点ある。SB7226上面あたりから、須恵器の獣脚であろうと思われるものが1点出土しているが、脚中央部径3.8cm、底部径5.0cm、残存高9.0cmを測る。ヘラ状工具によると思われる5面の面取りを施し、粗略ながら爪先の表現がなされている。かなりの大型製品の脚部であろうと考えられる。緑釉陶器は今回の調査区内からは1片のみが出土している。

4. まとめ 今回の調査で明らかとなった方形周溝墓と飛鳥・奈良時代の様相について概述する。

- (1) 方形周溝墓の分布 祇川段丘上の台地縁辺部の今回調査地周辺における方形周溝墓の分布状況をみると断片的な調査しか行われていないが、平成5年度第102-5次調査においてはほぼ同規模とみられる弥生時代中期の方形周溝墓SX7100が検出されている。そのほか古里地区・斎宮歴史博物館周辺にも同時期の方形周溝墓群の分布がみられるが、この一群は、いずれも四隅に陸橋をもつもので、第107次及び第102-5次調査地周辺のものとは形状の上でも、また分布地においても、古里地区の中でもまた別の一群である方形周溝墓・集落を形成していたものと思われる。この二群の間約240mの間には、古墳時代になると円墳・方墳約40余基からなる塚山古墳群が形成されることになる。
- (2) 飛鳥・奈良時代の柵列 本調査の目的である、飛鳥・奈良時代の柵列による囲みの実態であるが、残念ながら今回その囲みを構成した柵列本体の検出はできなかった。調査で確認した掘立柱建物のうち、正方位にのせた奈良時代の掘立柱建物・柵列はほぼ調査区内全域に分布しており、正方位にのせた柵列等の区画施設によってこれらは画される可能性が高いと考えられる。一方、N31°~32°Eの方位に揃える掘立柱建物は今回の調査区では1棟しか検出しておらず、その方位の区画施設の影響を直接的に受けない場所に建つ建物であろうかと思われる。

第58-4次調査のSA4281・4282と第85-8次調査のSA6280でつくる約147°に開いた飛鳥時代の囲み、あるいは第30次調査のSA1674と第100次調査のSA6940等でつくる約149°に開いた奈良時代の囲み、いずれの柵列からも正方形あるいは長方形の平面構成をした施設を予測するのは困難である。

そこで、囲みの一角にこうした鈍角の開きをもつ不等多角形の囲みを構成していたか、あるいは各々独立した柵列で未調査地にそれぞれの対辺となる柵列があるのかということが考えられる。いずれにしても柵列の規模が決して小さいものではないので、構成される施設も極端に小規模なものを考えるのは不自然であるということと、構成される施設が必ずしも正方形もしくは長方形という直交する対辺ばかりで構成されているのではなく、一部に不等多角形の辺をもっているかもしれないという可能性が皆無ではないということが考えられる。

以上のことから、調査区周辺の飛鳥・奈良時代の柵列による囲みを解明する上で、面的な調査による十分な資料がまだまだ不足しているために、実態の様相が不明確のままであるが、今後もさらに計画的な調査を実施していくことが、この地域を解明していくためにも必要となってくるものと思われる。今後の調査による資料の蓄積を待つて検討することにした。

(赤岩 操)

## N. 第108次調査

(6AEQ-C 柳原地区)

1. はじめに 平成6年度最後の計画調査は、昨年度に実施した第103次調査の東に続けて調査区を設定した。史跡東半に想定される一辺約120mの方形区画を基調とする平安時代前半の方格地割において、その中心部分と想定される地域には大規模な柵列（板塀？）によりさらに内側が画される区画が存する事が明らかとなってきている。その中でも第44次・第98次・第105次調査などによって明らかになりつつある鍛冶山地区の区画（鍛冶山西ブロック）では他に例をみない平安時代初期前後の東西で約165mの規模の柵列、さらにそれを建て替えて造られた東西約118mの柵列の区画が発見され、その内部では規則的な配置を持ち、齋宮跡のこれまでの調査で最大級のものも含む大型の掘立柱建物がみられるなど、齋宮跡25年の調査の中でも極めて重要な区画であり、平安時代前半の齋宮内院の一面である可能性が考えられている。

それに対して、この西に隣接する牛業東ブロックでも第44次調査の成果を受けた第103次調査で、やはり大型の柵列の北西隅の部分が発見され、第10次調査の成果とも合わせて東西107m×南北95m（360尺×320尺 1尺=29.6cm～29.7cm）の柵列区画が現在の竹神社の社殿地を囲むように巡ると推定されるようになった。これは鍛冶山西ブロックに次ぐ規模のものであり、また明治44年に合祀された式内社竹神社あるいは近世以前に溯っても参宮街道沿いにあつて山林として残されてきた特殊性を窺わせる区画である事から、この区画もまた平安時代の齋宮を考える上で極めて重要なポイントであると考えられる。



第16図 調査区位置図（1：2,000）

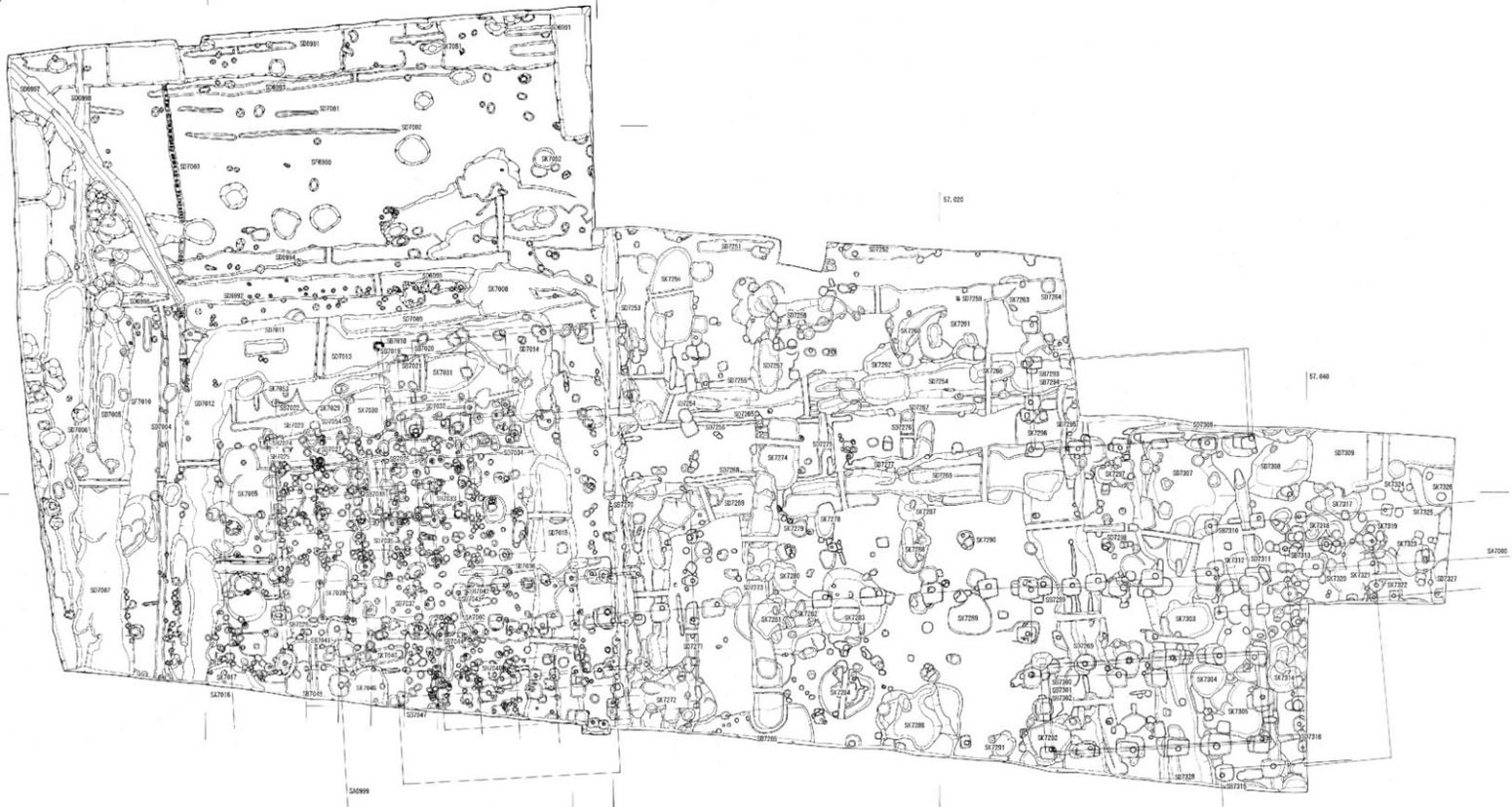


55,800

57,600

57,000

57,600



第103次

第108次

0 10m

第17回 遺構実測図 (1:200)

今回の第108次調査は、この時検出された柵列 S A 7000の東の延長を確認するとともに、想定される S A 7000の東西中線付近の状況を明らかにする事を目的としている。調査期間は平成6年10月11日から平成7年3月3日にかけて約1,100㎡を対象とした。調査前は樹木の閑散な荒地で、特に調査区西半には笹類が緊密に繁茂しており、樹木根と相まって人力による掘削が困難であるため、表土部分を重機により除去したのち調査作業に入った。調査区は隣地境界に沿った鍵手状で、現況は若干の起伏はあるものの標高約11.5m前後のほぼ平坦な地形で、西に向かってごく緩やかに傾斜している。包含層は調査区東半で厚く、遺構面は地表から約0.5m～1.0m下で検出される礫をわずかに含む明赤褐色～黄色の重粘性の基盤土（地山）で捉えた。基本的な層序は上から1：黒色砂壤土（山林表土）、2：地山構成土を含む黒色系シルト質壤土と褐色系砂質壤土（包含層）、3：地山となる。この包含層下に調査区東半では土器片を含み上部攪乱の著しい黒褐色砂質壤土が30cm～40cmの厚さで堆積しており、包含層Ⅱとして分離している。ある時期の造成層である可能性があるが、上面では遺構を確認する事はできなかった。

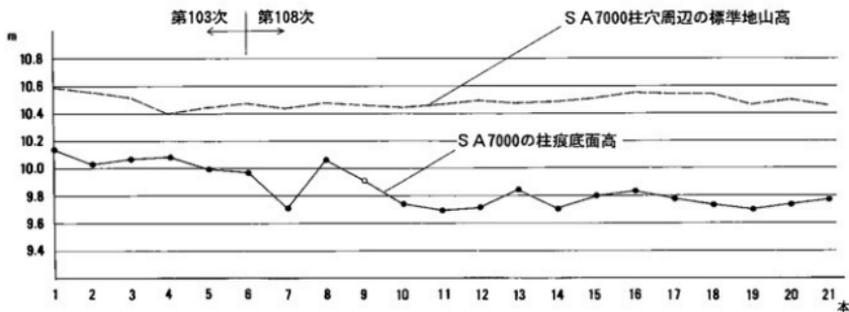
2. 遺構 遺構は奈良時代後期から平安時代末期まで及び掘立柱建物14棟、竪穴住居1棟、柵列1条、溝28条、土塚39基を検出した。なお、調査区東端には多数のビットが分布しており、より多数の建物が存するとみられるが、この確定は今後の調査に拠りたい。遺構は調査区西端と東半部に密で、中央部で疎である。遺構検出面の標高は10.2m～10.5mで南半は概ね平坦だが、北半は北東に向かって緩やかに傾斜している。

(1) 奈良時代後期の遺構 竪穴住居1棟を検出したのみである。

S B 7285 調査区南西端で検出した S B 7285は、南3分の2以上が調査区外に延びていくが、一辺約7.0mの規模のものと考えられる。  
柱穴やカマドなどの施設は確認されず、貼床構造も認められなかった。出土遺物に

	遺 構 の 種 別									
	S B		S D			S K			S A	
奈良時代後期	7285									
平安時代	初期	7302	7315	7252			7260 7261			7000
		7047	7293	7251	7257	7258	7296			
	前Ⅰ期	7294	7300	7259	7273	7275				
		7301		7276	7298	7316				
	前Ⅱ期	7299		7253	7264	7271	7250	7262	7263	
				7295			7274	7278	7279	
							7280	7287	7288	
	中期	7270 7310					7290	7325		
							7319	7320	7321	
	後Ⅰ期						7322	7323		
		7042	7043	7254	7269	7307	7272	7281	7282	
		7044	7313	7308	7309	7327	7283	7284	7286	
							7291	7292	7297	
					7317	7328				
後Ⅱ期						7289	7312	7314		
						7318	7324			
末期			7255	7256	7265	7303	7304	7305		
			7268	7277	7311	7326				
時期不明			7267 7306							

第5表 時期別遺構分類表



第6表 S A 7000の柱痕底面高と地山の相関

は土師器碗・皿・鉢・甕や須恵器長頸瓶・杯・甕などがあり、土師器皿にはb手法による調整をもつものがある。平面の規模は第103次調査のS B 7045よりやや大型だが、ほぼ同時期のものであろう。

(2) 平安時代初期～前I期の遺構 掘立柱建物7棟、溝10条、土壇3基、柵列(板塀)1条がある。

**S A 7000** 当地区においてこの時期最も早く成立すると考えられる遺構は第103次調査区から延び、牛葉東ブロックの北辺を画するS A 7000である。今回15間分検出し、合計20間分を検出した事になる。柱穴の重複はなく、建て替えられた痕跡は認められない。この間柵列に切れ目はなく、門遺構は明確ではない。柱穴は一辺1.1m～1.3mの掘形に直径約30cmの柱痕跡を持つ大型のものである。検出分の長さから柱間寸法の平均を取ると約2.97mになり10尺等間である。第6表はS A 7000の柱痕跡底部の標高と柱掘形周辺の平均的な地山高の相関を表したものである。これによると地山高でも東へ向かってやや低くなっていくが、北西隅の柱穴が最も浅く、第108次調査区に入るものからやや深くなっていき、地山面との高低差は70cm～80cmある事が分かる。S A 7000の延長である第10次調査区では柱穴底面高約9.6m、地山との差約50cm、柵列北東隅の第44次調査区では柱穴底面高約9.3m、高低差約50cmである事から、東西長36間、約107mとみられる長大な柵列の辺中程では柱を深く埋設していることが窺われる。また途中S K 7281に攪乱されているものの、東より7本目から8本目の柱穴底面高に変化がみられる。この部分に接して当該期の建物はないため、確定的ではないが冠木門あるいは棟門などがあった可能性もあろう。

**S B 7315** このS A 7000に伴うようにして建てられたとみられるものとして、調査区東南隅のS B 7315がある。一辺1.0m～1.2mの大型の柱穴を持つもので、一間分のみ検出である。東隣部の調査の成果に期待したいが、柱間9尺、東西4間の建物と推定すると、S A 7000の中央にあたる柱穴と東西正中線を共有する可能性がある。

**S B 7302** 5間×2間の東西棟で柱間8尺の大型建物である。この西妻柱筋は、やはりS A 7000の西から13間目の柱穴と筋を揃えており、以後ここでS B 7301→S B 7300の順で3回の建て替えが行われている。その度に極わずかに柱穴の位置が移動するが、この3回の建て替えのうちに建物の配置の段階的な変化が窺われる。

## 建物の変遷

- ① S B 7302がS A 7000の内側に単独で建てられる。
- ② S B 7302がS B 7301に建て替えられ、この北側にS A 7000を挟んで西妻柱筋を描いてS B 7294が同一規模で建てられる。
- ③ S B 7301がS B 7300に、S B 7294がS B 7293に建て替えられ、S B 7300の西側にややずれるものの、概ね北桁行筋を描いてS B 7047がやや柱穴の小さい5間×2間の規模で建てられ、3棟が並立する。

以上の変遷が平安時代初期から前Ⅰ期の間にあったとみられる。その間S A 7000は途中までは存在していたと考えられるが、③の段階にあたる頃に後述の理由により、廃絶していたとみられる。

S D 7252 溝には初期のS D 7252がある。短く断続しているが、第103次調査のS D 6992に続き、方格地割の東西道路S F 6990の南側溝となるものである。折戸10号窯式に相当する須恵器の台付杯が2個体出土している。

逆L字形を呈する溝群 次に前Ⅰ期の後半に掘削されたとみられる逆L字形を呈する一連の溝、S D 7257・7258・7259・7273があげられる。幅1.3m～1.8m、深さは最深部およそ60cmで、南端は調査区内で止まっており、東端は前Ⅱ期のS D 7263、S K 7264が重複しているが、浅くなりつつもさらに調査区外へ延びていくものとみられる。その形状から区画溝と考えられるが、先述の③の段階に掘削されたとみられ、S B 7300・7293を囲むようになっている。このうちS D 7273はS A 7000と重なっており、S K 7281のため重複関係は明らかではないが、S A 7000の廃絶に伴って掘削されたとみることができる。前Ⅰ期～前Ⅱ期の土師器、須恵器、灰釉陶器が出土しており、前Ⅱ期の古段階を主体としている。前Ⅱ期の終わりには埋没したものとみられる。

S D 7298・7316 S D 7298・7316は出土遺物がほとんど無いが、埋土が黒色土でS A 7000柱穴埋土に近く、前Ⅰ期頃にはあったものと考えられる。幅約40cm、深さ30cm～40cmの逆台形状で、S D 7298は第103次調査のS D 7036と対応する可能性がある。

S D 7251・7275・7276 他にS F 6990の南側溝の一部とみられるS D 7251や溝心々間約4.5mを隔てて平行するS D 7275・7276がある。小規模な溝で性格は不明だが、土師器、須恵器が比較的多量に出土している。

S K 7260・7261 土塚では初期のS K 7260・7261がある。いずれも直径3m、深さ30cm～40cm程の不整形でS K 7261が先行する。両者から土師器杯類を中心に当該期の多量の遺物が完形品も混えて出土しており、祭祀的な性格の薄い廃棄土塚とみられる。

S K 7296 調査区中央付近の一辺約3.5mの方形土塚で、深さ20cm程と浅い。遺物は多くないが、埋土に多量の破砕した炭化材が混入していた。

### (3) 平安時代前Ⅱ期の遺構 掘立柱建物1棟、溝4条、土塚11基がある。

S B 7299 前代のS B 7300を引き継ぐもので、同一規模だが、S A 7000の柱穴跡と重複し、棟方向もE1°Nとこれまでのものと変化がみられる。柱掘形の規模は齋宮跡のこれまでの調査でも最大級で、最も大きいもので一辺1.3m×1.4mを測り、柱痕跡は直径30cm強である。

S D 7253・7264・7271・7295 溝は4条あるが、いずれも性格は不明である。

S D 7264は前Ⅰ期のS D 7259の延長上にあり、同一の機能のものかもしれない。また、S D 7271はその埋土と上部に多量の土器片を包含しており、遺構検出面の上部に

まで達していた。土器類は全て小片となっており、この溝が廃絶する際に溝内やその上部に廃棄がなされたものとみられる。遺物は土師器杯・皿類、須恵器、灰釉陶器や土錘、製塩土器、炭化材などで、前Ⅱ期を中心とする。

#### 土 塚

調査区北東のS K7250、調査区中央部のS K7288・7290から比較的多量の遺物が出土している。S K7250は長径5.4m、短径2.2mの長楕円形土塚である。遺物は土師器杯・皿・高杯・把手付鍋・甕・壺片、黒色土器片、須恵器杯・甕片、緑釉陶器片の他に漆の付着土器、須恵器転用硯、製塩土器片、土錘や炭化材がある。S K7290からは直径1m弱の小土塚ながら杯Bや甕・鍋を中心とする土師器類、須恵器壺片、製塩土器片、土錘、炭化材、人為的とみられる擦痕が残る大小の円礫数個が出土している。これらは前Ⅰ期の遺物も若干含み、土塚の時期としては前Ⅱ期古段階のものと考えられる。当該期の多量の土器類や製塩土器、炭化材を含む土塚は第103次調査でもS K7017があり、土師器類の中に小型～中型の甕、鍋などの煮沸形態を含むという共通点もある。この他特筆できるものとしてはS K7274から斎宮跡2例目とみられる銅製鉞尾が出土している。

#### (4) 平安時代中期の遺構 掘立柱建物2棟、土塚5基がある。

S B7270-7310 調査区西端のS B7270は5間×2間の南北棟で、柱掘形はおおよそ50cm前後と小振りで、N2°Wの棟方向をとる。また調査区東端のS K7310は柱掘形が約80cmとやや大きく、E5°Nの棟方向をとる。S B7310は東側の妻柱を検出できなかった事から、東西方向は5間以上延びている可能性を残す。この棟方向の差異と、S B7270が後Ⅰ期に掘削されたとみられるS D7269に、S B7310は中期後半の土塚に重複されている事からS B7270が中期後半、S B7310が中期前半に属するものと考えられる。

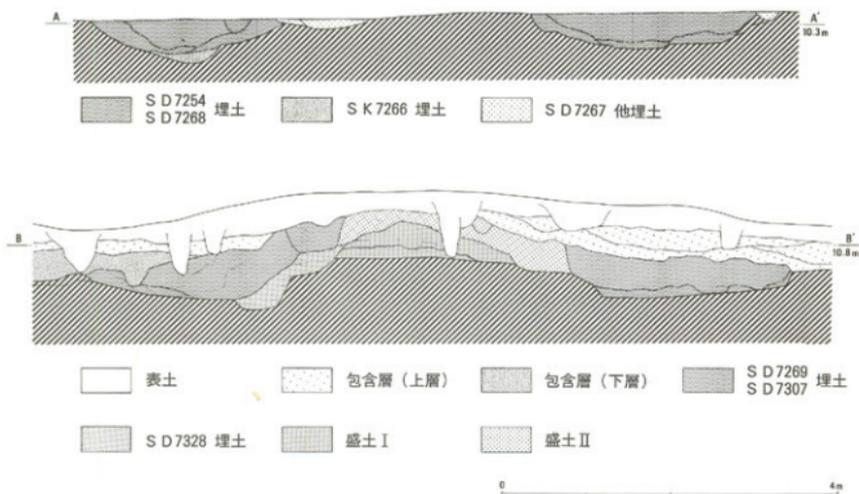
調査区東端の土塚群 土塚は調査区の東端部に集中する。いずれも長径2m以下の小型のもので、土師器を中心とし、完形も含む多量の土器が出土がしている。このうちS K7321からは斎宮跡では最古に属する玉縁口縁の白磁碗片が出土している。この他中期後半を中心に一部後Ⅰ期にかけての土師器杯・皿が大半で煮沸形態のものは少ない。わずかに灰釉陶器片や須恵器片も含まれ、炭化材もみられる。これらの土塚は一部重なりあっており、S K7221→S K7320・7322の先後関係があるものの、S B7310の柱穴に重複しており、後述のS B7313が建てられるまでの短期間のうちに集中的に掘削されたものであろう。

#### (5) 平安時代後Ⅰ期の遺構 掘立柱建物4棟、溝6条、土塚10基がある。

S B7042~7044 これらは第103次調査区から続くもので、前二者が4間×2間、後者が5間×2間の規模であることが判明した。この3棟はいずれも梁行柱間寸法が桁行よりも長いものである。なお、この3棟は後Ⅰ期のうちに含めているが、若干時期的に遡って中期にかかる可能性もある。

S B7313 今回新たに検出した5間×2間の南北棟で、中期のS B7310に直交する方向で建てられている。このS B7313の周辺にはなお多数のピットがあり、数次の建て替えもあったようだが、今後の調査成果により確定したい。

溝 後Ⅰ期に属する溝のうち、S D7254・7269・7307・7308・7309・7328は、第103次調査で「コ」の字状配置を呈するS D7012・7013・7014・7015と対応するものである。S D7269の西辺・北辺・東辺は各々S D7015・7254・7307にそれぞれ平行して幅3m



第18図 S D 7254・7268・7269・7307埋土断面図 (1 : 30)

前後の空閑地をつくる。またこの結果から第103次調査でも S D 7013に S D 6994が対応していると考えられる。これらの溝は幅およそ 3 m~4.5m、深さは遺構検出面から 30cm~50cmと浅いもので、断面は弱い逆アーチ状である。出土遺物は時期的に平安時代初期~末期と幅広いが前 II 期~中期のものが最も多く、また中期~後 I 期とみている S B 7042・7043・7044の柱穴に重複する事から後 I 期の中程の段階で掘削されたものと考えられる。また、S D 7328は S D 7307の底で検出された溝で、これらの溝が数次にわたり再掘削されている可能性もある。

**区画溝の性格** これらの溝が新たに発見された事で「コ」の字状の区画配置は 3 箇所以上になる事が判明したが、いずれも平行あるいは直交するなどしてその方向に規則性があり、幅 3 m前後の空閑地をつくる点で共通するが、これらの埋土断面のいくつかを示したのが第18図である。特に S D 7269・7307の調査区南壁断面に注意すると、調査前は旧地形の弱い起伏かと考えていた盛り上がりや S D 7269・7307の間隙部によく対応し、そこが山林表土とはやや異なる黒ボク状土や地山崩壊土の混土が盛られており、特に図で盛土 II としたものが S D 7328埋没後盛土され、それを切る形で S D 7269の埋土が入っている事が窺われる。この事から少なくとも二次にわたる盛土は版築などは認められないものの幅 1.5m程度の土塁あるいは築垣であったのではないかと考える。そのように考えると S D 7307~7309の北側現況地形も緩やかに盛り上がり、さらに東へ続いている。これにより方格地割の区画に沿った形で土塁に画された一辺 20m程度の区画群が想定される事になるが、斎宮跡のこれまでの調査でこのような施設や区画

は確認されておらず、その評価には大きな問題があろう。

#### 土塚群

S K 7272・7281・7282・7283・7284・7286・7291・7292は径およそ1.5m～4.5mの不整形円形の土塚で、底部の形状も凹凸があり、深さも60cm～90cmと幅があるが、いずれも埋土が地山崩壊土ブロックを多量に含む人為的な攪乱状になっているという共通点があり、埋土断面は地山土を含んだ様々な土種が層理状に堆積している(PL19参照)。分布についても先述の区画溝S D 7269の内側に集中する傾向が窺われる。これらの土塚の性格は推定ではあるが、以上の内容から樹木の根の痕跡ではないかと考える。後I期あるいはそれ以前の段階からS D 7269の内側にあたる部分には建物や溝などの遺構はみられず空地となっている。少なくとも後I期の土壘(築垣)の区画が成立する段階で立木が存在し、以後に除去されたと考える。厳密に「遺構」とできるか問題はありますが、当該期の各区画の土地利用を考えさせるものである。

- (5) 平安時代後II期の遺構 この段階から調査区内では建物がみられなくなる。検出した遺構は土塚5基のみで、S K 7289が調査区の中央に位置し、他は調査区東端付近に集中する。

S K 7289 直径約2.5mの不整形円形で、深さ20cm程度にも関わらず、ロクロ土師器台付杯の完形品や碗の他、土師器台付杯や須恵器片など比較的多量の遺物が出土している。調査区東端の土塚群もそれぞれ直径1.5m程度の小規模な土塚で、土師器やロクロ土師器などを出土し、時期的に末期にまでかかるものもあるかもしれない。

- (6) 平安時代末期の遺構 溝6条、土塚4基がある。

土壘側溝肩部の溝 S D 7255・7256・7265・7268・7277は後I期のS D 7254・7269の肩部に掘削された幅30cm～40cmの細い溝である。土壘(築垣)の両側溝と考えられるこれらの溝の補修に伴うものであろうか。なお類似する溝にS D 7267があるが、遺物はなく、上面から「洪武通寶」が出土しており、明確にこの時期に伴うものかどうか判断できない。また時期の不明なS D 7306も同様のものかもしれない。

S D 7311 N 5° Eほどの方向で延びる南北溝で、幅約80cm、深さ30cm～40cmの断面逆台形を呈する。底部高にはほとんど高低差はなく、埋土に平安時代末期の遺物を含むもののS K 7305が重複しており、掘削は若干遡るかもしれない。

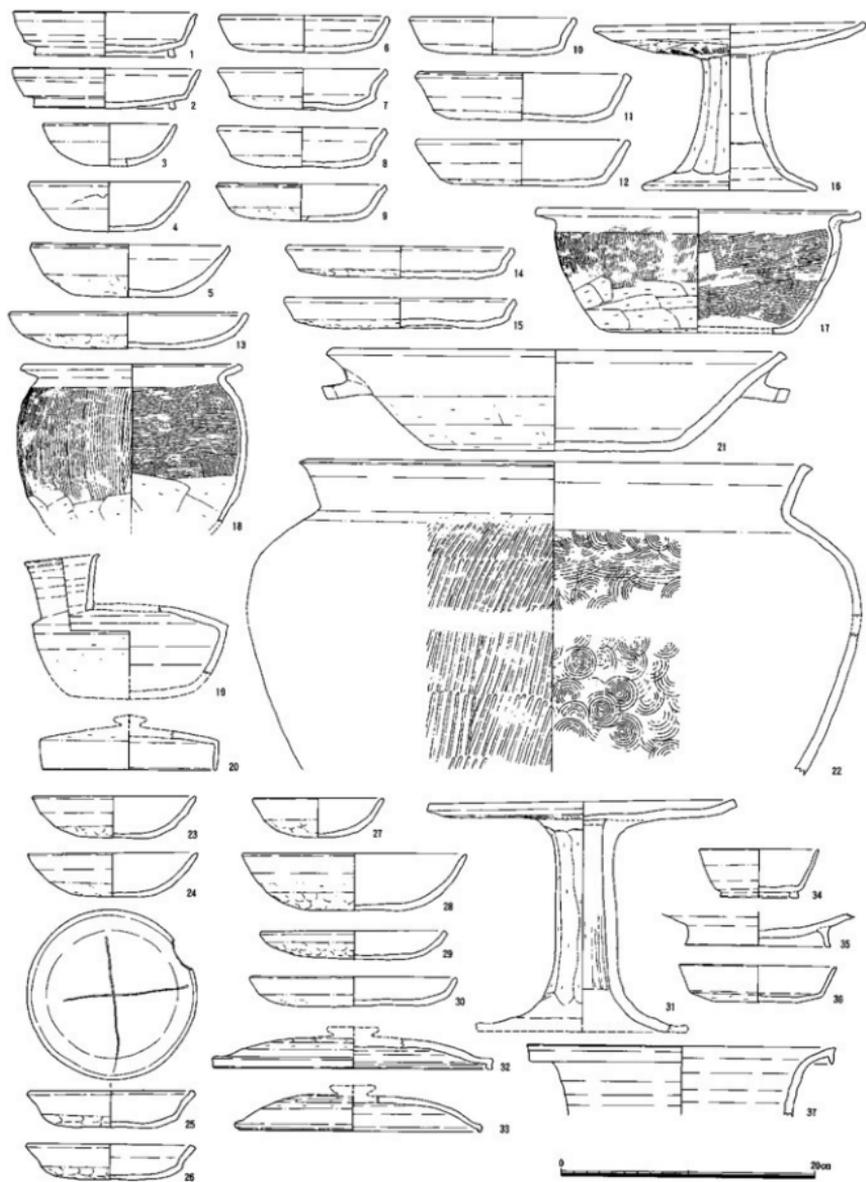
#### 土 塚

土塚は全て調査区東部に集中し、S D 7303の内側のみみられる。先述のS D 7255等からも、後I期の土壘区画はこの段階では存続していたものとみられる。これらの土塚のうちS K 7304・7305からは多量の土器の出土があり、遺構内と認定できたものの他、黒褐色を呈する包含層の下部にも当該期の遺物が多量に含まれており、これを包含層Ⅱとして分離して遺物を取り上げている。特にS K 7305からは多量の土師器皿・小皿・高杯、ロクロ土師器杯・台付杯・高台付杯や須恵器片の他、判読できないが仮名習書したとみられる土師器皿類や調度品の一部と考えられる金銅製のL字形金具が出土している。時期的には平安時代末期でも前半のものと考えられる。

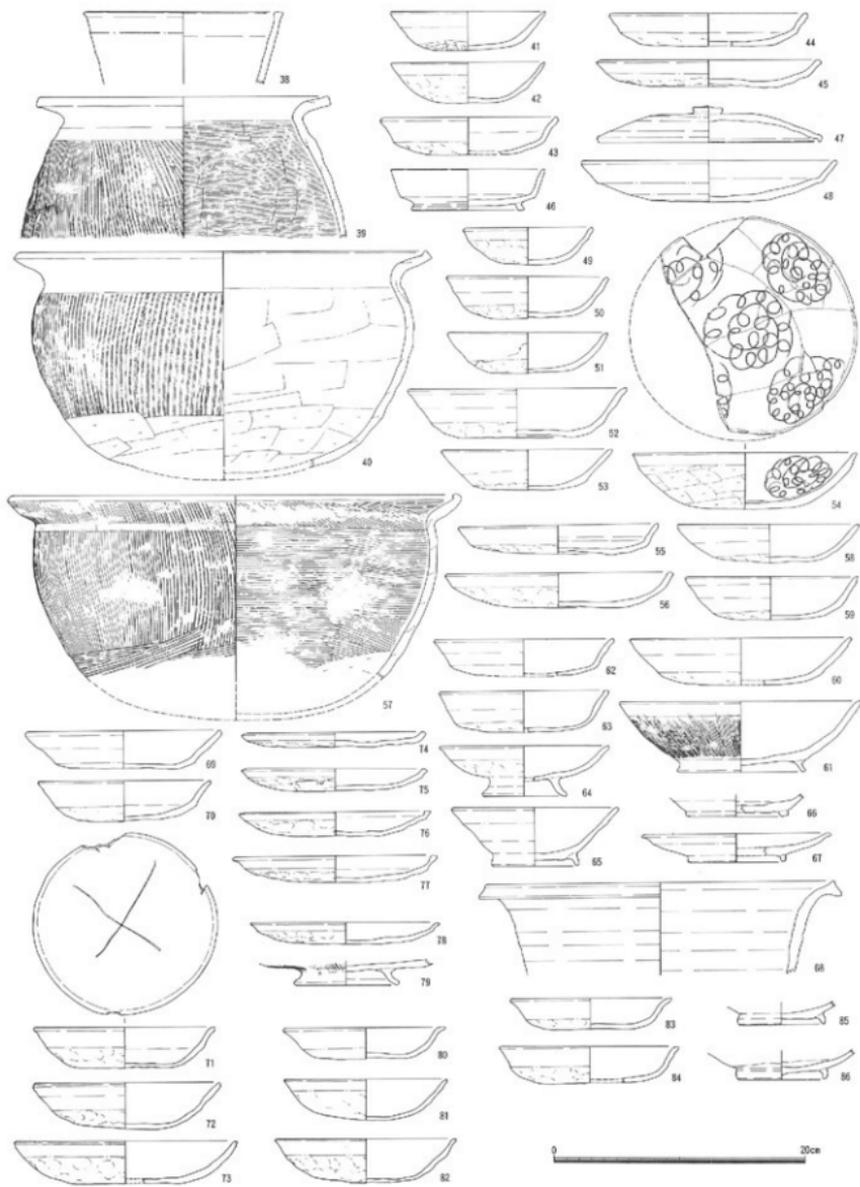
### 3. 遺 物

第108次調査の出土遺物は整理箱で、約160箱になる。調査面積との割合ではやや多い方といえる。大半は土師器を中心とする土器類で、時期的には平安時代全期に及んでいるが、奈良時代のものは少なく、鎌倉時代以降のもので竈宮に関わるものは皆無とといった状況である。これらの遺物について概述したい。

- (1) 平安時代初期～前期の遺物 平安時代初期のS K 7260・7261では前者から7箱、後者から11箱の遺物が出土している。詳細については今後整理したいが、これらの土塚からは残存

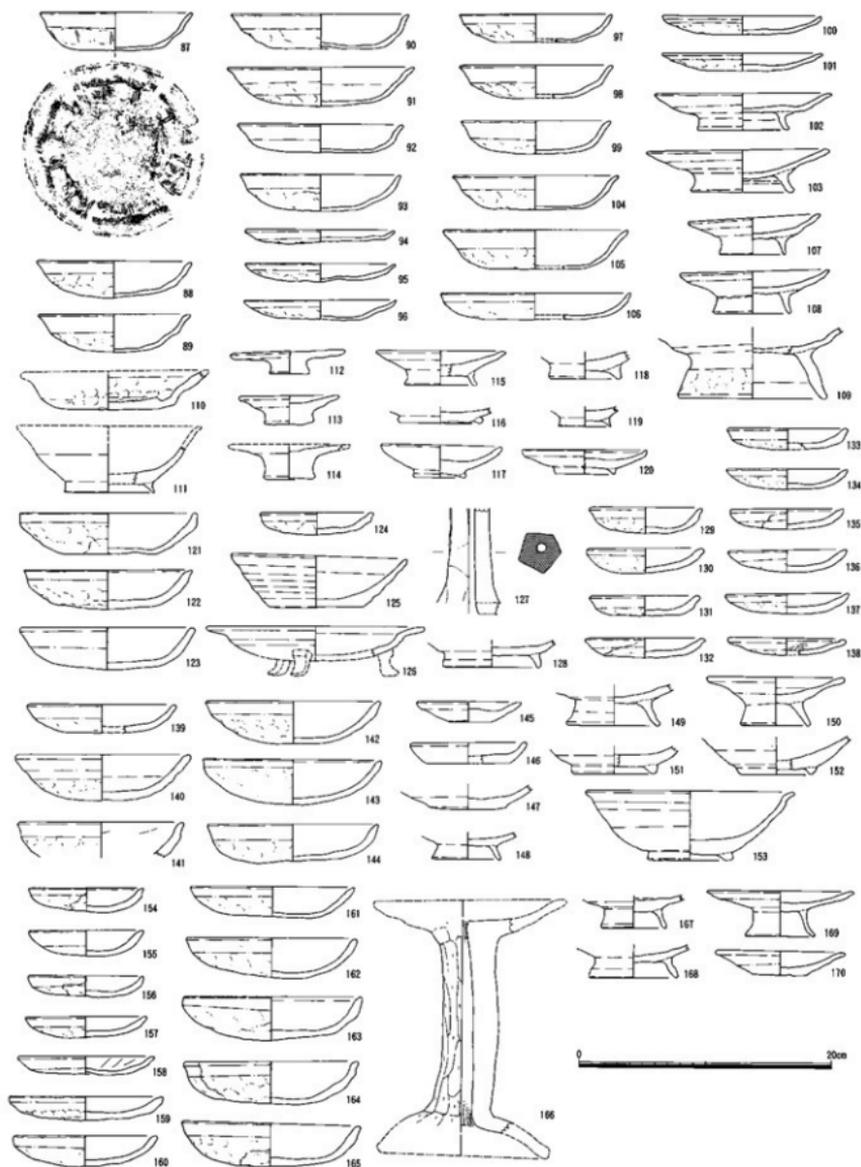


第19圖 出土遺物実測圖 S D 7252 : 1・2、S K 7261 : 3~22、SK7260 : 23~37



第20回 出土遺物実測図

S K 7260 : 38~40, S K 7288 : 41~48, S K 7290 : 49~57, S D 7258 : 58  
 S D 7275 : 59~61, S D 7273 : 62~68, S K 7250 : 69~77, S K 7262 : 78・79  
 S K 7317 : 80~82, S K 7326 : 83~86



第21図 出土遺物実測図

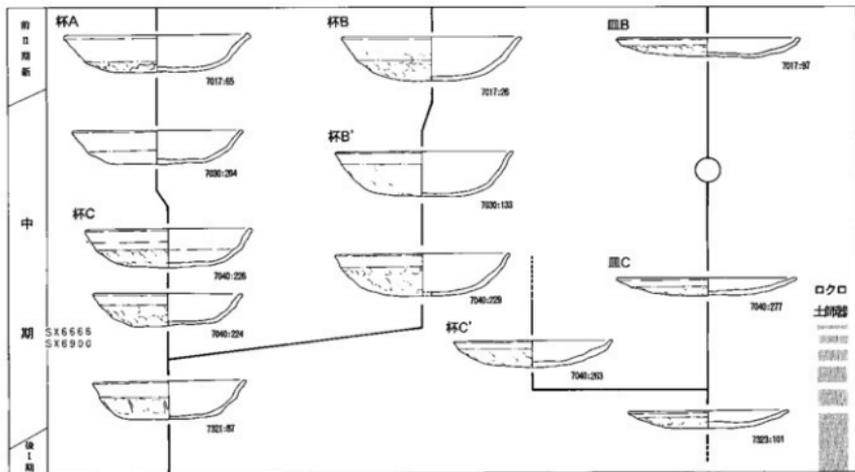
S K 7321 : 87~96、 S K 7323 : 97~103、 S K 7322 : 104~106、 S K 7289 : 107~109  
 S K 7324 : 110・111、 S D 7309 : 112~117、 S D 7308 : 118~120、 S D 7269 : 121~128  
 S D 7307 : 129~153、 S K 7305 : 154~170

状況の良好な土師器杯や皿・鍋・高杯、須恵器杯・平瓶・甕・盤、製塩土器などの土器類の他、土錘や鉄製雁股鎌・刀子が出土しており、土師器供膳形態の割合が高いものの、内容的には多岐にわたっている。

前Ⅰ期の資料については混入を除き良好な資料が無く、第103次調査と共通した傾向を示すが、前Ⅰ期の終わりから前Ⅱ期の前半の資料としてはS K7250・7290などの資料がある。前者は土師器供膳形態を中心とした構成を示し、後者は小規模な土塚ながら土師器甕類の他、擦痕を持つおよそ7cm～30cmの一部被熱した礫が5個程度出土するが、第103次調査のS K7017も含めて共通した性格を持つとみられる。

- (2) 平安時代中期の土器 S K7321・7322・7323出土の土器がある。この土塚の資料は大半は薄く丸みのある体部からやや外反する口縁部を持つ杯Cで、杯B'や皿Cなどが伴っている。灰釉陶器片や須恵器片の混入はほとんどなく、橙色かにぶい黄橙色で、微細な砂粒を含む事があるが、胎土は概ね緊密で焼成もよい。基本的に均質な内容を持ち、土塚の規模からもほぼ一括で投棄されたものと考えられる。杯Cの口径は平均で13cm弱であり、小型化が進み中期でも新相のものである。なお、(87)は底部を型で押し出したようにゆがみが無く外面に成形時の爪状の圧痕が残る。

前Ⅱ期から中期の土師器の変遷については第103次調査の中でもふれているが、今回の出土資料によっても方格地割中枢部での在り方として一定の方向性が出たのではないかと考えられ、主な器種の変遷を第22図に示した。大きく杯Aと杯Bとして平安時代前Ⅱ期まで続いた流れは、杯Bから派生した、薄手で丸みを帯びた底部に幅の狭いヨコナエを施し、やや外反する口縁部を持つ杯B'と杯Cの中に止揚され、この間口径の縮小化が進み、後期の大・中・小の皿器形に分化する母体となる。一方、単純口縁かあるいは端部を面取りして口縁が内弯気味になる皿Bが中期中葉には円盤状の



第22図 方格地割中枢部における平安時代中期土師器の変遷(1:4)  
土器の下の番号は遺構と概観での遺物番号を示す

皿Ⅲにまで単純化が進み、中期から後Ⅰ期の両期の中で綿々と続いた平安型の皿の系譜を終焉させる。胎土が主に橙色を呈し、「延喜通寶」を共伴した第95次調査のS X 6666や第99次調査のS X 6900は中期中葉から後葉にかけて位置づけられ、平安時代中期とされる土器は概ね10世紀初めから中葉前後に位置づけられるのではないかと考える。なお、斎宮跡における平安時代後期様式の重要な構成要素であるロクロ土師器は中期末葉に出現すると予想され、手びねりの供膳形態土師器の再編成と深く関連するものと考えられる。

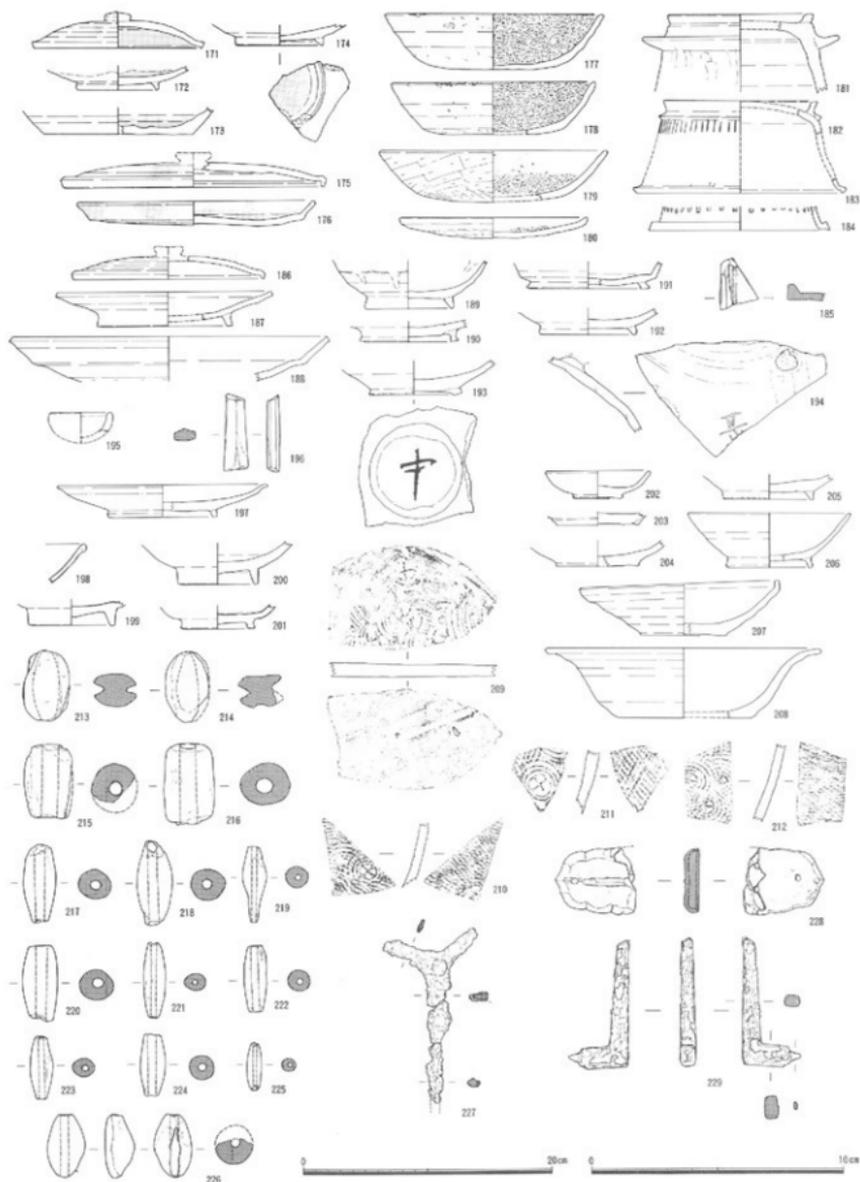
(3) 平安時代後期～末期の遺物 平安時代後Ⅰ期～後Ⅱ期には良好な一括資料がないが、末期は調査区東部に数基の土塚があり、特にS K 7305からは周辺を含め多量の土器が出土しているため、方格地割中樞部のひとつの在り方として内容を検討してみた。器種が判別できたものだけで土師器皿144片(15.3%)、同小皿724片(76.6%)、ロクロ土師器杯類65片(6.9%)でその他混入と考えられる灰釉陶器片、須恵器片がある。土師器の供膳形態だけで91.9%を占めており、ロクロ土師器を入ると98.8%にも及ぶ。煮沸形態は寛1片のみであった。こうした土師器供膳形態のみでセットを成す遺構は、方格地割全体の中でも今のところ牛業東ブロックと鍛冶山西・中ブロックでのみ顕著であり、陶磁器類をほとんど含まないという点でも斎宮全体の中で特異な存在である。また、このような遺構が平安時代を通じて末期まで残るといふ点も他のブロックとの相違点である。10世紀以降のもので仮名習書土器を含むものが、この2地区にはみられるという点もこれらの遺構、ブロックの性格を示唆するのではなからうか。

(4) 特筆される遺物 第108次調査で出土した遺物には多量の土師器類などの他に特殊遺物とされるものが多種多様に出土している。主な内訳では緑釉陶器25片、輸入陶磁器9片、製塩土器522片、円面硯や転用硯など硯類が42片、朱付着土器27片、漆付着土器88片、ミニチュア土器の他、墨書土器、「某？」線刻土器、鉈尾や多数の大型角釘などの金属製品や土鍾131個、フイゴ羽口100片以上などがみられる。

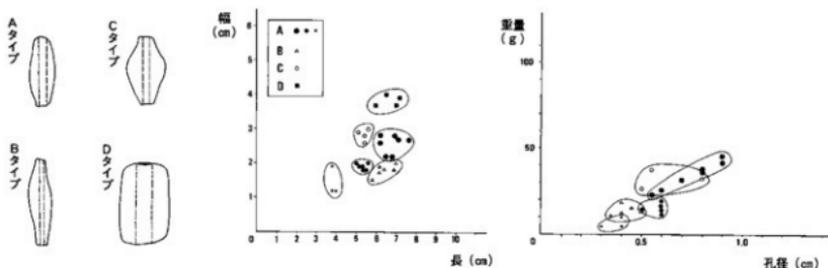
**緑釉陶器** その中で緑釉陶器は調査面積に比して多くなく、第103次調査の成果とも一致する。大半は前Ⅱ期に相当する時期の猿投産のものであるが、(196)のような東濃産ではないかとみられる把手付水注の把手部が出土している。群馬県山王麁寺、長野県平出遺跡など東日本で出土している器形となるものであろう。

**輸入陶磁器** 輸入陶磁器も量的には多くないが、S K 7321出土の白磁碗(198)は外面に火を受けたような跡が斑状にみられるが、均質で透明な明るい釉調で、10世紀中葉の遺構に伴っており、斎宮跡では第103次調査で出土している白磁碗Ⅰ類とともに初期輸入陶磁器に含まれる白磁である。近年確認されつつある越州窯系青磁とともに注目すべき資料である。他に図示していないが白磁壺底部が出土している。

**金属製品** 金属製品では、S K 7274出土の銅製鉈尾が明確な金属製の鉈帯飾具としては斎宮跡では初出である。3箇所を鋸留部があり、外面中央に葉脈状に突帯を付け、外縁は花卉状につくる。S K 7305出土の金銅製金具(229)は調度品の一部と考えられるが、厨子や衣架などが想起されるものの確定できない。S K 7260の鉄製雁股鎌(227)も初出であり、斎宮存続期の弓矢具としては第86次調査の奈良時代後期の土塚から出土した鉄鎌に続く2例目である。近隣の良好な出土資料としては平安京法住院跡の12世紀中葉～13世紀初頭の武家層の土塚墓例があるが、これと比較しても保存処理後に判



第23図 出土遺物実測図 朱付着土器：171～176、漆付着土器：177～180、硯・転用硯：181～192、墨書土器：193  
 文字線刻土器：194、ミニチュア土器：195、緑釉陶器：196・197、輸入陶磁器：198～201  
 陶器類：202～208、「十」刻印須恵器：209～212、土錘：213～226、金属製品：227～229



第24図 管状土鍾の法量（幅/長、重量/孔径）相関

明した残存長は14.4cmで大型の部類に入るものとみられる。中茎は長く股部は大きく広がる特徴もある。鳴錘の装着痕跡は明確ではない。

朱附着土器や漆附着土器、フイゴ羽口など工房的な性格のものも多く、第103次調査の結果と一致し、さらにブロック東部の調査の進展にあわせて遺構との関連性などが究明される必要がある。

**多種多様な土鍾** 土鍾は調査面積に対して出土量も多く、形態・法量上のバリエーションもある。変型字形式土鍾と管状土鍾があり、前者は第51次調査で有溝土鍾が報告されているが斎宮跡では希少な資料である。県下においても鳥羽市賢遺跡、志摩町阿津里貝塚など伊勢湾口部での出土例はあるが平野部での出土例はない。管状土鍾も第24図に示したように各種タイプがあり、やや中膨らみで細身のをA類、その両端が強く絞られるものをB類、算盤玉状に中程で膨らむものをC類、大型で全体が均等な太さのものをD類とした。特にA類は大・中・小の3タイプに分かれるのをはじめ、重量や、網の繊維の太さに関わる孔径に様々なものがある。これらは斎宮において比較的多量に出土したとはいえ、漁網一刺を構成するには少なく、またタイプやサイズにバラつきが大きすぎる。しかし、(226)のように片面のみが著しく磨耗する例や両端部が同一方向に欠ける例は、実際の使用状況を示す可能性がある。

**類例の乏しい須恵器** (202~208)に斎宮では主体的ではない須恵器の一群がまとまって出土しているので図示した。平安時代後Ⅰ期～末期の遺構に伴い、産地等不明である。

4. まとめ これまで述べてきたように第108次調査においても平安時代の斎宮、わけても方格地割の中枢をなすとみられる部分について多くの知見をもたらした。次にこれらの成果について若干の検討を加えてまとめとした。

(1) 平安時代前半の計画的配置 牛薬東ブロック北東の土地利用状況を俯瞰しやすいように第26図で第103次・第108次調査区内の主要遺構の変遷を示した。遺構は奈良時代後期から平安時代末期まで分布するが、以下の4つの画期による5段階の変遷が考えられる。

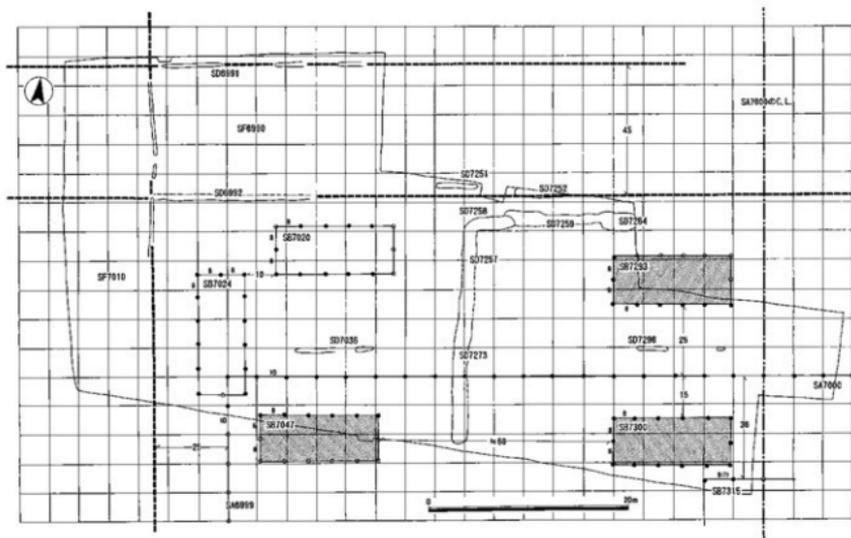
- 土地利用の変遷**
- ①方格地割が構成され、S A 6999・7000に内側が画される平安時代初期。
  - ②柵列が廃絶し、建物配置の規制に変化があらわれる平安時代前Ⅰ期後半から前Ⅱ期初め。
  - ③土塁（築垣）で小区画が構成される後Ⅰ期後半。
  - ④この一帯での遺構の分布が認められなくなる末期後葉以降。

このうち、①の段階で調査区北方を通る奈良時代の古道が廃絶し、鍛冶山西・中ブロックにまたがる柵列区画が構成された後、方格地割を基調とする区画が成立し、それを受けてSA7000などによる区画が牛葉東ブロックにも成立したと考えられる。

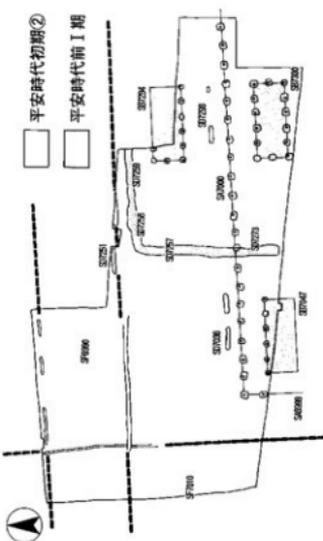
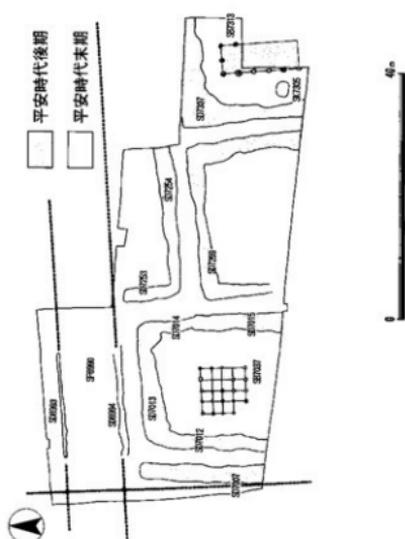
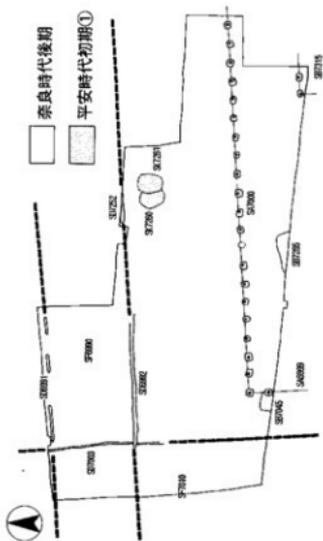
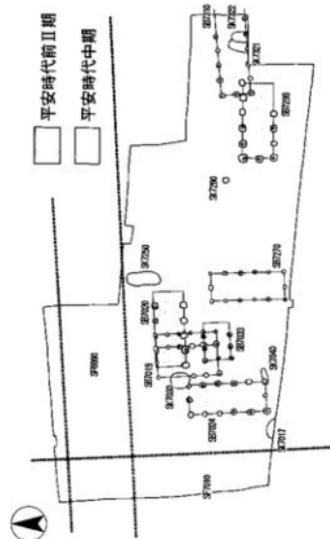
SA7000はその北側東西道路のSF6990の南側溝から、SD6992・7252の溝底の形状が不安定ではあるが約19mの距離にあり、1尺をおよそ29.6cm～29.7cmとみると64尺前後となる。また西側のSF7010の東側溝SD7003からは同様に25尺とみることが出来る。この時調査区東南隅で柱穴2個のみ検出したSB7315はSA7000からおおよそ36尺の距離にあるとみられる事から、SB7315は区画道路側溝から南に約100尺という数値が求められる。また東西4間とみると、SA7000の東西正中線と同軸になる可能性も高く、この区画に沿った建物では最も古いものである可能性がある。今後の規模の確定を期待する(第25図参照)。

平安時代初期後半から前期にかけての5間×2間の3棟の建物の変遷については先述したが、これらの間にも規則的な配置が認められる。3期の建て替えがあるSB7302は最も古く、SA7000の北西隅から13本目の柱穴、距離にして130尺のところまで西妻柱筋を揃え、SA7000から15尺の距離をおいて建てられる。これをSB7301に建て替えるに及び、西妻柱筋を揃えてSA7000の北25尺のところまでSB7294が建てられる。この2棟の間隔は40尺となる。これらがSB7300・7293に建て替えられる頃にSB7300の西およそ80尺のところまで東妻柱筋をおいてSB7047が建てられる。これは前二者の距離の2倍である。また前期頃にはSA7000の北側10尺のところまで断続的ながらSD7036・7298があり、柵列に関連があるものとみられる。

前II期の逆L字形の配置をとる建物もSB7024の西桁筋筋は柵列から10尺の距離を



第25図 規則的な配置の主要建物(1:500 数字は尺)

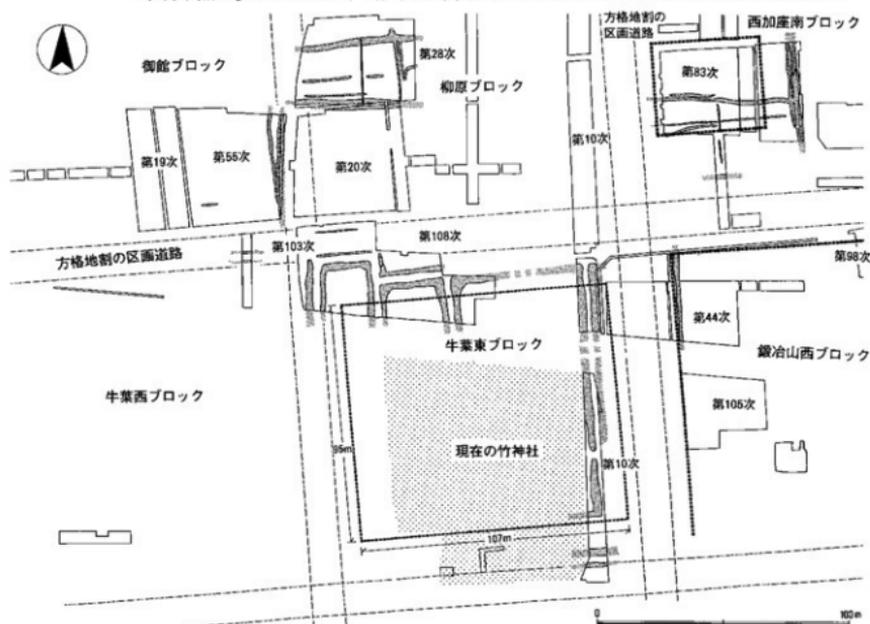


第26圖 主要遺構變遷圖 (1:800)

とるなど柵列の廃絶に伴って、その基準を踏襲したものである事が分かる。

このように平安時代初期～前Ⅱ期にかけては極めて計画的な構成が継続されている事が窺われるのである。

- (2) 土塁状遺構について 第103次調査で平安時代後期以降、幅3m弱の浅い溝により一辺20mほどの「コ」の字状区画が発見されたのに次いで、今回その東でさらに2区画分は発見された事になる。溝底のレベルの高低はあるがほぼ同一規模であり、時期も後Ⅱ期に成立するものとみられる。同様の遺構を周辺に求めると、第10次調査で竹神社の東側にこの南北方向に一致する同規模の溝が、やはり幅2m強の間隔を開けて併走している(第27図)。第10次調査区内ではこの北端と南端と考えられる部分のみられ、南隅から約24mのところには通路あるいは門跡と考えられる溝の切れ目がある。周辺に視点を広げてみると牛葉東ブロック以外には同時期の類似する遺構は全くみられず、この土塁(築垣?)状の区画構成は平安時代前半までのSA7000やSA2655などによる柵列の区画によく対応したものである事が窺える。これは鍛冶山地区の区画が平安時代中期以降衰退する点と極めて対照的である。同様の遺構としては昭和53年度に実施された度会郡小俣町離宮院跡の発掘調査の際に平安時代前半期の八脚門に直交する幅3m程の土塁(築垣?)が調査され、現存する土塁の分布も示されている。これによると離宮院にも平安時代後期に一辺70m程度の土塁による区画構成があったと考えられ、今回の第108次調査区周辺の成果と一致する点が多い。特に近鉄線以南の区画に依然不明な点が多いとはいえ、当区画が平安時代を通して他の区画とは際立った団統施設



第27図 平安時代後期～末期主要溝遺構分布図(1:2,000)  
網目部分は主要溝遺構、太い破線は平安時代初期の柵列遺構、細い破線は方格地割の道路側溝を示す

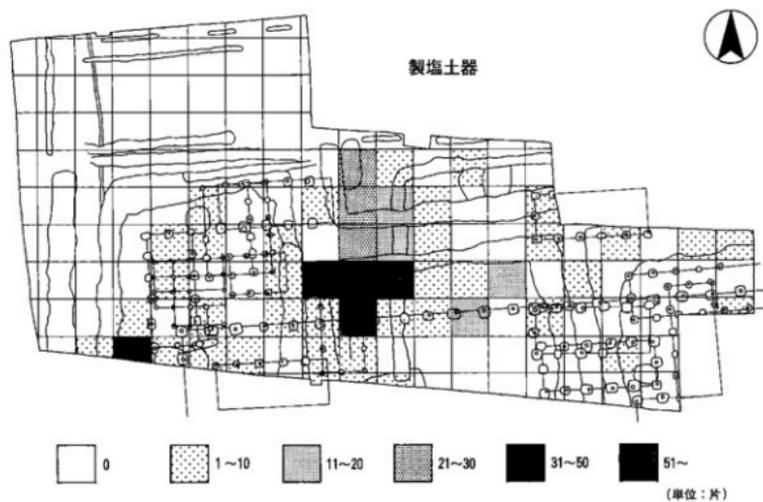
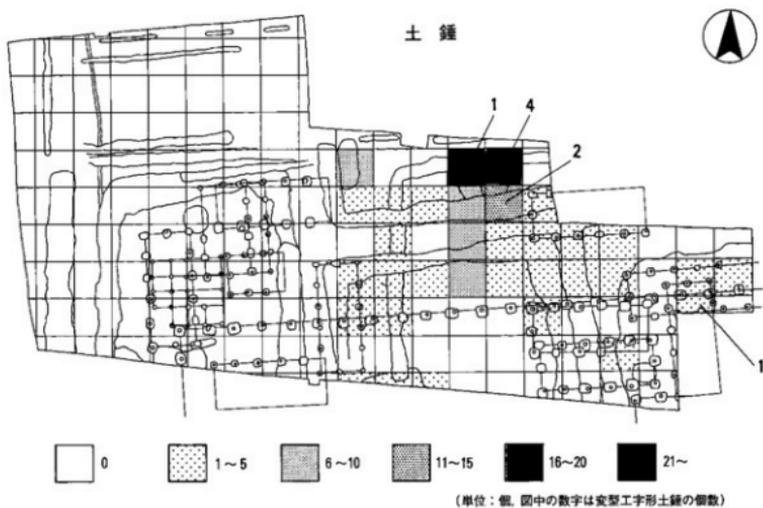
を維持していく事は、後代様々な経過を経て竹神社社殿地として生きている事と合わせ、当区画の重要性ひいては内院など齋宮中枢部としての機能が古代末期から中世初期にかけても維持されていたとみるのは過言であろうか。

- (3) 土鍾・製塩土器について これまで述べてきたように、今回の調査では方格地割の中心部での調査としては異例といえる量の土鍾が出土している。これまで土鍾は各調査で概略数点は出土するが、齋宮との関連性が不明な遺物でありながら詳細な報告はなされてきておらず、出土の量や種類などを把握する術はない。また比較的多量に出土する製塩土器は、齋宮の祭祀との関連性が想定されてはきたものの、出土の状況などは細かく分析された事はない。今回はこれらの特殊遺物とされるものの出土の関連性や意味づけを考える基礎資料を提示するためにそれぞれの個数や破片数について第103次と第108次の調査区について分布図を作成してみた（第28図）。

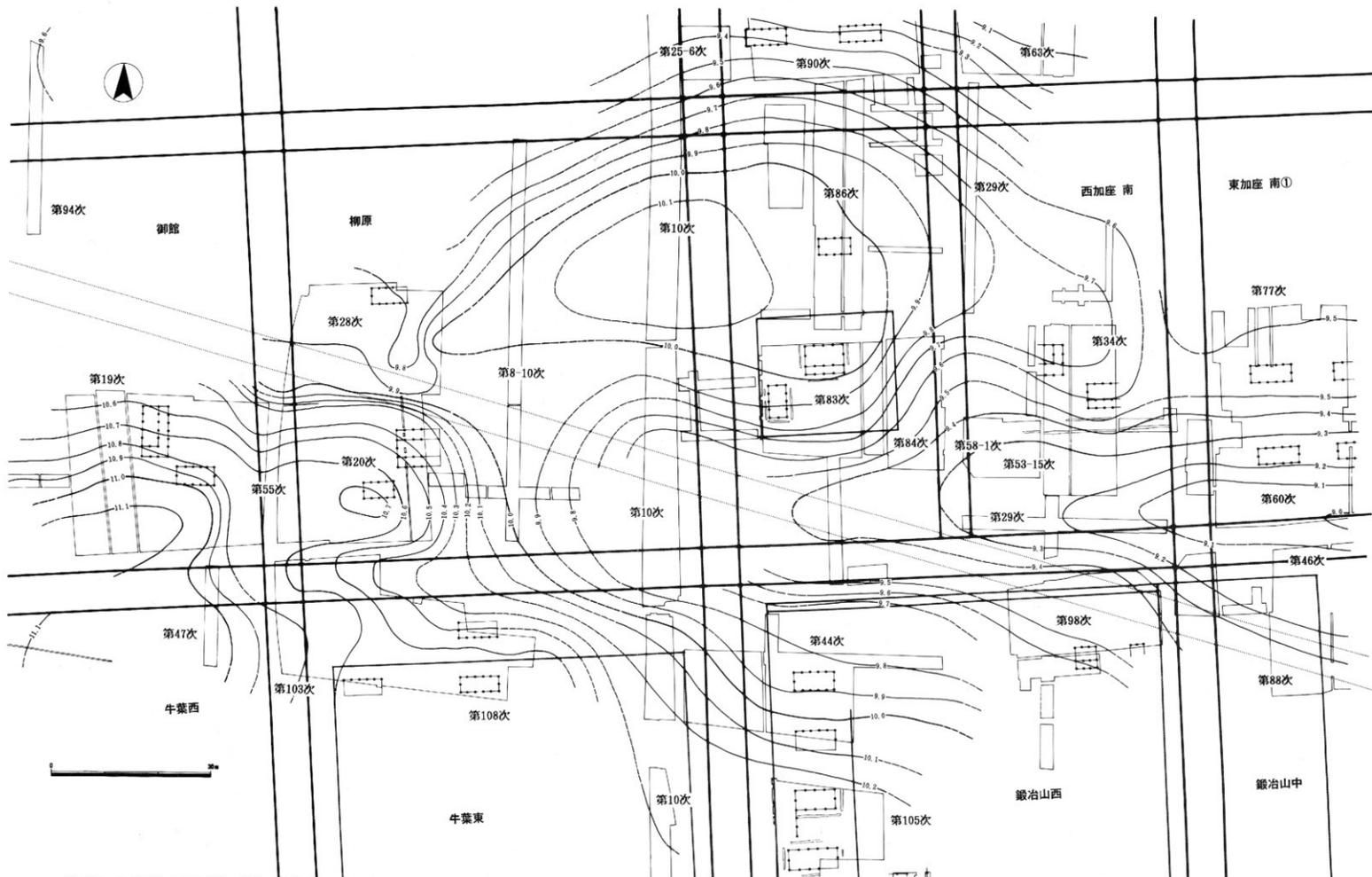
まず土鍾についてみると第108次調査区で比較的多量の出土をみながら、西接し同一区画内の第103次調査区内では全く出土していない点が注目される。また第108次調査区内でもSK7260・7261に分布の中心がある事が分かる。これらは平安時代初期のものであり、今回調査区では最も古い段階の遺構に属するため、他の出土資料はここからの拡散とも考えられる。SK7260・7261では各種の土器片や鉄製品が散在する形で出土しており、祭祀的な傾向は窺われず、単なる廃棄の性格が強いと考えられる。土鍾も多様な種のものがまとまりなく出土している点からも周辺からの一過性の投棄と考えたい。

それに対して製塩土器は第103次・第108次両調査区から一定量出土している。分布の中心はSK7017とSD7269のコーナーの内側付近にみられ、土鍾とは一致しない。この2地点はそれぞれ平安時代前Ⅱ期から中期にかけての土器器類が炭化材片などをともなって多量に出土した土器溜まりであり、土師器杯・皿類を主体とする事や時期的な一致、およびいずれも区画溝脇という一定区画内の隅の部分にあたる箇所であるという共通点が認められる。土器溜まりとしては規模も大きくなく、齋宮の中心区画の中であるという事から毎月朔日の忌火、庭火祭などに関わるものである可能性もある。齋宮でも製塩土器の量的なピークは平安時代前Ⅰ期から前Ⅱ期頃にかけてと考えられるが、同様に、炭化材などを包含する土師器杯・皿類の単相の土器溜まりは方格地割中心部付近でも平安時代初期からはじまり前Ⅱ期をピークとして収束していく。今後の資料の増加にあたってその内容の詳細な把握がなされる事が望まれる。

- (4) 齋宮中枢部の微地形について これまでの齋宮跡25年の調査の中で最大の成果といえる方格地割の発見後も区画道路やその側溝、交差点がみつきり、その内部の構造も柵列による区画、八脚門、生垣また柵列等に対して規則的に配置された掘立柱建物群や、区画の性格を示す可能性のある墨書土器の出土などの着実な調査成果の蓄積により、平面的な構造の解明は一層精緻なものになりつつある。近年は通称中町地区の調査率は史跡全体の中でも進んできており、こうした方格地割の構造とともに、地形的な測量データも集積しつつある。ここでは第108次調査の実施を契機として調査区周辺の地山面高のデータをプロットし、これを10cmオーダーの等高線で結び、平安時代前半の齋宮の中心部北辺一帯の微地形を提示してみた（第29図）。しかしまだなお調査の及ばない部分も多く、各調査区ごとの測量データの詳細な比較には及んでいないため、細部



第28図 土鍾・製塩土器出土分布図 (1 : 500)



第29図 方格地割中樞部付近の微地形試案 (1 : 1,000)

については推定の部分も多く、現在では試案の段階である。

まず、等高線の主曲線が10cmであるため、極めて複雑な地形に見えるが、今回の地形図の最高点は約11.1m、最低点は約9.0mであり、傾斜率は全体で約5%であるため基本的にはほとんど起伏のない平坦な地形であるといえる。しかし牛葉東～鍛冶山中ブロックの北を面する東西道路のやや北に沿うようにして幅30m～50mほどの弱い谷状地形が東に向かって延びており、奈良時代の古道もこの部分に向かって延びている。この谷の中では少なくとも第29次・第46次・第60次・第98次調査においていわゆる黒ボク土が分布しており、これを地山面として遺構が形成されている事が判明している。この黒ボク土は当地に齋宮が造営される以前に堆積しているものであり、遺物が全く混入していないため、方格地割の造営画期の鍵となるものとみられる。黒ボク土は第90次調査区の北半でも分布する事が知られており、方格地割中央部での低位部の基盤面として広がっているようであり、この低位部に向かう緩傾斜面に西加座地区の5間×2間の建物群による倉庫地区が立地するものとみられる。

この東西の谷状地形の南側は今回の第108次調査区も含めて緩やかな北東下りの傾斜となっており、旧参宮街道付近と考えられる尾根筋のピークに続く。竹神社地内など近鉄線以南の調査例がほとんどないため、不分明な部分もあるが、この尾根筋上は極めて平坦で、齋宮中枢部の造営には安定した地形であるとともに、この北側の谷筋があるため排水面でも有利な立地となっていたものと想像できる。この反対の北側には柳原ブロックから西加座南ブロックにかけて上面の平坦な尾根が派生しているが、この南斜面に第83次・第84次調査で発見された櫛列区画が配置されており、中心建物が緩やかに傾斜する方向に南面している事がわかり、古代官衙プランのセオリーに則っているとみられようか。またこの尾根の延長には鞍部状の平坦部があり、第34次調査区の大型建物等が南北道を挟んで類似した立地条件にある。この派生尾根はそのまま東加座南①ブロックの北東方向に向かって傾斜し消失していく。

御館・柳原地区には若干の疑問は残るが弱い尾根とその鞍部が想定され、北の現況水田地帯に向かって落ちていく。この2箇所頂部付近には平安時代初期から前Ⅱ期頃にかけて極めて密集した建物の建て替え状況が示される。ここに現れる地形状況はその整地あるいは造成の結果も含むであろう。

以上方格地割中枢部付近の微地形概況をみてきたが、牛葉や鍛冶山の区画の北側の小谷は地割の東西道路（幅約45尺の基幹区画道路のひとつと考えられる）と方向を揃えており、この部分が奈良時代の古道とも交差することからE4°Nを軸とする方格地割への転換にあたって大きく関与するものであった可能性は高い。今後この小谷の延長部を含め、方格地割が展開する範囲全体の微地形の分析と検証を重ねていく事は、齋宮全体の構造を検討していく上で大きな意義があるといえるだろう。

(大川勝宏)

- 【参考文献】 ・寺島孝一・片岡肇他「法住殿跡」財団法人古代学協会 1984  
・御村清治・榎本義謙「難宮院跡発掘調査報告」小俣町教育委員会 1980  
・田中慎子「漁の技術史—木曾川から伊勢湾へ—」一宮市博物館 1994

掘立柱建物・欄列一覧表

遺構番号	規 模	棟方向	桁 行 (m)	梁 行 (m)	柱間寸法 (m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		

第105次調査 (6 A F N)

SA1411	(10)	N 4° W	(29.5)			2.95		奈良後～平安初	10間分検出、SA2675より古
SA7150	(6)	N 4° W	(17.7)			2.95		◇	6間分検出
SA7151	3	N 4° W	7.8			不揃い		◇	SB7155の西妻柱筋の南側延長上 (柱間2.1m+2.7m+3.0m)
SB7155	4×2	E 4° N	12.0	6.0	3.0	3.0		◇	SB7190より古
SB7160	5×2	E 4° N	15.0	6.0	3.0	3.0		◇	
SB7165	(1)×-	N 4° W	(3.0)	-	3.0	-		◇	
SB7175	(2)×2	E 4° N	(4.2)	4.2	2.1	2.1		◇	SB7185より古
SB7180	(2)×(1)	N 4° W	(4.8)	(2.4)	2.4	2.4		◇	SB7195より古
SB7185	3×-	N 4° W	6.3	-	2.1	-		◇	
SA2675	(10)	N 4° W	(29.5)			2.95		平安前Ⅰ～前Ⅱ	10間分検出
SA7170	(6)	N 4° W	(17.7)			2.95		◇	6間分検出
SB7190	5×2	E 4° N	12.0	5.4	2.4	2.7		◇	SB7191より古
SB7191	5×2	E 4° N	12.0	5.4	2.4	2.7		◇	SB7197より古
SB7195	-×2	E 4° N	-	6.0	-	3.0		◇	SB7196より古
SB7196	3×-	N 4° W	7.2	-	2.4	-		◇	
SA7171	(6)	N 4° W	(17.7)			2.95		時期不明	6間分検出
SA7172	(5)	N 4° W	(15.0)			3.0		◇	5間分検出
SB7197	5×2	E 7° N	10.0	4.0	2.0	2.0		◇	SB7191より新

第107次調査 (6 A B I - O)

SB7205	5×2	N 5° E	8.5	5.2	1.7	2.6		奈良 中	南庇出1.8m、SB7208より古
SB7208	(2)×-	N 0° S	(4.2)	-	2.1	-		◇	北庇出1.6m、SB7207より古
SA7209	4	N 0° S	6.8		1.7			◇	
SB7210	3×3	N 17° E	4.8	4.2	1.6	1.4		◇	総柱、SB7205より古
SB7215	3×2	N 7° E	3.9	3.6	1.3	1.8		◇	
SB7219	4×-	E 0° W	5.6	-	1.4	-		◇	
SB7222	(1)×2	N 0° S	(1.2)	2.0	1.2	1.0		◇	SB7221より古
SB7225	(2)×2	E 21° S	(3.8)	4.2	1.9	2.1		◇	南庇出1.5m、SB7226より古
SB7226	(1)×2	E 7° S	(2.2)	4.4	2.2	2.2		◇	SB7231より古
SB7231	3×2	E 7° S	3.9	3.8	1.3	1.9		◇	
SB7233	(2)×(1)	E 7° S	(4.2)	(2.2)	2.1	2.2		◇	SB7232より古
SB7234	(2)×(1)	E 0° W	(3.6)	(1.9)	1.8	1.9		◇	
SB7207	(3)×2	N 25° E	(5.4)	3.6	1.8	1.8		鎌倉時代	
SB7221	(2)×(1)	E 25° S	(5.4)	(2.7)	2.7	2.7		◇	
SB7235	(1)×2	N 34° E	(1.8)	4.2	1.8	2.1		時期不明	

第108次調査 ( 6 A E Q - C )

SB7302	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安初～前 I	SB7301より古
SB7315	(1)×-	E 4° N	(2.7)	-	(2.7)	-	◇	第103次調査を含め20間分検出
SA7000	(15)	E 4° N	(44.55)		2.97		◇	
SB7047	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前 I	
SB7293	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	第103次調査のSB7349は抹消
SB7294	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	SB7293より古
SB7300	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	SB7300より古
SB7301	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	
SB7299	5×2	E 1° N	12.0	4.8	2.4	2.4	平安前 II	
SB7020	5×2	E 4° N	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	
SB7270	5×2	N 2° W	11.75	4.5	2.35	2.25	平安中	
SB7310	(5)×2	E 5° N	(12.0)	4.8	2.4	2.4	◇	
SB7018	5×2	E 4° N	13.5	4.8	2.7	2.4	◇	
SB7042	4×2	E 4° N	9.6	5.0	2.4	2.5	平安後 I	
SB7043	4×2	E 4° N	9.6	5.0	2.4	2.5	◇	SB7242より古
SB7044	5×2	E 4° N	10.0	5.2	2.0	2.6	◇	
SB7313	5×2	N 5° W	12.0	4.8	2.4	2.4	◇	

竪穴住居一覧表

遺構番号	規模 (m)	長軸方向	深さ (cm)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
------	--------	------	---------	-----	-----	-----	-----

第107次調査 ( 6 A B I - O )

SB7216	3.5×3.3	E 6° S	20	-		奈良中	SB7228より古
SB7227	3.2×-	N 14° E	20	-		◇	
SB7228	3.4×3.4	N 15° E	25	-		◇	
SB7229	5.4×-	E 14° S	10	-	東 壁	◇	SB7227より古
SB7230	3.7×-	N 22° S	20	-	東 壁	奈良時代	
SB7232	4.9×-	E 12° S	10	-	東 壁	◇	

第108次調査 ( 6 A E Q - C )

SB7285	(7.0)×-	E 10° S	45			奈良後	
--------	---------	---------	----	--	--	-----	--

## 遺物（土器）観察表

### 第105次調査

No	出土遺構	器 種	形 量	調査・検出の経緯	胎 土	焼 成	色 澤	残存度	備 考	記録番号
1	SK 7179	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 5 YR 7/8	約40%	器表面の割傷やや十 字状	R 6
2	SK 7179	土師器 杯	(口径) 13.6cm (器高) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 5 YR 6/8	約90%	器表面の割傷著しい	R 5
3	SK 7179	土師器 盆	(口径) 13.0cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、底面外 周テラス	赤	良好	内：橙 外： 5 YR 6/6 5 YR 6/8	約30%		R 4
4	SK 7179	土師器 盆	(口径) 18.2cm (器高) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 5 YR 6/8	約50%		R 3
5	SK 7179	須恵器 杯	(口径) 22.0cm (器高) 4.2cm	天井部/コクログズリ、 内外面コクロナデ	黒褐色赤褐色 むかぶ	良好	内：淡黄 5 Y 7/3 外：オリーブ灰 2.5 GY 6/1	約50%		R 1
6	SK 7179	須恵器 杯	(口径) 27.0cm (台径) 24.0cm (器高) 5.1cm	内外面コクロナデ、底面 外周コクログズリ、貼付 高台	赤	良好	内：灰白 外： 10 Y 7/1 N 7/1	約30%		R 2
7	SK 7156	土師器 盆	(口径) 15.6cm (器高) 1.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/6	約30%		R 25
8	SK 7156	土師器 杯	(口径) 15.6cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 5 YR 7/6	約60%		R 27
9	SK 7156	土師器 杯	(口径) 13.8cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外：黄褐色 2.5 YR 6/8 2.5 YR 6/6	約20%		R 28
10	SK 7156	土師器 杯	(口径) 14.3cm (器高) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 6/8 7.5 YR 6/6	約4%		R 29
11	SK 7156	土師器 杯	(口径) 18.0cm (器高) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：黄褐色 外： 7.5 YR 7/6	約40%		R 26
12	SK 7157	土師器 杯	(口径) 14.4cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 6/3	約70%		R 32
13	SK 7157	土師器 杯	(口径) 13.3cm (器高) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/6	約40%		R 30
14	SK 7157	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/6	約50%		R 31
15	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.1cm (器高) 2.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 6/8	約50%		R 17
16	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.3cm (器高) 3.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/4	約20%		R 22
17	SD 7154	土師器 杯	(口径) 14.0cm (器高) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：黄褐色 外： 7.5 YR 8/6	約40%		R 14
18	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：黄褐色 外： 10 YR 8/6	約50%		R 21
19	SD 7154	土師器 杯	(口径) 13.0cm (器高) 2.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	やや甘い	内：黄褐色 外： 10 YR 8/3	約50%		R 18
20	SD 7154	土師器 杯	(口径) 18.5cm (器高) 4.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/6	約40%		R 23
21	SD 7154	土師器 杯	(口径) 18.7cm (器高) 3.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/6	約40%		R 15
22	SD 7154	土師器 杯	(口径) 16.0cm (器高) 2.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：橙 外： 7.5 YR 7/6	約30%		R 16
23	SD 7154	土師器 杯	(口径) 17.0cm (器高) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	赤	良好	内：ぶい 外： 7.5 YR 7/4	約20%		R 19
24	SD 7181	陶器 小皿	(口径) 9.1cm (器高) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、内外面 コクログズリ、底面刷毛 付煎	赤	良好	内：橙 7.5 YR 7/6～橙 5 YR 7/6	完形	コロロ土師器に準形 類似、ゆがみ大	R 12
25	SD 7181	土師器 小皿	(口径) 11.4cm (器高) 2.2cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	やや粗	やや甘い	内：黄褐色 外： 5 YR 8/3	約50%	器表面の磨耗すくむ	R 8
26	SD 7181	土師器 杯	(口径) 15.2cm (器高) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	散粒な砂粒含む むかぶ	良好	内：黄褐色 外：橙 2.5 YR 8/6 2.5 YR 7/6	約80%	器表面の磨耗すくむ ゆがみ大	R 11
27	SD 7181	土師器 台付盆	(口径) 8.4cm (台径) 3.3cm (器高) 4.8cm	内外面ナデ、貼付高台	砂粒を含むやや 粗	やや甘い	内：黄褐色 外： 10 YR 8/6	ほぼ元形	器表面の磨耗著しい	R 9
28	SD 7181	土師器 台付盆	(口径) 9.9cm (台径) 3.8cm (器高) 2.5cm	内外面ナデ、貼付高台	砂粒を含むやや 粗	良好	内：黄褐色 外： 10 YR 8/4	約90%		R 10
29	SD 7181	須恵器 盆	(口径) 26.6cm (台径) 11.0cm (器高) 13.3cm	内外面コクロナデ、底面 コクログズリ、貼付高 台	砂粒を含むやや 粗	良好	内：灰オリーブ 外：淡黄 5 Y 6/2 5 Y 6/1	約40%	底面のほぼ中央に深 約1.7cmの穿孔あり	R 7
30	SD 7154	須恵器 唾壺	(体部径) 9.3cm (器高) 4.7cm	外周コクログズリ、内面 テラス	赤	やや軟質	粘・淡黄 粘土：ぶい・黄褐色 10 YR 7/3	-		R 35
31	F-10 P1-5	陶器	(体径) 23.2cm (器高) 16.5cm	外周ナデ・オサエ、内面 ナデ、貼付高台	赤	良好	内：オリーブ灰 外： 2.5 GY 6/1 5 GY 6/1	-	陶器身上部角丸?	R 33
32	付合層	陶器	(体径) 9.4cm (器高) 7.5cm	外周ナデ、内面ナデ・オ サエ	赤	良好	内：オリーブ灰 外： 5 GY 6/1	-	陶器底面か?	R 34



No	西土遺構	器 器	法 量	調査・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号	
33	SB 7215	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に磨粒織文を擬似 流木文、内面ナデ	良好	内：灰赤 外：*	2.5 YR 4/2	—		R 14	
34	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に磨粒織文、和 格字文、流木文、内面ナ デ	ややあまい	内：磨 外：にぶい黄緑	7.5 YR 7/6 10 YR 6/3	—		R 38	
35	包含層	弥生土器 壺	(口径) — cm (器高) — cm	外面に磨粒織文による平 行流木文、斜行文と流木 文、内面ナデ	良好	内：磨 外：*	7.5 YR 6/6	—		R 20	
36	SK 7220	土師器 長頸瓶	(口径) 27.4cm (器高) 17.2cm	口縁部ココナデ、外面外 磨粒ナデ、内面ヘラのち ね縦方向ナズリ	良好	内：にぶい黄緑 外：*	10 YR 7/4	口縁の 約1/8		R 57	
37	SK 7220	土師器 長頸瓶	(口径) 23.0cm (器高) 21.4cm	口縁部ココナデ、外面外 磨粒ナデ、内面ヘラのち ね縦方向ナズリ	良好	内：黄緑 外：*	10 YR 8/4	約90%		R 54	
38	SK 7220	土師器 長頸瓶	(口径) 21.0cm (器高) 35.2cm	口縁部ココナデ、外面外 磨粒ナデ、内面ヘラのち ね縦方向ナズリ	あまい	内：暗黄緑 外：にぶい黄	2.5 Y 5/2 2.5 Y 6/4	約80%		R 53	
39	SK 7220	土師器 壺	(口径) 34.3cm (器高) 15.3cm	口縁部ココナデ、外面上 部タテナデ、下部ヘラのち ね縦方向ナズリ	良好	内：磨 外：黄緑	7.5 YR 7/6 10 YR 8/4	約90%		R 59	
40	SK 7220	土師器 把手付鍋	(口径) 38.6cm (器高) 15.6cm	口縁部ココナデ、外面タ テナデ、内面ヘラのち ねと指痕直線	ややあまい	内：明黄緑 外：黄緑	10 YR 7/6 2.5 Y 7/4	約90%		R 52	
41	SK 7220	土師器 把手付鍋	(口径) 35.6cm (器高) 23.8cm	外面タテナデと不定方向 のヘラ、内面ココナデと ナズリ	密	良好	7.5 YR 7/6	約90%		R 65	
42	SK 7220	土師器 壺	(口径) 25.2cm (器高) 12.2cm	外面タテナデ、内面コ コナデ、ナズリ	良好	内：磨 外：黄緑	7.5 YR 6/6 7.5 YR 7/8	約10%		R 55	
43	SK 7220	土師器 壺	(口径) 10.8cm (器高) 3.2cm	口縁部ココナデ、外面ナ デ	良好	内：黄緑 外：黄	10 YR 8/4 7.5 YR 7/6	約90%	粘土継ぎき上げ痕あり	R 50	
44	SK 7220	土師器 壺	(口径) 11.4cm (器高) 3.6cm	口縁部ココナデ、外面ナ デ	密	良好	7.5 YR 7/6	約90%	粘土継ぎき上げ痕あり	R 49	
45	SK 7220	土師器 壺	(口径) 11.6cm (器高) 3.7cm	口縁部ココナデ、外面ナ デ	密	良好	内：よぶい暗 外：黄緑	7.5 YR 7/4 10 YR 8/3	約90%	底面外面に4本の黄	R 48
46	SK 7220	土師器 壺	(口径) 11.6cm (器高) 4.1cm	口縁部ココナデ、外面ナ デ	密	良好	内：磨 外：*	5 YR 7/6	約90%	粘土継ぎき上げ痕あり	R 74
47	SK 7220	土師器 台付鉢	(口径) 16.8cm (器高) 6.8cm (台径) 12.0cm	外面ヘラとびき、内面ナ デのち磨粒織文と縦線状の 織文、貼付黄青	密	良好	内：磨 外：*	5 YR 7/8	約80%		R 47
48	SK 7220	土師器 高杯	(口径) 11.2cm (器高) 7.9cm	外面ナデと磨いヘラ、内 面ナデ	密	ややあまい	内：磨 外：*	5 YR 7/8 5 YR 7/6	底面のみ 残存	内面ヘラキズと縦線	R 72
49	SK 7220	土師器 高杯	(口径) 16.2cm (器高) 3.8cm	口縁部ココナデ、下部ヘ ラナズリ、内面縦線状 織文	密	良好	内：黄緑 外：*	7.5 YR 8/6	底面の 約90%		R 51
50	SK 7220	須恵器 高杯	(口径) 10.6cm (器高) 3.6cm	体部ココナデ、内面ナ デ、底面ヘラ切り痕ナズ リ	密	良好	内：灰 外：*	7.5 Y 5/1 N 4/	約90%		R 68
51	SK 7220	須恵器 重右	(口径) 8.3cm (器高) 3.9cm	体部ココナデ、内面ナ デ、底面ココナデ後 半ナズリ	密	良好	内：灰 外：灰黄	2.5 Y 6/2 3 Y 6/2	ほぼ完 存	杯か？ コナデ右面	R 61
52	SK 7220	須恵器 平皿	(口径) 7.2cm (器高) 12.3cm	体部ココナデ、底面コ コナデナズリ	密	良好	内：暗オリーブ 外：灰	2.5GY 4/1 N 5/1	口縁面のみ 残存	上らら跡下底に上る 自然釉、コナデ右面	R 70
53	SK 7220	須恵器 壺	(口径) 10.5cm (器高) 2.9cm	体部ココナデ、底面コ コナデナズリ、貼付宝珠つ まみ	密	良好	内：灰 外：灰白	7.5 Y 4/1 5 Y 7/1	ほぼ完 存	上面に磨粒織文が 付着、コナデ右面	R 69
54	SK 7220	須恵器 壺	(口径) 13.3cm (器高) 3.4cm	体部ココナデ、底面コ コナデナズリ、貼付宝珠つ まみ	密	良好	内：灰 外：灰オリーブ	5 Y 6/2	約90%	コナデ右面	R 63
55	SK 7220	須恵器 壺	(口径) 14.0cm (器高) 4.3cm	体部ココナデ、底面コ コナデナズリ、貼付宝珠つ まみ	密	良好	内：磨 外：灰白	N 3/1 7.5 Y 6/1	完 存	底面のゆがみ大 コナデ右面	R 64
56	SK 7220	須恵器 壺	(口径) 16.9cm (器高) 3.7cm	体部ココナデ、底面コ コナデナズリ、貼付宝珠つ まみ	密	良好	内：灰 外：灰白	5 Y 7/1	約70%	コナデ右面	R 62
57	SK 7220	土師器 壺	(口径) 23.6cm (器高) 7.3cm	口縁部ココナデ、外面ヘ ラ、内面縦状ナ デ	ややあまい	内：黄緑 外：にぶい黄緑	10 YR 6/2 10 YR 7/4	口縁の 約1/4		底面に磨粒織文ナズリ	R 56
58	SK 7220	土師器 壺	(口径) 13.8cm (器高) 5.2cm	口縁部ココナデ、外面ヘ ラ、内面ヘラのち ね縦方向ナズリ	ややあまい	内：にぶい黄緑 外：黄緑	10 YR 7/3 2.5 Y 6/2	約85%			R 58
59	SK 7220	土師器 把手付鉢	(口径) 12.8cm (器高) 13.0cm	外面ヘラ、内面ヘラのち ね縦方向ナズリ	密	良好	内：磨 外：黄緑	2.5 YR 7/6 2.5 Y 8/3	約70%	外面に二道線状による 黄青みちらぬ	R 71
60	SK 7220	土師器 壺	(口径) 15.9cm (器高) 17.2cm	口縁部ココナデ、外面上 部タテナデ、下部ヘラのち ね縦方向ナズリ	ややあまい	内：黄 外：*	2.5 Y 8/3	約90%		表面の磨粒ナズリ	R 57
61	SK 7220	土師器 壺	(口径) 14.4cm (器高) 16.2cm	外面ヘラ、内面縦線状 ヘラナズリ	砂質多いが密	良好	内：にぶい黄緑 外：*	10 YR 7/4	ほぼ完 存	底面に縦線穿孔孔	R 66
62	SK 7220	土師器 壺	(口径) 14.9cm (台径) 16.7cm	外面ヘラ、内面ヘラのち ね縦方向ナズリ	ややあまい	内：磨 外：黄緑	10 YR 8/3 2.5 YR 7/6	約90%		外面に三角形のヘラ 忌り、底面内面に ヘラ忌り痕	R 73
63	SK 7220	須恵器 広口壺	(口径) 29.0cm (器高) 17.0cm	体部ココナデ、底面外 磨粒ナズリ、内面ナ ズリ、下部タテナデ、底面に 黄青	密	良好	内：磨 外：*	10 Y 7/1	口縁の 約1/3	口縁内面に文字磨 粒とみられるもの あり(黄青)	R 60
64	SK 7220	須恵器 内面磨	(口径) 25.0cm (器高) 18.4cm (器高) 5.8cm	体部ココナデ、外面外 磨粒ナズリ、内面ヘ ラのちね縦方向ナズ リ	密	良好	内：灰 外：灰 底面：灰 内面：灰 外：灰オリーブ	N 6/2 5 Y 6/1 5 Y 6/2	約90%	底面に磨成による 黄青みちらぬ	R 82

## 第108次調査

No	出土地	種類	法量	調整・取扱の種数	粘土	産成	色	調	残存率	備考	登録番号
1	SD 7252	御室跡 灰	(口徑) 14.6cm (直径) 11.2cm (底径) 3.2cm	体部コナナダ、底面外 面コナナダ、底面内 面	緻密	良好	内：灰 外：薄灰	5 Y 6/1 N 3/	約90%	底面外側に「一」の ヘア線あり コナ左回転	R 116
2	SD 7252	御室跡 灰	(口徑) 14.6cm (直径) 11.2cm (底径) 3.2cm	体部コナナダ、底面外 面コナナダ、底面内 面	緻密	良好	内：灰 外：*	5 Y 5/1	約70%	コナ左回転	R 117
3	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 10.5cm (直径) 3.4cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：にじい黄緑 外：*	10 YR 7/4	約40%		R 33
4	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 12.6cm (直径) 4.0cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：明赤褐 外：*	5 YR 5/6	約40%	粘土結合残存	R 29
5	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 15.5cm (直径) 4.2cm	口縁部コナナダ(内面2 段)、体部ナダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	約80%	内面に油煙の付着あり	R 32
6	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 13.2cm (直径) 3.8cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	約70%		R 25
7	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 13.2cm (直径) 3.4cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：灰 外：*	7.5 YR 6/6	ほぼ完全		R 26
8	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 13.2cm (直径) 3.2cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 7/8	ほぼ完全		R 24
9	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 13.2cm (直径) 3.1cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/6	約70%		R 35
10	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 12.3cm (直径) 3.2cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 7/6	ほぼ完全		R 23
11	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 16.5cm (直径) 3.5cm	口縁部二段コナナダ、体 部ナダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	約70%		R 30
12	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 16.6cm (直径) 3.8cm	口縁部二段コナナダ、体 部ナダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	約70%		R 31
12	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 18.8cm (直径) 3.0cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	約50%		R 28
14	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 18.0cm (直径) 2.5cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/8	約90%		R 26
15	SK 7261	土師跡 灰	(口徑) 18.3cm (直径) 2.8cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/8	約90%		R 27
16	SK 7261	土師跡 高杯	(口徑) 21.2cm (直径) 13.6cm (底径) 13.6cm	口縁・脚部部コナナダ、 底面外内面・ハナケナ リ、脚部外高杯	緻密	良好	内：灰 外：*	2.5 YR 6/6	約60%	底面外高杯にハケ目 線あり	R 34
17	SK 7261	土師跡 高杯	(口徑) 25.2cm (直径) 13.6cm (底径) 10.0cm	口縁部コナナダ、体部外 面・ハナケナリ、内面 ハケ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	約50%		R 36
18	SK 7261	土師跡 高杯	(口徑) 17.2cm (直径) 13.0cm	口縁部コナナダ、体部 外・ハナケナリ	緻密	良好	内：灰 外：*	7.5 YR 6/6	約30%	径2～3cmの砂 粒・小石含む	R 37
19	SK 7261	御室跡 高杯	(口徑) 5.8cm (直径) 15.6cm (底径) 9.8cm	口縁部・体部上中コナ ナダ、体部下中コナ ナダ、内面コナナダ	密	良好	内：灰黄褐 外：*	10 YR 5/2	約40%	体部上面に厚さ1mm 程度の黒煙灰あり コナ左回転	R 9
20	SK 7261	御室跡 高杯	(口徑) 13.7cm (直径) 3.2cm	口縁部コナナダ、底面外 面コナナダ	密	良好	内：灰黄 外：*	2.5 Y 7/2	約30%	コナ左回転	R 8
21	SK 7261	御室跡 中平鉢	(口徑) 35.6cm (直径) 19.2cm (底径) 8.3cm	口縁部コナナダ、外面コ ナナダ、内面コナ ナダ、底面外部調整	緻密	不良、縮め て軟質	内：灰白 外：*	2.5 Y 6/2	約70%	コナ左回転 調整時の遺物は極めて 薄い	R 10
22	SK 7261	御室跡 高杯	(口徑) 39.2cm (直径) 25.2cm	口縁部コナナダ、体部外 面・ハナケナリ、内面 ハケの5割(内面5割)	密	密	内：灰白 外：*	5 Y 8/2	約30%	調整時の遺物は極めて 薄い	R 11
23	SK 7260	土師跡 灰	(口徑) 13.0cm (直径) 3.5cm	口縁部二段コナナダ、体 部ナダ・オサエ	緻密	良好	内：灰 外：*	7.5 YR 7/6	ほぼ完全		R 13
24	SK 7260	土師跡 灰	(口徑) 13.4cm (直径) 3.7cm	口縁部二段コナナダ、体 部ナダ・オサエ	緻密	良好	内：灰 外：*	7.5 YR 7/6	ほぼ完全		R 14
25	SK 7260	土師跡 灰	(口徑) 13.0cm (直径) 3.1cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/6	ほぼ完全	内面に黒粒による 「一」記号	R 19
26	SK 7260	土師跡 灰	(口徑) 13.0cm (直径) 2.9cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/8	約90%		R 20
27	SK 7260	土師跡 灰	(口徑) 10.4cm (直径) 3.2cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 7/6	約50%		R 15
28	SK 7260	土師跡 灰	(口徑) 17.9cm (直径) 4.5cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/8	約90%		R 21
29	SK 7260	土師跡 高杯	(口徑) 14.5cm (直径) 2.6cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	緻密	良好	内：灰 外：*	5 YR 6/8	約90%		R 16
30	SK 7260	土師跡 高杯	(口徑) 16.2cm (直径) 2.5cm	口縁部コナナダ、体部ナ ダ・オサエ	密	ややあまい	内：灰 外：*	7.5 YR 7/8	約70%	調整時の遺物は薄い	R 22
31	SK 7260	土師跡 高杯	(口徑) 24.2cm (直径) 18.8cm	口縁・脚部部コナナダ、 底面外内面・脚部外高 杯ナリ、内面ナダ	緻密	良好	内：明赤褐 外：*	5 YR 5/8	約70%	調整時の遺物は極めて 薄い	R 12
32	SK 7260	御室跡 高杯	(口徑) 21.8cm (直径) 2.4cm	口縁部コナナダ、体部上 面コナナダ、内面 コナナダ	緻密	やや軟弱	内：灰 外：*	N 6/ 7.5 Y 6/1	約40%	コナ左回転	R 6

No	採土区画	砂 層	法 定	調査・検出の種数	土 質	構成	色 調	残存率	備 考	登録番号	
33	SK 7260	須磨砂 礫	(口径) 19.0cm (深高) 3.0cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ	密	良好	内：灰黄 外：*	2.5 Y 6/2	約80%	ココロ右回転	R 4
34	SK 7260	須磨砂 礫	(口径) 9.3cm (台径) 6.0cm (深高) 2.9cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ、底面外周ヘラ ケズリ	密	良好	内：黄 外：*	2.5 YR 7/3	ほぼ完全	体部下面に非に著しい ココロ左回転、底縁部が ココロ左回転	R 1
35	SK 7260	須磨砂 礫	(台径) 11.5cm (深高) 2.8cm	体部ココナダ、底面外 周ヘラケズリ	密	良好	内：灰白 外：*	2.5 Y 8/2	約40%	ココロ右回転	R 3
36	SK 7260	須磨砂 礫	(口径) 12.4cm (深高) 3.0cm	体部ココナダ、底面外 周ヘラケズリ	密	良好	内：灰黄 外：*	2.5 Y 6/2	約70%	ココロ左回転 口縁内部に自然磁石が ココロ目状に付着	R 2
37	SK 7260	須磨砂 礫	(口径) 24.4cm (深高) 5.8cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ	密	良好	内：暗灰黄 外：オリーブ黒	2.5 Y 4/2 5 Y 3/2	口縁の 約1/4	ココロ左回転 底縁部がココロ目状に付 着、灰白や黄褐色による 自然磁石が付着	R 5
38	SK 7260	須磨砂 礫	(口径) 15.0cm (深高) 5.9cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ	密	良好	内：灰黄 外：*	2.5 Y 7/2	口縁の 約1/4		R 7
39	SK 7260	土師器 土	(口径) 22.8cm (深高) 11.5cm	口縁部ココナダ、体部内 外周ヘラケ	密	良好	内：暗赤褐 外：黒	7.5 YR 6/6 10 YR 7/6	口縁の 約1/4	外周にスズ付着	R 18
40	SK 7260	土師器 土	(口径) 32.8cm (深高) 17.6cm	口縁部ココナダ、体部内 外ヘラケ、ケズリ、内面 ケズリ	密	良好	内：黄褐色 外：黒 外下半部：黒灰	10 YR 8/4 10 YR 5/1	約60%		R 17
41	SK 7288	土師器 土	(口径) 12.4cm (深高) 3.3cm	口縁部ココナダ、内面ナ グ内面ヘラケズリ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/6	約70%		R 51
42	SK 7288	土師器 土	(口径) 12.3cm (深高) 3.3cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	約60%		R 50
43	SK 7288	土師器 土	(口径) 14.0cm (深高) 3.0cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/6	約30%		R 52
44	SK 7288	土師器 土	(口径) 15.4cm (深高) 2.7cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：橙 外：*	5 YR 6/8	約40%		R 54
45	SK 7288	土師器 土	(口径) 17.1cm (深高) 2.3cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	約90%		R 53
46	SK 7288	須磨砂 礫	(口径) 12.3cm (台径) 8.9cm (深高) 3.4cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ、底面外周ヘラ ケズリ	密	良好	内：黄 外：*	2.5 YR 7/3	約40%	ココロ右回転	R 49
47	SK 7288	須磨砂 礫	(口径) 17.5cm (深高) 3.0cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ、上半部ココナ ダ	密	良好	内：灰黄 外：*	2.5 YR 6/2	約60%	ココロ左回転	R 47
48	SK 7288	須磨砂 礫	(口径) 20.0cm (深高) 3.4cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ、底面外周ヘラ ケズリ	密	良好	内：灰黄 外：*	2.5 Y 6/2	約50%	ココロ右回転	R 48
49	SK 7290	土師器 土	(口径) 10.1cm (深高) 3.0cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/6	約70%		R 107
50	SK 7290	土師器 土	(口径) 12.7cm (深高) 3.5cm	口縁部二股ココナダ、体 部ナグ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	約70%		R 113
51	SK 7290	土師器 土	(口径) 12.6cm (深高) 3.4cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/6	約50%		R 115
52	SK 7290	土師器 土	(口径) 17.3cm (深高) 17.3cm	口縁部二股ココナダ、体 部ナグ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	約40%		R 114
53	SK 7290	土師器 土	(口径) 13.5cm (深高) 3.4cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	約50%		R 108
54	SK 7290	土師器 土	(口径) 17.6cm (深高) 4.6cm	口縁部ココナダ、内面ナ グ、外周ヘラケズリ	密	整密	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	約60%	内部に6単位の磁粒 状埋文	R 112
55	SK 7290	土師器 土	(口径) 15.8cm (深高) 2.6cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	5 YR 5/6	約60%		R 111
56	SK 7290	土師器 土	(口径) 17.8cm (深高) 2.9cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：橙 外：*	2.5 YR 5/8	約70%		R 109
57	SK 7290	土師器 土	(口径) 35.4cm (深高) 15.1cm	口縁部ココナダ、体部内 外ヘラケ、内面下ヘラ ケズリ	密	良好	内：ぶい橙 外：*	7.5 YR 6/4	口縁の 約1/3	外周に二点焼成の赤 染がある	R 106
58	SK 7258	土師器 土	(口径) 14.4cm (深高) 3.0cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：明赤褐 外：*	2.5 YR 5/8	ほぼ完全		R 121
59	SK 7275	土師器 土	(口径) 13.6cm (深高) 3.6cm	口縁部二股ココナダ、体 部ナグ・オサユ	密	良好	内：橙 外：*	5 YR 6/8	約90%		R 118
60	SK 7275	土師器 土	(口径) 17.5cm (深高) 3.8cm	口縁部二股ココナダ、体 部ナグ・オサユ	密	良好	内：橙 外：*	5 YR 6/8	約30%		R 119
61	SK 7275	土師器 台付鉢	(口径) 19.0cm (台径) 9.8cm (深高) 5.8cm	口縁部ココナダ、体部内 外ヘラケ、内面ナグ、貼付 痕	密	良好	内：明赤褐 外：*	5 YR 5/6	約40%		R 120
62	SD 7273	土師器 土	(口径) 14.4cm (深高) 3.0cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ	密	良好	内：橙 外：*	7.5 YR 7/6	約30%		R 128
63	SD 7273	土師器 土	(口径) 13.4cm (深高) 3.4cm	口縁部二股ココナダ、体 部ナグ・オサユ	密	良好	内：橙 外：*	7.5 YR 7/6	約30%	底面に明確に掌 模文	R 125
64	SD 7273	土師器 台付鉢	(口径) 13.5cm (台径) 6.5cm (深高) 4.1cm	口縁部ココナダ、体部ナ グ・オサユ、貼付痕	密	良好	内：橙 外：*	7.5 YR 6/6	約40%	器表面の磨耗が著しい	R 124
65	SD 7273	須磨砂 礫	(口径) 13.2cm (台径) 6.6cm (深高) 4.7cm	口縁部ココナダ、体部コ コナダ、底面外周ヘ ラケズリ	密	良好	内：ぶい黄 外：*	2.5 Y 6/3 7.5 Y 6/1	約50%	内部に灰白ぶりの磁 粒がある	R 122

No.	出土設備	器種	高さ	調査・技法の特徴	粘土	焼成	色	調	残存度	備考	登録番号
66	SD 7273	瓦甕 杯?	(白磁) 7.2cm (焼高) 1.3cm	体部ロクロナデ、貼付高台、底面外周ナデ	赤	ややあまい	内：灰 外：#	7.5 Y 6/1	高倉の約1/3	ロクロ志図転	R 127
67	SD 7273	瓦輪陶 皿	(口徑) 14.4cm (白磁) 7.2cm (器高) 2.3cm	口縁部コナデ、体部コナデ、ナデ、貼付高台、底面外周ナデ、瓦輪形毛土	赤	良好	内：灰黄 外：# 釉：オレンジ黄	2.5 YR 7/2 5 Y 6/3	約30%	内面見込み部に三反しを施す ※タテ目転か?	R 128
68	SD 7273	瓦甕部 広口甕	(口徑) 27.4cm (焼高) 7.5cm	口縁部コナデ、体部コナデ	赤	良好	内：ぶい黄 外：灰	2.5 Y 6/3 5 Y 4/1	口縁の約1/8	内面に底反によるゴツメ状の凸凹付	R 123
69	SK 7250	土師器 杯	(口徑) 15.3cm (器高) 3.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	褐色	良好	内：明赤焼 外：#	5 YR 5/6	ほぼ完存	底面外周に砥石が痕かに残る	R 41
70	SK 7250	土師器 杯	(口徑) 13.6cm (器高) 3.2cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：橙 外：#	5 YR 6/6	完存		R 38
71	SK 7250	土師器 杯	(口徑) 14.3cm (器高) 3.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	褐色	良好	内：橙 外：#	5 YR 6/6	ほぼ完存	内面に磨割によるナ、記号	R 40
72	SK 7250	土師器 杯	(口徑) 14.7cm (器高) 3.4cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/4	ほぼ完存		R 39
73	SK 7250	土師器 杯	(口徑) 17.6cm (器高) 3.5cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：明赤焼 外：#	2.5 YR 5/8	約50%		R 42
74	SK 7250	土師器 皿	(口徑) 14.5cm (器高) 1.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	褐色	良好	内：明赤焼 外：#	5 YR 5/6	完存		R 44
75	SK 7250	土師器 皿	(口徑) 14.2cm (器高) 1.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：明赤焼 外：#	5 YR 5/6	約90%	粘土検査残存	R 46
76	SK 7250	土師器 皿	(口徑) 14.6cm (器高) 2.0cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：明赤焼 外：#	5 YR 5/6	約70%		R 45
77	SK 7250	土師器 皿	(口徑) 16.2cm (器高) 2.2cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	褐色	良好	内：明赤焼 外：#	5 YR 5/6	完存		R 43
78	SK 7252	土師器 皿	(口徑) 14.9cm (器高) 1.9cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：橙 外：#	5 YR 6/6	約50%		R 99
79	SK 7262	土師器 広口甕	(台徑) 8.1cm (器高) 4.1cm	底面外周ハケ、内面ナデ、貼付高台	赤	良好	内：明赤焼 外：#	5 YR 5/6	約50%	底面外周部にハケ目	R 98
80	SK 7317	土師器 杯	(口徑) 12.9cm (器高) 2.5cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/3	ほぼ完存	表面の割線着しい	R 66
81	SK 7317	土師器 杯	(口徑) 13.0cm (器高) 3.4cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/4	完存	表面面の割線着しい	R 67
82	SK 7317	土師器 杯	(口徑) 14.5cm (器高) 3.6cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/4	約70%		R 68
83	SK 7326	土師器 杯	(口徑) 12.6cm (器高) 2.5cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 6/3	約40%		R 104
84	SK 7326	土師器 杯	(口徑) 14.2cm (器高) 3.2cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや粗	良好	内：橙 外：#	5 YR 6/6	約50%		R 105
85	SK 7326	瓦輪陶 皿	(台徑) 6.6cm (焼高) 1.3cm	体部ロクロナデ、底面砥石、貼付高台	赤	良好	内：灰黄 外：#	2.5 Y 2/2	約40%	ロクロ志図転	R 103
86	SK 7326	瓦輪陶 皿	(台徑) 6.6cm (焼高) 2.6cm	体部ロクロナデ、底面ハケラズ、貼付高台	赤	良好	内：灰黄 外：#	2.5 Y 7/2	約30%	ロクロ志図転	R 102
87	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 12.1cm (器高) 3.1cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	灰褐色	良好	内：橙 外：#	7.5 YR 7/6	ほぼ完存	片あるいは工具の底面正等(型作りの痕跡か?)	R 69
88	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 12.3cm (器高) 3.1cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	灰褐色	良好	内：橙 外：#	7.5 YR 7/6	ほぼ完存		R 70
89	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 12.6cm (器高) 3.1cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが赤	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/4	ほぼ完存		R 72
90	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 14.0cm (器高) 2.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが赤	良好	内：黄褐色 外：#	10 YR 8/4	約70%		R 73
91	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 14.8cm (器高) 3.2cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが赤	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/4	約80%		R 74
92	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 15.0cm (器高) 2.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが赤	良好	内：橙 外：#	5 YR 7/6	約70%	表面面の磨線着しい	R 71
93	SK 7321	土師器 杯	(口徑) 12.6cm (器高) 3.0cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	やや砂質多いが赤	良好	内：橙 外：#	7.5 YR 7/6	完存		R 75
94	SK 7321	土師器 皿	(口徑) 11.2cm (器高) 1.4cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/3	ほぼ完存		R 78
95	SK 7321	土師器 皿	(口徑) 12.0cm (器高) 1.6cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：ぶい黄 外：#	7.5 YR 7/4	ほぼ完存		R 77
96	SK 7321	土師器 皿	(口徑) 12.1cm (器高) 1.7cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：ぶい黄 外：#	7.5 YR 7/4	完存		R 76
97	SK 7323	土師器 杯	(口徑) 12.1cm (器高) 2.3cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：ぶい黄焼 外：#	10 YR 7/4	約30%		R 61
98	SK 7323	土師器 杯	(口徑) 12.0cm (器高) 2.6cm	口縁部コナデ、体部ナデ・オサエ	赤	良好	内：灰 外：#	5 Y 6/1	約50%		R 60

No	出土遺物	器 種	体 積	重量	調整・技法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考	登録番号
99	SK 7323	土師器 杯	(口径) 11.8cm (底径) 2.7cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：黄 外：*	7.5 YR 7/6 *	約70%		R 62
100	SK 7323	土師器 盃	(口径) 12.6cm (底径) 1.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：黄 外：*	2.5 Y 8/3 *	約40%	器形のゆがみ大	R 63
101	SK 7323	土師器 盃	(口径) 12.6cm (底径) 1.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/4 *	約30%		R 64
102	SK 7323	土師器 台付小皿	(口径) 13.8cm (台径) 7.0cm (底径) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ、貼付高台	やや砂質多い が密	良好	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/4 *	約70%		R 59
103	SK 7323	土師器 台付小皿	(口径) 14.0cm (台径) 7.9cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ、貼付高台	密	良好	内：黄 外：*	7.5 YR 7/6 *	約80%		R 58
104	SK 7322	土師器 杯	(口径) 13.0cm (底径) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/3 *	約60%	器形のゆがみ大	R 56
105	SK 7322	土師器 杯	(口径) 14.7cm (底径) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：ぶい黄 外：*	7.5 YR 6/4 *	約30%		R 55
106	SK 7322	土師器 盃	(口径) 15.0cm (底径) 2.0cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/3 *	約30%		R 57
107	SK 7289	土師器 台付小皿	(口径) 10.4cm (台径) 5.1cm (底径) 3.3cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ、貼付高台、底部無縁部 ナデ	器 種 な 砂 質 (赤褐色片等) 含むが密	良好	内：ぶい黄 外：*	7.5 YR 5/4 *	完存		R 264
108	SK 7289	土師器 台付小皿	(口径) 11.6cm (台径) 6.0cm (底径) 3.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ、貼付高台、底部無縁部 ナデ	器 種 な 砂 質 (赤褐色片等) 含むが密	良好	内：ぶい黄 外：*	7.5 YR 5/4 *	完存		R 65
109	SK 7289	土師器 台付杯	(台径) 11.4cm (底径) 5.8cm	体部ナデ、貼付高台	器 種 な 砂 質 多 量に含む	良好	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/4 *	高台部のみ 残存		R 63
110	SK 7324	土師器 甗	(底径) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ、底部無縁部	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	ややあま い	内：ぶい黄 外：*	10 YR 6/3 *	約80%	内径いびつで、器形 不充分	R 101
111	SK 7324	灰輪陶器 甗	(台径) 7.0cm (底径) 3.9cm	体部ヨコナデ、貼付高 台	密	堅硬	内：黄 外：*	2.5 Y 7/3 *	約30%	灰輪不鮮明	R 100
112	SD 7309	ワタ土師器 杯	(口径) 8.6cm (台径) 3.0cm (底径) 2.0cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取	砂質多いが密	やや軟質	内：黄 外：*	10 YR 8/4 *	約50%	ワタ土師器 あるいは瓦器か?	R 171
113	SD 7309	ワタ土師器 杯	(口径) 7.7cm (台径) 4.0cm (底径) 2.5cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	あま い	内：黄 外：*	10 YR 8/4 *	約60%	器表面の磨耗著しい	R 173
114	SD 7309	ワタ土師器 杯	(底径) 4.1cm (底径) 2.8cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	やや軟質	内：黄 外：*	5 YR 6/6 *	約70%		R 175
115	SD 7309	ワタ土師器 杯	(口径) 9.9cm (台径) 5.5cm (底径) 2.8cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取、貼付高台	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	やや軟質	内：黄 外：*	7.5 YR 7/6 *	約30%	ワタ土師器	R 172
116	SD 7309	灰輪陶器 杯	(台径) 6.4cm (底径) 4.5cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取、貼付高台	密	良好	内：黄 外：*	2.5 Y 7/3 *	高台の 約1/2	ワタ土師器	R 174
117	SD 7309	陶器 杯	(口径) 9.8cm (台径) 4.0cm (底径) 2.7cm	体部ヨコナデ、体部外 面ナデ、よわい・貼付高台	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	ややあま い	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/4 *	約70%	ワタ土師器	R 170
118	SD 7309	ワタ土師器 杯	(台径) 5.4cm (底径) 2.3cm	体部ヨコナデ、底部外 面ナデ、貼付高台	密	ややあま い	内：黄 外：*	10 YR 8/4 *	高台部のみ 残存		R 169
119	SD 7308	陶器 小瓶	(台径) 4.0cm (底径) 1.6cm	体部ヨコナデ、内面ナ デ、貼付高台	多量に砂質含 むが密	良好	内：灰 外：*	7.5 YR 4/2 *	高台部のみ 残存	ワタ土師器	R 168
120	SD 7308	陶器 盃	(口径) 9.7cm (台径) 4.7cm (底径) 2.9cm	口縁部ヨコナデ、体部 ヨコナデ、底部外面ヨ コナデ、貼付高台	砂質多いが密	良好	内：黄 外：*	2.5 Y 7/2 *	約70%	ワタ土師器 口縁部外面から内面 にかけて自然剥落	R 167
121	SD 7269	土師器 盃	(口径) 13.6cm (底径) 3.4cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	良好	内：黄 外：*	7.5 YR 6/6 *	約70%	粘土結合性 は器種により一 致せず	R 130
122	SD 7269	土師器 盃	(口径) 13.4cm (底径) 3.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	良好	内：黄 外：*	10 YR 7/6 *	約90%		R 132
123	SD 7269	土師器 盃	(口径) 13.9cm (底径) 3.5cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ	器 種 な 砂 質 多 量に含む	あま い	内：黄 外：*	2.5 Y 8/3 *	約65%	白色高 濃度の磨耗著しい	R 131
124	SD 7269	土師器 小皿	(口径) 8.7cm (底径) 1.9cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	器 種 な 砂 質 多 量に含む	良好	内：黄 外：*	1.5 Y 5/2 *	約60%		R 138
125	SD 7289	ワタ土師器 盃	(口径) 12.9cm (台径) 7.5cm (底径) 4.5cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取	器 種 な 砂 質 多 量に含む	良好	内：黄 外：*	5 YR 6/8 *	約70%		R 133
126	SD 7269	灰輪陶器 三足盃	(口径) 17.3cm (底径) 2.8cm	口縁部ヨコナデ、体部 ヨコナデ、灰輪切取	密	良好	内：オリーブ 外：*	5 Y 6/3 *	口縁の 約1/7		R 130
127	SD 7269	土師器 高杯	(底径) 8.5cm	外面ヘラズリ	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	良好	内：黄 外：*	7.5 YR 8/6 *	器底のみ 残存		R 135
128	SD 7269	灰輪陶器 甗	(台径) 7.6cm (底径) 2.2cm	体部ヨコナデ、底部外 面切取、貼付高台	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	良好	内：黄 外：*	2.5 Y 6/2 *	高台部のみ 残存	ワタ土師器	R 134
129	SD 7307	土師器 小瓶	(口径) 8.7cm (底径) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：ぶい黄 外：*	10 YR 7/4 *	約50%		R 156
130	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.8cm (底径) 2.1cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	砂質多量に含 むが密	良好	内：黄 外：*	7.5 YR 6/6 *	約90%		R 150
131	SD 7307	土師器 小皿	(口径) 8.4cm (底径) 1.6cm	口縁部ヨコナデ、体部ナ デ・オサエ	器 種 な 砂 質 多 量に含むが密	良好	内：黄 外：*	10 YR 8/3 *	約40%		R 159

No.	出土遺構	部 位	位 置	調査・発掘の特徴	地 土	地 成	色 調	残存度	備 考	発露番号	
132	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 9.0cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：にぶい黄褐色 外：*	10 YR 7/4	約50%	粘土結合感残る	R 157
133	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 9.4cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄褐色 外：*	10 YR 8/3	約30%		R 158
134	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 9.2cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	砂質を多量に 含む	ややあまい	内：明黄褐色 外：浅黄褐色	10 YR 6/5 10 YR 8/4	完存	器表面の磨耗著しい	R 155
135	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 8.8cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄 外：*	2.5 Y 8/3	完存	粘土結合感残る	R 153
136	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 9.2cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含む	ややあまい	内：浅黄褐色 外：*	10 YR 8/4	完存		R 154
137	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 9.7cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含む	良好	内：黄褐色 外：*	2.7 Y 8/3	約70%		R 143
138	SD 7307	土師器 小皿	(口徑) 8.8cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部内 面へクのものナ、外周ナ	粗粒	良好	内：色 外：*	5 YR 6/6	約30%	器底系「て」の字口 縁内面に深く凹凸目状 の残る	R 145
139	SD 7307	土師器 皿	(口徑) 8.8cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：黄褐色 外：*	2.5 Y 8/3	完存	粘土結合感残る	R 153
140	SD 7307	土師器 皿	(口徑) 13.8 cm (底径) 3.5cm	口縁部二重コナダ、体部 ナデ・オサエ	幾細な砂質を 多量に含むが密	やや軟弱	内：黄 外：*	5 YR 6/6	約40%		R 163
141	SD 7307	土師器 皿	(口徑) 13.5cm (底径) 3.2cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	密	良好	内：浅黄褐色 外：*	10 YR 8/4	約20%	内面にへら状工具の 当たり痕が残る	R 162
142	SD 7307	土師器 皿	(口徑) 13.8cm (底径) 3.4cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：にぶい黄褐色 外：*	10 YR 6/4	約60%		R 161
143	SD 7307	土師器 皿	(口徑) 14.3cm (底径) 3.6cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：黄褐色 外：黒褐色	2.5 Y 7/3 10 YR 3/2	約70%		R 160
144	SD 7307	土師器 皿	(口徑) 13.5cm (底径) 3.1cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄褐色 外：*	10 YR 8/4	約60%		R 165
145	SD 7307	ワタ土師器 餅	(口徑) 8.1cm (底径) 3.4cm (底径) 1.7cm	体部コナダ、底面粗 粒半切粒	密	あまい	内：浅黄褐色 外：*	10 YR 8/3	ほぼ完存	コロボ右廻転	R 147
146	SD 7307	ワタ土師器 小皿	(口徑) 9.2cm (底径) 1.7cm	体部コナダ、底面粗 粒半切粒	密	やや軟弱	内：浅黄褐色 外：*	7.5 YR 8/4	約40%	コロボ右廻転	R 146
147	SD 7307	ワタ土師器 餅	(底径) 6.2cm (底径) 2.3cm	体部コナダ、底面粗 粒半切粒	密	やや軟弱	内：灰白 外：*	2.5 Y 8/2	約50%	コロボ右廻転	R 164
148	SD 7307	土師器 右付皿	(台径) 5.4cm (底径) 2.2cm	体部コナダ、貼付高 台	密	ややあまい	内：明黄褐色 外：*	5 YR 5/6	約50%		R 166
149	SD 7307	土師器 右付皿	(台径) 7.0cm (底径) 3.3cm	体部コナダ、貼付高 台、底面外面半切粒	密	堅軟	内：黄 外：*	5 YR 6/6	器底のみ 残存	コロボ右廻転	R 151
150	SD 7307	ワタ土師器 右付餅	(口徑) 10.5cm (底径) 4.0cm (底径) 3.3cm	口縁部コナダ、体部 コナダ、貼付高台	密	堅軟	内：黄 外：*	5 YR 6/6	約80%	コロボ右廻転	R 144
151	SD 7307	陶器 埴(土師製)	(台径) 6.3cm (底径) 2.2cm	体部コナダ、底面外 面半切粒、貼付高台	幾細な砂質を 多量に含むが密	良好	内：灰白 外：*	5 Y 8/1	高台の 約1/4	コロボ右廻転	R 148
152	SD 7307	陶器 埴(土師製)	(台径) 5.5cm (底径) 1.1cm	体部コナダ、底面外 面ナ、貼付高台	密	やや軟弱	内：黄褐色 外：*	2.5 Y 8/3	高台の 約1/4	コロボ右廻転	R 149
153	SD 7307	陶器 埴(土師製)	(口徑) 16.3cm (台径) 6.2cm (底径) 5.6cm	口縁部コナダ、体部外 面コナダ、内面ナ、 底面外面ナ、貼付高台	幾細な砂質多 量に含む	良好	内：灰黄 外：*	2.5 Y 6/2	約50%	コロボ右廻転、高台 部分に粗粒状、底面 内面に「3」に自然焼成 の残る	R 142
154	SK 7305	土師器 小皿	(口徑) 9.1cm (底径) 2.1cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄褐色 外：*	10 YR 8/4	完存		R 85
155	SK 7305	土師器 小皿	(口徑) 9.1cm (底径) 2.1cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：にぶい黄褐色 外：*	10 YR 7/4	完存	器底外側にわずかに 磨耗がある	R 84
156	SK 7305	土師器 小皿	(口徑) 9.1cm (底径) 1.8cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄 外：*	2.5 Y 7/3	完存	粘土結合感あり	R 86
157	SK 7305	土師器 小皿	(口徑) 9.6cm (底径) 1.8cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：黄褐色 外：*	2.5 Y 8/3	完存		R 87
158	SK 7305	土師器 小皿	(口徑) 10.8cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含む	良好	内：にぶい黄褐色 外：*	10 YR 7/4	完存	内面にへら状工具の 当たり痕が残る	R 88
159	SK 7305	土師器 皿	(口徑) 12.4cm (底径) 2.0cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄 外：*	2.5 Y 7/3	約40%		R 91
160	SK 7305	土師器 皿	(口徑) 11.2cm (底径) 2.7cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：浅黄 外：*	2.5 Y 8/3	完存		R 82
161	SK 7305	土師器 皿	(口徑) 12.9cm (底径) 2.5cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含む	良好	内：黄褐色 外：*	2.5 Y 8/3	完存	口縁部に油煙付着	R 80
162	SK 7305	土師器 皿	(口徑) 13.4cm (底径) 3.2cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：明黄褐色 外：*	10 YR 6/6	ほぼ完存	器表面の磨耗著しい	R 81
163	SK 7305	土師器 皿	(口徑) 14.0cm (底径) 3.5cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含むが密	良好	内：黄褐色 外：*	2.5 Y 7/2	約70%		R 89
164	SK 7305	土師器 皿	(口徑) 13.7cm (底径) 3.5cm	口縁部コナダ、体部ナ デ・オサエ	幾細な砂質多 量に含む	良好	内：にぶい黄褐色 外：*	10 YR 7/4	ほぼ完存	粘土結合感残る	R 79

No	出土遺物	種 類	数 量	調査・検出の経緯	出 土	発 見	色 調	残存度	備 考	記録番号	
165	SK 7305	土師器 皿	(口径) 14.1cm (底径) 3.7cm	口縁部コナダ、底部コ ナダ・オヤエ	楕円な砂質多 量に含むが茶	良好	内：にがい黄緑 外： -	10 YR 7/4	完存	粘土結合痕あり	R 90
166	SK 7305	土師器 磨面	(底径) 17.5cm	脚柱部外面へラケズリ、 内面・脚底コナダ	径1.8mm-2.5mm の砂粒多量に 含む	良好	内：淡黄 外： -	2.5 Y 8/3	内面にのみ残 存	白色土	R 94
167	SK 7305	コナダ土師器 台付杯	(台径) 4.8cm (底径) 2.7cm	体部コナダ、底部外 面非切断ナダ、貼付高台	茶	良好	内：淡黄 外： -	2.5 Y 8/3	約50%	コナダ右面貼	R 92
168	SK 7305	コナダ土師器 台付杯	(台径) 6.0cm (底径) 2.7cm	体部コナダ、底部外 面コナダ、貼付高台	砂質を多量に 含むが茶	良好	内：黄 外： -	7.5 YR 6/6	約50%	コナダ右面貼	R 93
169	SK 7305	コナダ土師器 台付杯	(口径) 11.2cm (台径) 5.4cm (底径) 3.7cm	口縁部コナダ、体部コ ナダ、底部外周非切断	茶	良好	内：黄 外： -	7.5 YR 6/6	約70%	コナダ右面貼	R 95
170	SK 7305	コナダ土師器 杯	(口径) 9.8cm (底径) 4.4cm (底径) 2.0cm	口縁部コナダ、体部コ ナダ、底部外周非切断	楕円な砂質多 量に含むが茶	良好	内：黄黒煙 外： -	10 YR 8/4	完存	コナダ右面貼	R 83
171	SB 7300	灰青銅 蓋	(口径) 13.3cm (底径) 1.9cm	口縁部コナダ、底部外 周3/4コナダナダ	径1mm程度の 砂を含むが茶	良好	内：灰 外： -	5 Y 5/1	約40%	先付者土器、コナダ 右面貼やで覆れる	R 199
172	SK 7317	灰輪軸筋 皿	(台径) 8.2cm (底径) 1.9cm	体部コナダ、底部外 周コナダ、貼付高台	緻密	良好	内：灰黄 外： 灰白	2.5 Y 7/2 2.5 Y 8/2	高台のみ残 存	先付者土器、脚柱部 1.5mm程度、脚柱部 底部に黒色ものが付 着不可定	R 198
173	包含層	灰青銅 磨面	(底径) 11.9cm (底径) 2.2cm	体部コナダ、底部外 周非切断	茶が、やや 砂質多い	良好	内：灰白 外： 灰白	2.5 Y 5/3 5 Y 7/1	底面の 約1/4	先付者土器、やや磨 れ、コナダ右面貼	R 203
174	包含層	灰輪軸筋 碗	(台径) 6.8cm (底径) 1.7cm	体部コナダ、底部外 周非切断、貼付高台	楕円な砂質多 量に含むが茶	良好	内：灰 外： -	2.5 Y 6/2	約50%	先付者土器、ほとんど で覆れる	R 204
175	SK 7261	灰青銅 磨面	(口径) 20.8cm (底径) 2.0cm	口縁部コナダ、体部 上面1/2コナダナダ	茶	良好	内：灰オリーブ 外： 灰白	5 Y 6/2 7.5 Y 7/1	約30%	先付者土器、磨面部 に、先付者土器、コナダ 右面貼	R 200
176	SD 7276	灰青銅 磨面	(口径) 18.8cm (底径) 2.1cm	口縁部コナダ、体部コ ナダ、底部外周コナダ	楕円な砂質多 量に含むが茶	良好	内：灰白 外： -	5 Y 7/1	約50%	先付者土器、内外面 付着面内面や中層具す ず、コナダ右面貼	R 205
177	SK 7260	土師器 杯	(口径) 17.4cm (底径) 4.5cm	口縁部設コナダ、体 部でいらいコナダ	茶	良好	内：明赤褐 外： -	5 YR 5/6	約60%	磨面者土器、内面全 面に付着	R 254
178	SK 7288	土師器 杯	(口径) 16.2cm (底径) 4.3cm	口縁部多段コナダ、体 部ナダ	楕円な砂質を やや含むが茶	良好	内：明赤褐 外： -	2.5 YR 5/8	約40%	磨面者土器、内面全 面に付着	R 212
179	SK 7288	土師器 杯	(口径) 18.1cm (底径) 4.0cm	体部内面ナダ、外面ヘ ラケズリ	茶	良好	内：灰褐 外： 明赤褐	7.5 YR 4/2 2.5 YR 5/2	約40%	磨面者土器、内面下 面に付着	R 213
180	SK 7250	土師器 皿	(口径) 14.8cm (底径) 1.7cm	口縁部コナダ、体部ナ ダ・オヤエ	茶	良好	内：黄 外： -	5 YR 6/8	約40%	底(磨面?) 付着土 器、内面にわずかに 付着	R 211
181	包含層	灰青銅 内面貼	(底径) 11.4cm (底径) 6.4cm	体部コナダ、底部コ ナダ	茶	良好	内：灰白 外： -	7.5 Y 7/1	底面の 約1/4	磨面外面に白粉が 付着、内面にわずかに 付着、コナダ右面貼	R 189
182	G-15 P14-10	灰青銅 磨面	(底径) 12.2cm (底径) 2.8cm	体部コナダ、底部コ ナダ	茶	良好	内：黄灰 外： 灰白	2.5 Y 7/3 5 Y 7/3	約30%	183と同一体かつ 磨面に2本一組の跡	R 190
183	SK 7288	灰青銅 内面貼	(台径) 16.4cm (底径) 1.4cm	脚底部コナダ	茶	良好	内：淡黄 外： 灰白	2.5 Y 7/3 5 Y 7/3	磨面の 約1/8	183と同一体かつ 脚部に3mm程度の 跡がしきられる	R 191
184	SK 7261	灰青銅 内面貼	(台径) 14.4cm (底径) 1.5cm	脚底部コナダ	茶	良好	内：にがい黄褐 外： にがい赤褐	10 YR 5/3 5 YR 4/3	磨面の 約1/3	脚部に約3mm程度の 跡がしきられる	R 192
185	SD 7269	灰輪軸筋 灰手器	-	全面ヘラケズリで成形	茶	良好	内：淡黄 外： -	2.5 Y 7/3	-	-	R 193
186	SB 7285	灰青銅 蓋	(口径) 15.2cm (底径) 1.9cm	口縁部コナダ、体部上 面1/2コナダナダ	茶	良好	内： - 外： 暗灰黄	5 Y 5/1 2.5 Y 3/1	約30%	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ、コナダ 右面貼	R 185
187	包含層	灰青銅 磨面	(口径) 17.0cm (台径) 10.8cm (底径) 2.8cm	口縁部コナダ、体部コ ナダ、底部外周コ ナダ、貼付高台	茶	ややあま、	内：灰 外： -	7.5 Y 6/1	約20%	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ	R 183
188	SK 7260	灰青銅 磨面	(口径) 25.0cm (底径) 3.7cm	口縁部・体部内面コ ナダ、底部外周下コ ナダナダ	茶	良好	内：淡黄 外： -	2.5 Y 6/2	口縁の 約1/8	灰面、内面に磨 面はるが、磨面は少 ない	R 186
189	SD 7311	灰輪軸筋 皿	(台径) 7.0cm (底径) 3.9cm	体部コナダ、底部外 周コナダ、貼付高台、灰 輪軸筋受け	茶	良好	内：淡黄 外： -	2.5 Y 7/2	約60%	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ、コナダ 右面貼	R 181
190	SD 7257	灰青銅 杯	(台径) 7.9cm (底径) 1.7cm	体部コナダ、底部外 周ナダ、貼付高台	茶	良好	内：灰 外： -	5 Y 6/1	高台のみ残 存	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ、コナダ 右面貼	R 184
191	包含層	灰青銅 杯	(台径) 9.7cm (底径) 2.2cm	体部コナダ、底部外 周ナダ、貼付高台	茶	良好	内：灰白 外： -	7.5 Y 7/1	高台の 約1/2	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ	R 187
192	SK 7250	脚底筋 (山茶碗)	(台径) 7.4cm (底径) 2.5cm	体部コナダ、底部外 周非切断、貼付高台	砂質多いが 茶、黄褐色の 斑点状に染まる	良好	内：灰黄 外： -	2.5 Y 7/2	約40%	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ、コナダ 右面貼	R 182
193	包含層	脚底筋 (山茶碗)	(台径) 7.5cm (底径) 2.8cm	体部コナダ、底部外 周非切断、貼付高台	茶	良好	内：灰白 外： 灰黄	5 Y 7/2	底面ののみ残 存	底面外部に「中」の 痕、高台に粘着痕	R 196
194	包含層	脚底筋 把手付蓋	-	外面コナダヘラケズリ、 内面コナダナダ	茶	良好	内：緑灰色の灰輪 外： 灰黄	2.5 Y 7/3	磨面のみ残 存	外面に「冴(?)」の 痕あり	R 194
195	包含層	ミニチュア 土師器	(口径) 4.8cm (底径) 1.7cm	体部ナダ	楕円な砂質多 量に含むが茶	良好	内：にがい黄緑 外： -	10 YR 7/3	口縁の 約1/2	土師器	R 206
196	SK 7272	灰輪軸筋 把手付杯	-	外面ヘラケズリ	緻密	軟質	内：にがい黄緑 外： 灰白	10 YR 7/1 10 Y 7/1	把手部のみ 残存	S方向の縦取り	R 215
197	包含層	灰輪軸筋 皿	(口径) 16.6cm (台径) 8.7cm (底径) 2.7cm	口縁部コナダ、体部内 外面ヘラケズリ、底部外 面ヘラケズリ、貼付高台	緻密	軟質 黄褐色	内：黄灰 外： 灰黄	10 YR 6/2	約30%	灰面、内面に磨 面、磨面すずむ、コナダ 右面貼	R 214

No.	出土遺物	器種	数量	調査・技法の特徴	胎土	構成	色	調	残存度	備考	登録番号
198	SK 7321	白磁 碗	(残高) 3.1cm	外巻ケズリ。内面ナガの 土に上り均質な白色釉	緑黄	堅緻	軸: 灰白 胎土: 灰白黄緑	7.5 Y 8/1 10 YR 7/2	以縁の一部 のみ残存	玉縁白縁。外巻に火 をうけたような変色	R 207
199	SD 7254	白磁 碗	(台径) 6.9cm (底径) 2.0cm	内面ロコナダ。削り出 しの縁高台	赤	良好	軸: 灰白 胎土: 灰黄	5 Y 8/2 2.5 Y 7/2	高台部の 約1/2	釉割れがあり、わず かに気泡を成む	R 209
200	SK 7305	白磁 碗	(台径) 6.4cm (底径) 2.5cm	内面ロコナダ。削り出 しの縁高台	緑黄だが、微 細な灰みら れる	堅緻	軸: 灰オリーブ 胎土: 灰白	7.5 Y 6/2 5 Y 8/1	高台部の 約1/2	底辺部の底にみ かた気泡がみられる	R 208
201	SK 7305	青磁 碗	(台径) 5.4cm (底径) 1.3cm	内面ロコナダ。削り出 しの縁高台	緑黄	良好	軸: オリーブ灰 胎土: 灰白	2.5 G 6/1 5 Y 7/2	高台部の 約1/2	底辺部に色染 みあり	R 210
202	包含層	陶器 ハコ	(口径) 8.2cm (底径) 2.3cm (残高) 2.8cm	体部ロコナダ。底縁外 部彫刻未切取	赤	良好	内: 灰黄 外: *	2.5 Y 6/2 *	約60%	断面観察。外縁半部 に火がかり。ロ コナ右面筋	R 255
203	包含層	陶器 碗?	(口径) 6.4cm (残高) 1.6cm	体部ロコナダ。底縁外 部削り出し縁高台	赤	良好	内: 灰白 外: *	2.5 Y 6/2 *	高台部の 約1/2	断面観察。外縁半部 に火がかり。ロ コナ右面筋	R 258
204	包含層	陶器 碗	(口径) 6.6cm (残高) 2.5cm	体部ロコナダ。底縁外 部彫刻未切取	赤	良好	内: 灰白 外: *	5 Y 7/1 *	底部の 約1/2	断面観察 ロコナ右面筋	R 261
205	包含層	陶器 ハコ	(口径) 7.1cm (残高) 2.1cm	体部ロコナダ。底縁外 部削り出し縁高台	赤	良好	内: 灰黄 外: *	2.5 Y 6/2 *	高台部の 約1/2	断面観察。高台に粉 子層。内面底縁部に 沿って気泡がみ られる。ロコナ 右面筋	R 256
206	包含層	灰陶輪廊 器	(口径) 12.9cm (台径) 6.5cm (底径) 4.5cm	口縁部ロコナダ。体部 ロコナダ。体部外周ナガ 足付高台	赤	堅緻	内: 灰黄 外: *	2.5 Y 7/2 *	約30%	断面観察? 底縁半部 まで。内面にゴ マメ状の気泡 ロコナ右面筋	R 257
207	包含層	陶器 ハコ	(口径) 15.6cm (底径) 6.8cm (口径) 4.5cm	口縁部ロコナダ。体部 ロコナダ。体部外周彫刻 未切取。底辺部にナガ 足付高台	赤	あまり	内: 灰オリーブ 外: *	5 Y 6/2 *	約30%	底縁75%まで まで。内面にゴ マメ状の気泡 ロコナ右 面筋	R 260
208	包含層	陶器 碗	(口径) 21.6cm (底径) 10.5cm (口径) 5.7cm	口縁部ロコナダ。体部 ロコナダ。体部外周彫刻 未切取。底辺部にナガ 足付高台	赤	良好	内: 黄緑 外: オリーブ赤	2.5 Y 3/3 5 Y 3/1	約20%	断面観察。内面にゴ マメ状の気泡あり	R 259
209	SK 7314	灰土器 碗?	-	底縁外周ナガ。内面同心 円に「+」字のナガ足	赤	堅緻	内: 灰オリーブ 外: *	5 Y 6/2 *	-	底縁片のみ	R 176
210	SK 7289	灰土器 碗?	-	外周縁部状。内面同心円 に「+」字の印目	赤	良好	内: 灰オリーブ 外: *	5 Y 6/1 *	-	212と同一様?	R 178
211	SD 7314	灰土器 碗?	-	外周縁部状。内面同心円 に「+」字の印目	赤	良好	内: 灰オリーブ 外: *	5 Y 6/1 *	-	-	R 177
212	SK 7289	灰土器 碗?	-	外周縁部状。内面同心円 に「+」字の印目	赤	良好	内: 灰オリーブ 外: *	5 Y 6/1 *	-	210と同一様?	R 179

No.	出土遺物	器種	数量	調査・技法の特徴	胎土	構成	色	調	残存度	備考	登録番号
213	SK 7261	土製品 土罐	(径) 5.7cm (残高) 3.7cm	(孔径) 1.0cm (残高) 56.6g	赤	良好	灰白	10 YR 7/4	ほぼ完全	管状土罐。土師 製	R 239
214	SK 7261	土製品 土罐	(径) 5.9cm (残高) 3.5cm	(孔径) 1.0cm (残高) 44.6g	赤	良好	灰白	10 YR 7/4	約80%	内面に黄緑 風乾がある	R 240
215	SK 7261	土製品 土罐	(径) 6.0cm (残高) 3.7cm	(孔径) 1.3cm (残高) 69.4g	赤	良好	灰白	10 YR 6/4	約70%	管状土罐 土師製	R 248
216	SK 7261	土製品 土罐	(径) 6.5cm (残高) 4.0cm	(孔径) 1.2cm (残高) 94.3g	赤	良好	灰黄	2.5 Y 5/2	完全	管状土罐 土師製	R 238
217	SK 7261	土製品 土罐	(径) 6.2cm (残高) 2.6cm	(孔径) 0.7cm (残高) 31.9g	赤	良好	灰黄	2.5 Y 6/2	両端部欠損	管状土罐 土師製	R 247
218	SK 7261	土製品 土罐	(径) 6.9cm (残高) 2.8cm	(孔径) 0.8cm (残高) 36.6g	赤	良好	灰白	10 YR 7/4	両端部欠損	管状土罐 土師製	R 246
219	SD 7254	土製品 土罐	(径) 6.2cm (残高) 1.9cm	(孔径) 0.4cm (残高) 12.3g	赤	良好	灰黄	2.5 Y 6/2	完全	管状土罐。土師 製。両端部欠損あり	R 253
220	SK 7261	土製品 土罐	(径) 6.2cm (残高) 2.8cm	(孔径) 0.9cm (残高) 42.1g	赤	良好	灰白	10 YR 7/4	ほぼ完全	管状土罐。土師 製。両端部欠損あり	R 249
221	SK 7261	土製品 土罐	(径) 6.2cm (残高) 1.7cm	(孔径) 0.4cm (残高) 12.6g	赤	良好	黄	5 YR 6/6	両端部欠損	管状土罐 土師製	R 251
222	SK 7261	土製品 土罐	(径) 5.4cm (残高) 1.8cm	(孔径) 0.6cm (残高) 19.5g	赤	良好	灰白	10 YR 7/3	完全	管状土罐。土師 製。両端部欠損あり	R 245
223	SK 7261	土製品 土罐	(径) 5.3cm (残高) 1.9cm	(孔径) 0.5cm (残高) 13.6g	赤	良好	灰白	10 YR 7/3	完全	管状土罐。土師 製。両端部欠損あり	R 252
224	SK 7261	土製品 土罐	(径) 5.0cm (残高) 2.0cm	(孔径) 0.6cm (残高) 19.5g	赤	良好	灰白	10 YR 7/3	完全	管状土罐。土師 製。両端部欠損あり	R 243
225	SK 7261	土製品 土罐	(径) 4.0cm (残高) 1.2cm	(孔径) 0.3cm (残高) 4.3g	赤	良好	黄	2.5 Y 7/4	両端部欠損	管状土罐 土師製	R 244
226	SK 7250	土製品 土罐	(径) 5.1cm (残高) 2.9cm	(孔径) 0.7cm (残高) 29.2g	赤	良好	灰黄	2.5 Y 8/4	片面磨蝕	管状土罐。土師 製。断面に磨蝕あり 底縁より上縁部し て	R 232

注) №は本書遺物実測図の番号と一致する。

○器種の項では、それぞれ「～形土器」の表現を省略した。

○数量の「口径」は口縁輪廊部の最高点を結んだ長さを示す。

○色調は農林水産省農林水産技術普及事務局他監修の『新版標準土色誌』(1988年度版)を参照した。

○登録番号は遺物・図面の整理及び管理上の番号で、各調査次数ごとに実測された遺物すべてに通して付されている。

### 斎宮跡発掘調査次数一覧表

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	S 45	試掘	13-6	51	中垣内375-1 (南)
2	46	古里A地区	13-7		東 裏328 (小川)
3		◇ B地区	13-8		西加座2771-1 (細井)
4	47	◇ C地区	13-9		◇ 2773 (細井)
5	48	◇ D地区	13-10		東 裏362-1 (児島)
6-1		Aトレンチ	13-11		西加座2681-1 (浮田)
6-2		Bトレンチ	13-12		◇ 2721-3, 2724-2 (森川)
6-3		Cトレンチ	13-13		東前沖2506-2 (宮下)
6-4		Dトレンチ	14-1	52	2 Eトレンチ
6-5		Eトレンチ	14-2		2 Fトレンチ
7	49	古里E地区	14-3		2 Gトレンチ
8-1		Fトレンチ	14-4		2 Hトレンチ
8-2		Gトレンチ	14-5		2 Iトレンチ
8-3		Hトレンチ	15		斎宮小学校
8-4		Iトレンチ	16-1		竹川町道A
8-5		Jトレンチ	16-2		◇ B
8-6		Kトレンチ	16-3		◇ C
8-7		Lトレンチ	16-4		◇ D
8-8		Mトレンチ	16-5		◇ E
8-9		Nトレンチ	16-6		◇ F
8-10		Oトレンチ	17-1		竹神社社務所
8-11		Pトレンチ	17-2		竹神社防火用水
9-1	50	Qトレンチ	17-3		西加座2721-6 (西沢)
9-2		Rトレンチ	17-4		楽 殿2894-1 (中川)
9-3		Sトレンチ	17-5		◇ 2895-1 (西口)
9-4		Tトレンチ	17-6		出在家3237-3 (吉川)
9-5		Uトレンチ	17-7		◇ 3237-1 (里中)
9-6		Vトレンチ	17-8		楽 殿2894-1 (西村)
9-7		Wトレンチ	17-9		東海造機
9-8		Xトレンチ	18	53	6 A E L-E・I (下園)
9-9		Yトレンチ	19		6 A E N-M・N・O (御館)
9-10		Zトレンチ	20		6 A E O-I・J (柳原)
10		広域間道路	21-1		6 A G N-B (鍛冶山、北山)
11-1		西加座2661-1 (山中)	21-2		6 A E I-D (西加座2711-2, 2717-4他、山路)
11-2		◇ 2681-1 (山名)	21-3		6 A F D-D (西前沖2649-1、大西)
11-3		東前沖2483-2 (前田)	21-4		6 A F H-F (西加座2678, 2679-3、森下)
11-4		下 園2926-9 (吉木)	21-5		6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-1	51	2 Aトレンチ	21-6		6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-2		2 Bトレンチ	21-7		6 A F E-F (東前沖2631-1、鈴木)
12-3		2 Cトレンチ	21-8		6 A E G-A (楽殿2909-3、大西)
12-4		2 Dトレンチ	21-9		6 A E D-R (篠林3218-3、宇田)
13-1		東加座2436-7 (浜口)	22-1		6 A G U
13-2		◇ 2436-4 (中村)	22-2		6 A G U
13-3		古 里3283 (村上)	22-3		6 A G W
13-4		楽 殿2916~2917 (松井)	23	54	6 A E L-B (下園)
13-5		御 館2974-1 (川本)	24		6 A G F-D (西加座)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
25-1	54	6ADP-K (牛業3029-1、三重土地ホ-ム)	37-12	56	6AFH-J (西加座2681-1・3・4、渋谷)
25-2		6ACA-Y (古里3270、脇田)	37-13		6AGK-F (西加座2385-3、2386-3、竹内)
25-3		6ADD-F (篠林3139-3、池田)	38		6ACD-S (塚山)
25-4		6AER-H (牛業3014、牛業公民館)	39		6ABD-R・S・T (古里)
25-5		6AGN-H (鍛冶山2392、丸山)	40		6AGH-L・M (東加座)
25-6		6AFH-A (西加座2675-5、谷口)	41		6AGJ-J他(斎宮地内)
25-7		6AEK-V (下園2926-10、奥田)	42-1	57	6AEI-D・F (楽殿)
25-8		6AFC-D (西前沖2064-5、山本)	42-2		6AEK-A・B (楽殿)
25-9		6ACN-C (広頭3387-1、北出)	43-1		6ADC-C (出在家3235-2、永田)
25-10		6AEV-A (鈴池339-1、永島)	43-2		6ADT-B (木業山308-1、山本)
25-11		6ACF-B (東裏364-1、沢)	43-3		6ACP-T (南裏241-1、辻)
25-12		6AEE-Y (楽殿2892-3、山本)	43-4		6ADS-D (牛業123-3、西山)
25-13		6AEJ-E (西加座2766-1、山内)	43-5		6ADE-D (篠林3220-3、澄野)
26-1		6AER (中西)	43-6		6AGE (東前沖、町道側溝)
26-2		6AEX-6ACQ (鈴池、木業山、南裏)	43-7		6ABD-F (古里588-6、今西)
26-3		6AEV・W・X (鈴池)	43-8		6ADQ-H (牛業3025-2、大西)
26-4		6ACR (木業山、南裏)	44		6AFL-A・B (鍛冶山2759-1、他)
27		6ACG-S・T (東裏)	45		6AEG-P・Q (楽殿2904-2、他)
28		6AEO-D (柳原)	46		6AGN-C・D (鍛冶山2737-1、他)
29		6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	47		6ADJ-D・G他(西加座、新館、宮ノ前、上園)
30	55	6ABJ-M・X・W(中垣内)	48-1	58	6AGM-M(広頭3385、斎宮小)
31-1		6ADO-M (内山0038-13、岩見)	48-2		6ADP-Q (牛業3033-1・2、吉田)
31-2		6ACP-I (南裏227-2、鈴木)	48-3		6ABL-M (中垣内434-6、西川)
31-3		6ABD-A (古里588-4、北畹)	48-4		6AGL-E (東前沖2480、倉田)
31-4		6ADQ-T (牛業3018-2、百五銀行)	48-5		6AGD-6AFE (東前沖、町道側溝)
31-5		6ACC-G (塚山1338-3、水谷)	48-6		6AGC-A (西前沖3550-1、今西)
31-6		6ABO-X (古里576-1、池田)	48-7		6ADT-H (木業山307、森西)
31-7		6AGI-L (東加座2427-1、竹内)	48-8		6ACL-E・F・G (東裏334-15、他)
31-8		6ACN-G (広頭3388-1・5・8・9、森)	48-9		6AEV-J (鈴池341-1、乾)
31-8		6AGD-L (北野2487-1、中川)	48-10		6AGT (牛業、町道側溝)
31-10		6ADM-O (内山3043-3、斎宮駅)	48-11		6ADP-E (鍛冶山2351-1、2352-1、榎原)
31-11		6ADT-I (木業山304-2、澄野)	48-12		6AFC-H (西前沖2604-8・9、清水)
31-12		6ADT-J (木業山304-7、宇田)	48-13		6ACM-O (東裏、斎宮小)
32		6ACE-D・E・F (塚山)	48-14		6AET (牛業、町道側溝)
33		6ADE-C・D他(篠林)	49		6ADI-D・U・V・W・X(上園363、龜)
34		6ADE-F・G・H (西加座)	50		6ACH-H (東裏294、297、山本)
35		6APE他(西前沖)	51		6AFF-D (西加座2693-1・4、2694、轟下)
36	56	6ABI-F (中垣内)	52		6AGF-D (西加座2703、他)
37-1		6AFC-M (西前沖2064、日本榎木)	53-1	59	6ACM-P (東裏284、体育館)
37-2		6ADQ-R (牛業3021-2、野田)	53-2		6ACA-M (古里3280-2、中西)
37-3		6AFC-F (西前沖2604-6、神田)	53-3		6ABE (古里573-2、永納)
37-4		6AFC-M (西前沖2604、日本榎木)	53-4		6ACL-S (東裏271-1、田所)
37-5		6AFC-G (西前沖2064-7、中村)	53-5		6ACR (木業山197-5、田中)
37-6		6ABD-A (古里588-2、北畹)	53-6		6AGO (鍛冶山、町道側溝)
37-7		6AEC-M (苅干2861-2、斎王公民館)	53-7		6ADD-U (篠林3147-3、野呂)
37-8		6ADR-P (木業山128-8・13・14、富山)	53-8		6AGE-U (東前沖2470-2、上田)
37-8		6AGK-E (東加座2355-1、竹内)	53-9		6ACS-O (木業山95-2、浅尾)
37-10		6AED-O (楽殿3217-1、渡部)	53-10		6ACA-R (古里3267-1、西川)
37-11		6ADN-O (内山3043-3、斎宮駅)	53-11		6ADR-W (木業山131-7、西村)

次	年度	調査地区	次	年度	調査地区
53-12	59	6ABL-K(中垣内464-2、沢)	70-10	62	6AFD-B・D(西前沖2649-4、大西)
53-13		6ADQ-L(牛葉3022、辻)	70-11		6AGO-H(鍛冶山2363-2、川合)
53-14		6ACM-O(東裏287-3、体育庫)	70-12		6ADD-F・G(篠林3158、長谷川)
53-15		6AFK-C・D(西加座2721-1、鈴木)	70-13		6AEC-N・G(刈干、佐藤)
54		6AFE-N(西前沖2630、他)	70-14		6ABL-R(中垣内459、北岡)
55		6AEN-P(御原、御館2785-1、他)	70-15		6AFD-A(西前沖2644-1、山本)
56		6ACH-S(東裏289-1、他)	70-16		6ACB-A他(町道塚山線拡幅)
57		6AGF-H・I(東加座2441、他)	71		6ABE(古里501、他)
58-1	60	6AFK-C・D(西加座2721-1、鈴木)	72-1		6ABE(古里500、他)
58-2		6AFH-N(西加座2681-8、三村)	72-2		6ABF(古里523、他)
58-3		6ACM-N(東裏3385-2、齋宮小)	72-3		6ABF(古里551-2、他)
58-4		6ABL-A(中垣内4731-1、小家)	72-4		6ABF(古里528-1、他)
58-5		6ADQ-Q(牛葉、町道備溝)	73		6AFF-B・C・E・G(西加座2663-5、他)
58-6		6ADR-V(木葉山131-3、西山)	74-1		6ABF(古里523、他)
58-7		6AGS-G(中西611、山路)	74-2		6ABF(古里522、他)
58-8		6ABM-A(中垣内430-3他、近鉄)	74-3		6ABE・F(古里524、他)
59		6ACJ-I(広頭3379-1、他)	74-4		6ABE(古里548-1、他)
60		6AGJ-B・D・G(東加座2450-1、他)	74-5		6ABE(古里543、他)
61		6AFF-H・I・D(西加座2663-1、他)	75		6AGF-C(西加座2702、他)
62		6AGI-J・K(東加座2425、他)	76-1	63	6ADB-A~D(町道塚山線拡幅)
63		6AFG-M・N(西加座2659-1、他)	76-2		6ADE-F・G(篠林3158、長谷川)
64-1	61	6ACO-H(牛葉3395-1、トカイ)	76-3		6ABE(古里554、明和町)
64-2		6AGL-F(東加座2435-1、大和谷)	76-4		6ACK(東裏354-13、山際)
64-3		6ADD-A(篠林4136-1、山路)	76-5		6AEE-W(楽殿577、岡田)
64-4		6AGR-N(苗川2340、丸山)	76-6		6ACB-A(塚山3276-1、今西)
64-5		6ACM-R・Q・P(東裏3385-2、齋宮小)	76-7		6ACM-M(広頭3385-2、齋宮小)
64-6		6ACK(東裏361-2、竹川自治会)	76-8		6AFM-G(鍛冶山2736-3、近鉄)
64-7		6AGI-G(東加座2435-2、大和谷)	76-9		6ACQ(南裏144-1、田所)
64-8		6AGR-J(苗川2341-6、山下)	76-10		6ABD-U(古里579、池田建設)
64-9		6ADQ-M(牛葉、町道備溝)	76-11		6ABE(古里554、明和町)
64-10		6ACF-A(東裏365-1、樋口)	76-12		6AEE(楽殿、町道下水管)
64-11		6ACM-O(東裏3385-2、齋宮小)	76-13		6ADD-K(篠林3143、中西)
64-12		6ADE-B(篠林3162-3、江崎)	76-14		6AEE-S(楽殿2878-3、山路)
65-1		6ACC-M(塚山3331-1)	76-15		6ABF~6ABH(中垣内、県道拡幅)
65-2		6AEG-S(楽殿2908-2、他)	76-16		6AEK-B(下園2936-2、明和町)
65-3		6AEI-L・M(楽殿2917-4、他)	76-17		6AEV-A(鈴池339-5、水島)
66		6AGG-C(東加座2437-1、他)	77		6AGJ-D(東加座2453、他)
67		6ABF(古里523、他)	78		6ADL(宮ノ前3054、他)
68		6ABF(古里502、他)	79		6AGG-A・B(東加座2440、他)
69		6AGM-E~H(東加座2373、他)	80		6AFG-F~I(西加座2666、他)
70-1	62	6ACC-X(塚山3325-1、江崎)	81-1	H 1	6AEC~F(町道塚山線拡幅)
70-2		6AEE-W(楽殿2875-2、岡田)	81-2		6ABJ、6ABK(古里、県道拡幅)
70-3		6ADR-I(木葉山1129-5、大西)	81-3		6ADS-M(木葉山137、中川)
70-4		6ACN-A・B・E・L(広頭3389-8、林)	81-4		6AED-L(楽殿2881-2、山本)
70-5		6AEW-A(鈴池333-1、八田)	81-5		6AFQ-C(中西597-2、水戸口)
70-6		6ABL-S(中垣内430-6、奥山)	81-6		6ADD-F(篠林313、池田)
70-7		6AEE-T(楽殿577、浅尾)	81-7		6ABL-U(中垣内430-7、川本)
70-8		6AEU・6AEX-A(牛葉、鈴池、三重県)	81-8		6ABJ(古里、明和町)
70-9		6AEP-C・D(御館、柳原、近鉄)	81-9		6ACF(中垣内、三重県)

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
81-10	1	6ADR-V(木葉山297、明和町)	95	4	6ADN(内山3046-17、他)
81-11		6ACM-N(広原3385-2、明和町)	96-1		6AGM(東加座2374 丸山)
81-12		6AED-A(篠林3225、中川)	96-2		6ADO(内山3058-3、他 明和町)
81-13		6ACB(塚山3276-19他、明和町)	96-3		6ACA-D(古里3260 清水)
81-14		6AED-F(楽殿2844-2、澄野)	96-4		6AFN(中西2749-1 本山)
81-15		6AED-U(楽殿2885-2、西山)	96-5		6ADR-T(木葉山28-3 加藤)
81-16		6AG(北野3655-1、他)	96-6		6ADD-D(篠林3138-1 藤井)
82-1		6ADI-F~J(上園3095、他)	97		6AEM(中垣内482、他)
82-2		6ADI-K・L(上園3100、他)	98		6AFM-C・E(鍛冶山2745、他)
83		6AFJ-C~F(西加座2770-3、他)	99	5	6ADN(内山3046-11、他)
84-1		6AFJ-G(西加座2764-3)	100		6ABI-T(中垣内423)
84-2		6AFH-G・H(西加座2679-1、他)	101		6ADG(篠林3194)
85-1	2	6ABD~6ACD(古里、三重県)	102-1		6ADS(木葉山119-5 澄野)
85-2		6ACA-P(古里3279、松本)	102-2		6AED-J(楽殿2882-5 杉本)
85-3		6ACJ-B・D(東表、明和町)	102-3		6AAQ(花園663-1 中川)
85-4		6ABE(竹川573-1、永納)	102-4		6ACF-A(東表365-1 樋口)
85-5		6AED-U(楽殿2885-2、西山)	102-5		6ABJ-D(中垣内493-6 川口)
85-6		6AFH-B(西加座、明和町)	102-6		6AG(鍛冶山地内 明和町)
85-7		6ACB-C(塚山3276-3他、加藤)	102-7		6ACG-E(東表318-1 川本)
85-8		6ABI-N(中垣内427-1、小林)	102-8		6AE(楽殿地内 明和町)
86		6AFH-F・G・H(西加座2679-1他)	103		6AEQ-A(柳原2779-3)
87		6ACE-N・Q・R(塚山3356他)	104		6AGT(笹川1048-1、他)
88		6AGN-C・D(鍛冶山2411-1他)	105	6	6AFN(鍛冶山2758-1、他)
89-1	3	6ADM-O(内山3043-5、近鉄斎宮駅)	106-1		6AEW-J(鈴池338-1 森西)
89-2		6AGI-M(東加座2432-2他、北村)	106-2		6AEE-W(楽殿2891-3 向井)
89-3		6ADM-N・O(内山3060-4、近鉄斎宮駅)	106-3		6AFL他(鍛冶山地内 明和町)
90		6AFH-A・B(西加座2680他)	106-4		6AEC-L(苅干2861 坂本)
91		6ABH-F(中垣内393、他)	106-5		6AGO(鍛冶山2362 青山)
92		6AGN-A(鍛冶山2734-3)	106-6		6ACC-B(塚山3340-4 田畑)
93		6ADN(内山3045-12、他)	107		6ABI-O(中垣内414-1、他)
94		6AEM(御館2942)	108		6AEQ-C(柳原2779-2、他)



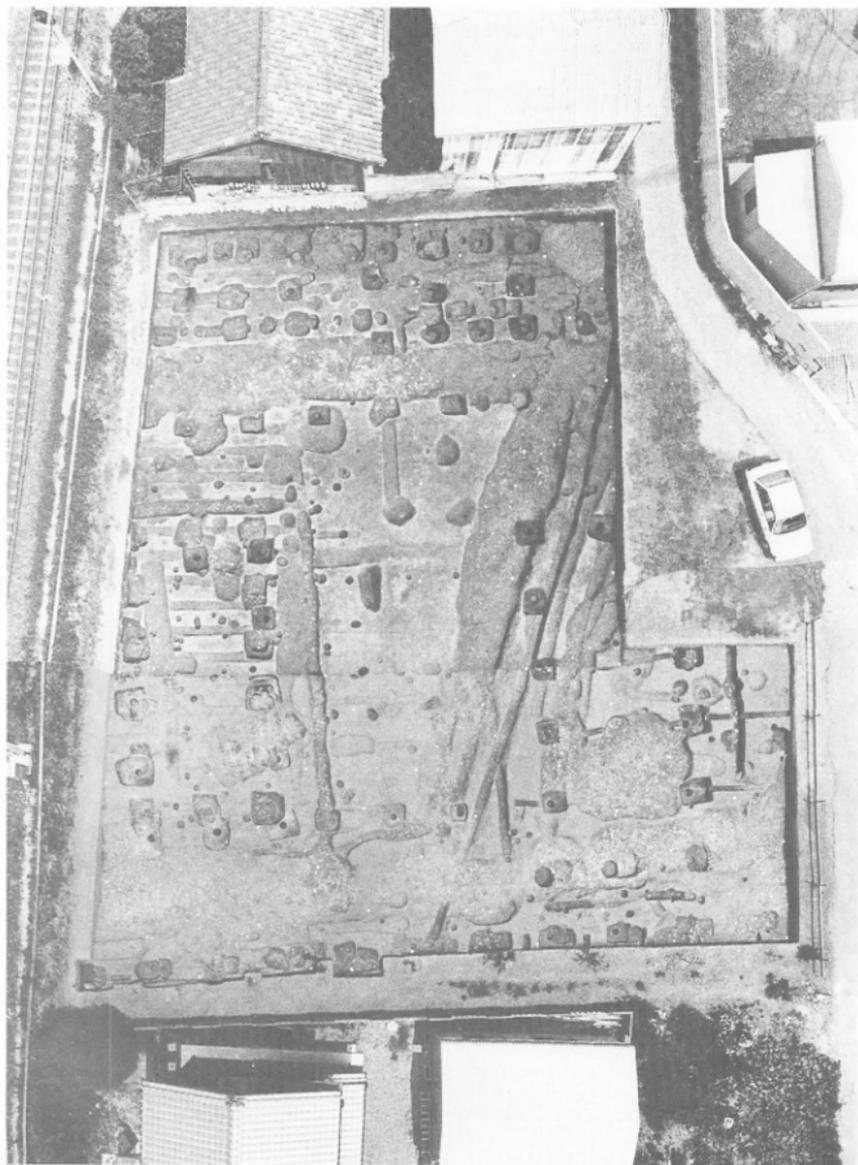
第30图 新宮跡地区表示



第31回 齋宮跡方格地割区画名称

ふりがな	しせきさいくうあと へいせい6ねんどはくつちようさがいほう							
書名	史跡斎宮跡 平成6年度発掘調査概報							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	吉水康夫・野原宏司・大川勝宏・赤岩 操							
編集機関	斎宮歴史博物館							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503番地 TEL 05965-2-3800							
発行年月日	1995年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 〃 〃	東 経 〃 〃	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市 町 村	遺跡番号					
斎宮跡 第105次 調査	多気郡明和町斎宮他 斎宮宇殿治山	24442	210	34° 31' 55" / 34° 32' 30"	136° 36' 16" / 136° 37' 37"	19940407 / 19941007	780	計画調査
第107次 調査	竹川字中垣内					19940718 / 19941115	530	◇
第108次 調査	斎宮字柳原					19941115 / 19950303	1,100	◇
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
斎宮跡 第105次 調査	官 衙		掘立柱建物・柵列		土師器・須恵器・陶椀片 灰釉陶器・緑釉陶器		平安時代初期における斎宮跡中枢部の一面	
第107次 調査			方形周溝墓・掘立柱建物 土城墓・土城		弥生土器・土師器 須恵器・円面硯		斎宮成立前～斎宮初期の遺構・遺物	
第108次 調査			掘立柱建物・柵列・土城 区画道路側溝		土師器・須恵器 灰釉陶器・緑釉陶器		一区画のほぼ全域を囲む柵列と掘立柱建物群	

# 圖 版



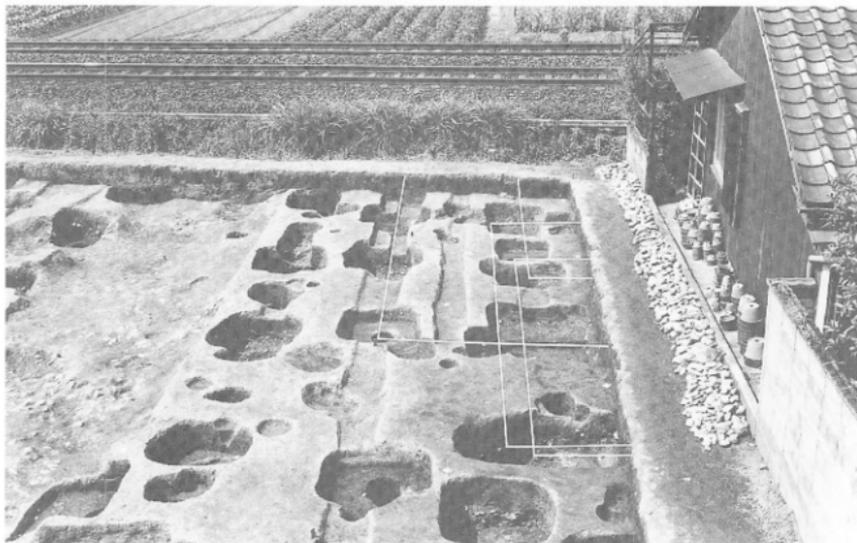
調査区全景（真上から）



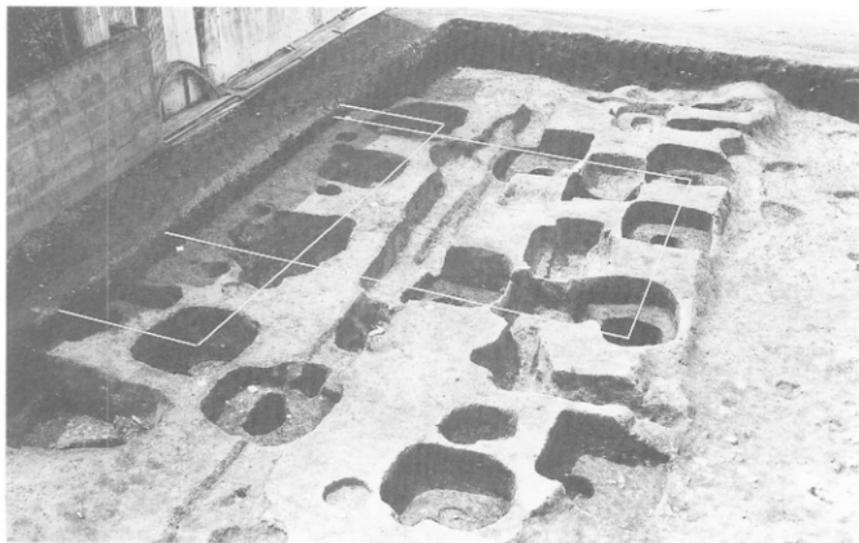
調査区東半（西から）



S A 7150・7170（南から）



S B 7180・7165・7195・7196 (南から)



S B 7175・7185 (北西から)



S B 7155・7190・7191東半（西から）



S B 7155・7190・7191西半（南から）



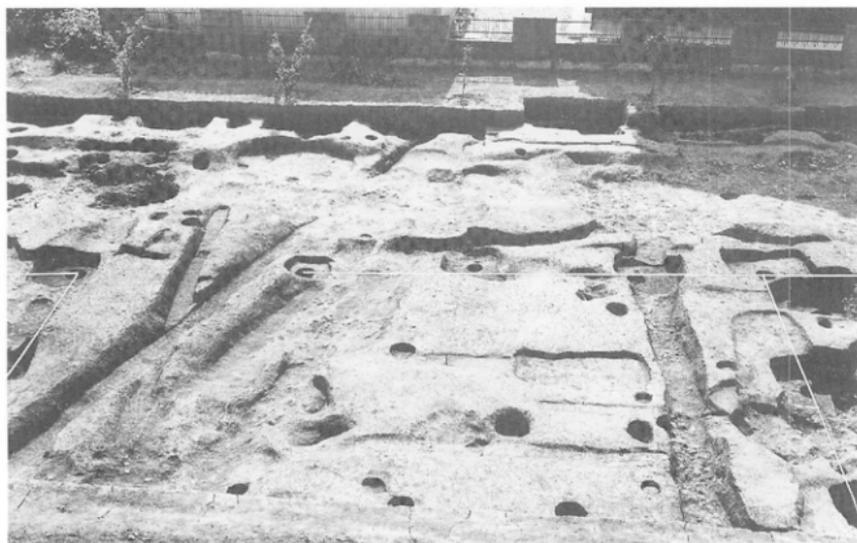
S B 7160・7155東半（南から）



S B 7160西半（東から）



調査区西半（南から）



S A 1411・2675・7151（東から）



調査区全景（真上から）



調査区遠景（東から）



調査区全景（北から）



S X 7200 (北西から)



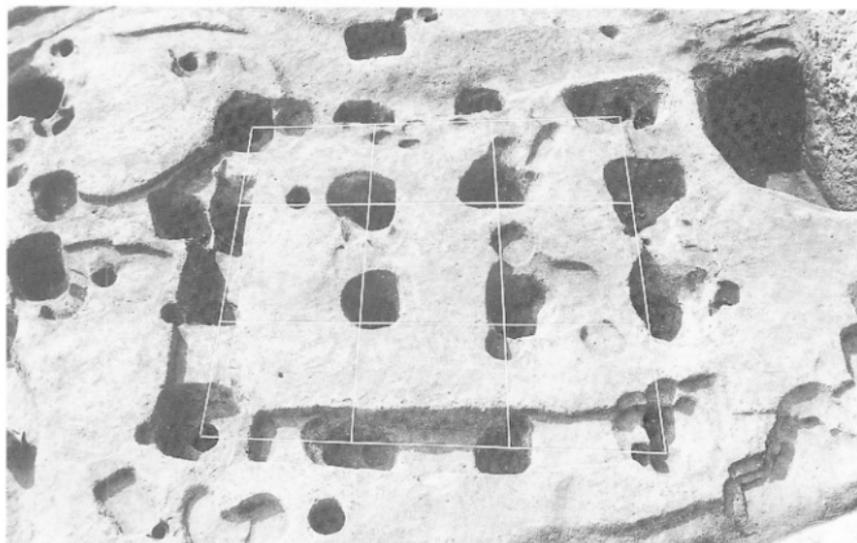
S X 7201遺物出土状況 (南東から)



S B 7232 (北から)



S B 7227・7228・7229 (北から)



S B 7210 (東から)



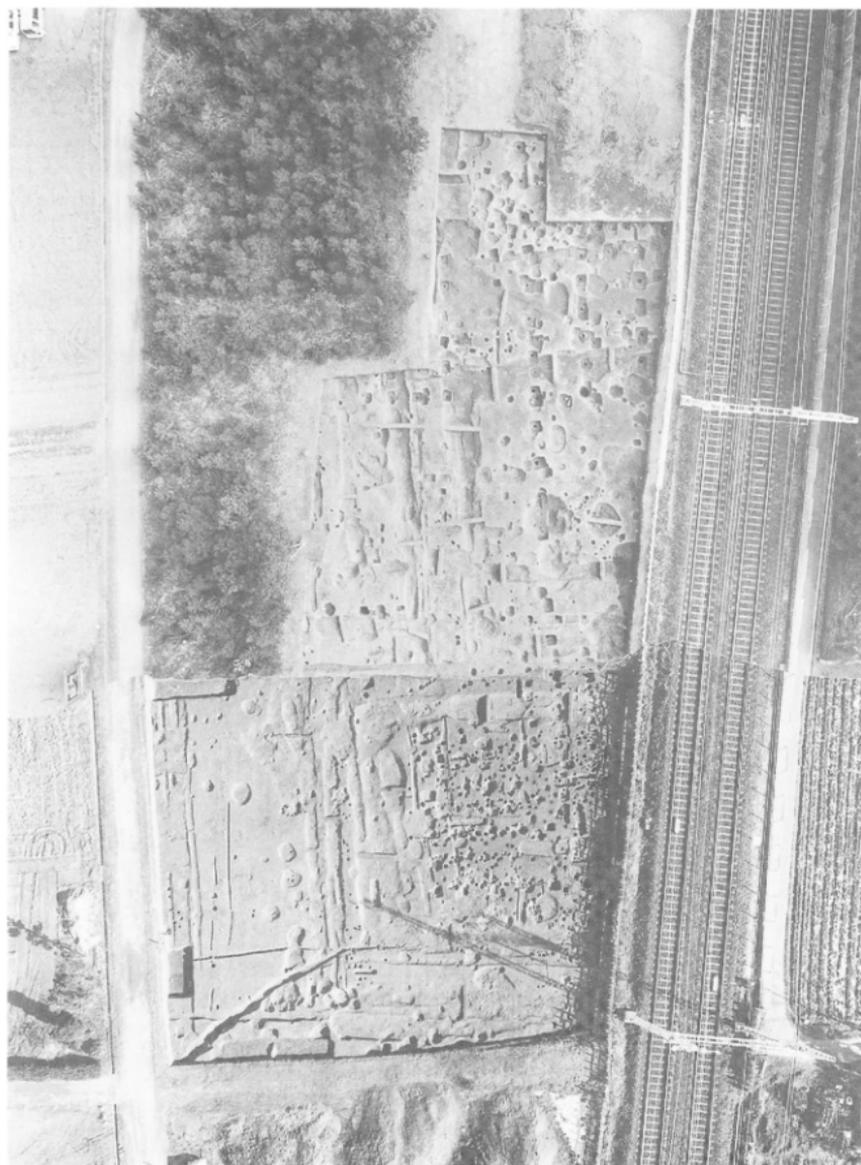
S B 7231・7233 (北から)



S K 7220遺物出土状況（南から）



S X 7240（北から）



調査区全景（真上から）



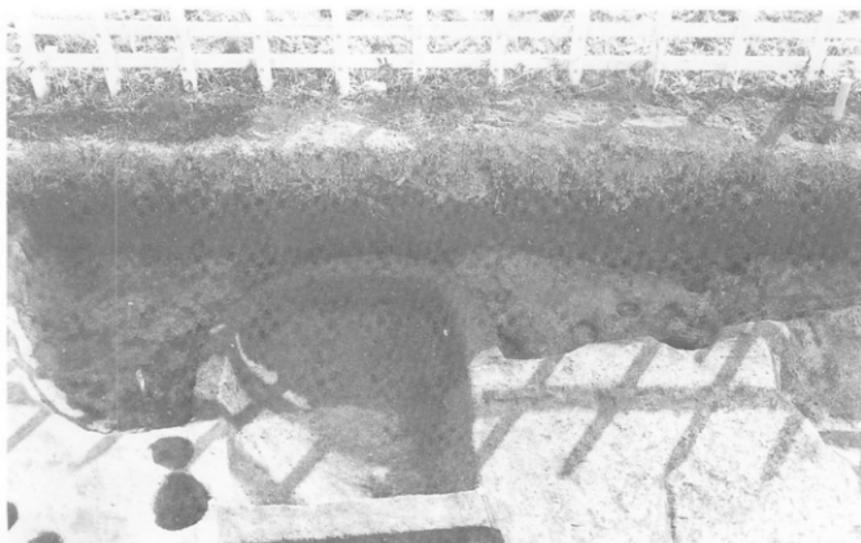
調査区全景（西から）



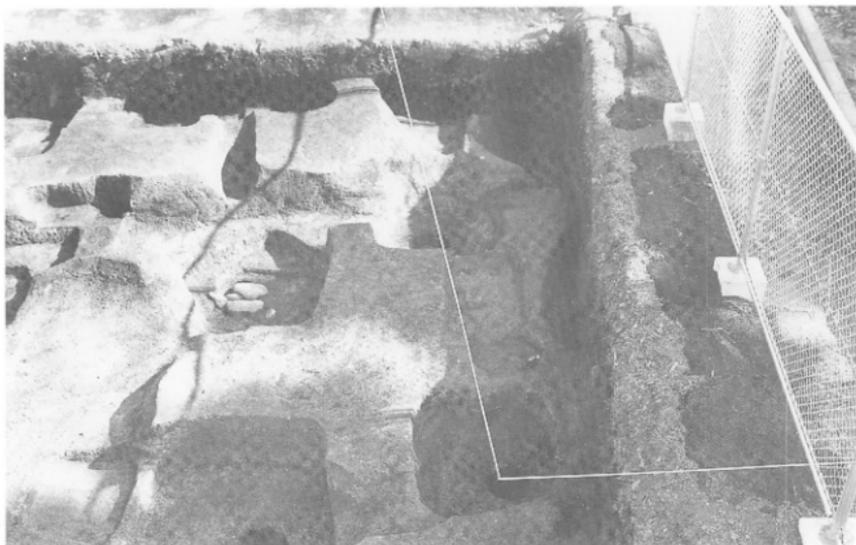
S A 6999・7000（西から）



調査区南東部（東から）



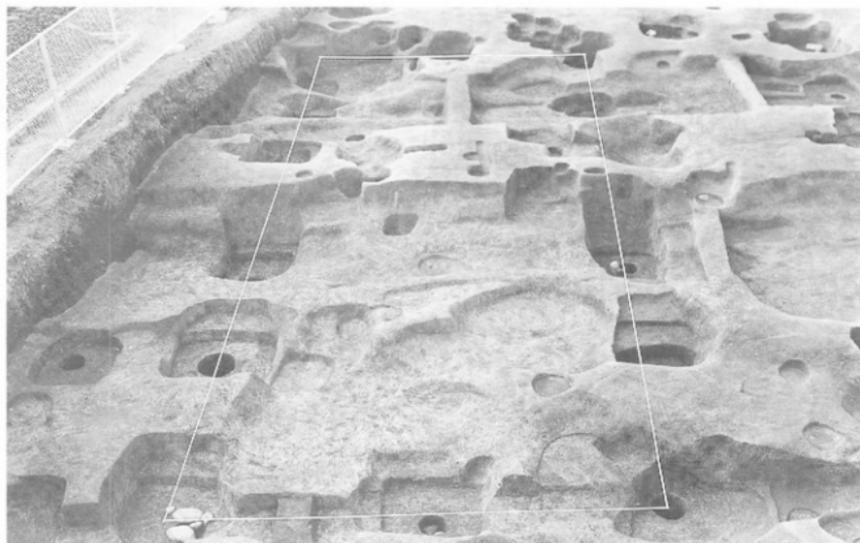
S B 7285（北から）



S B 7315 (西から)



S B 7293 (西から)



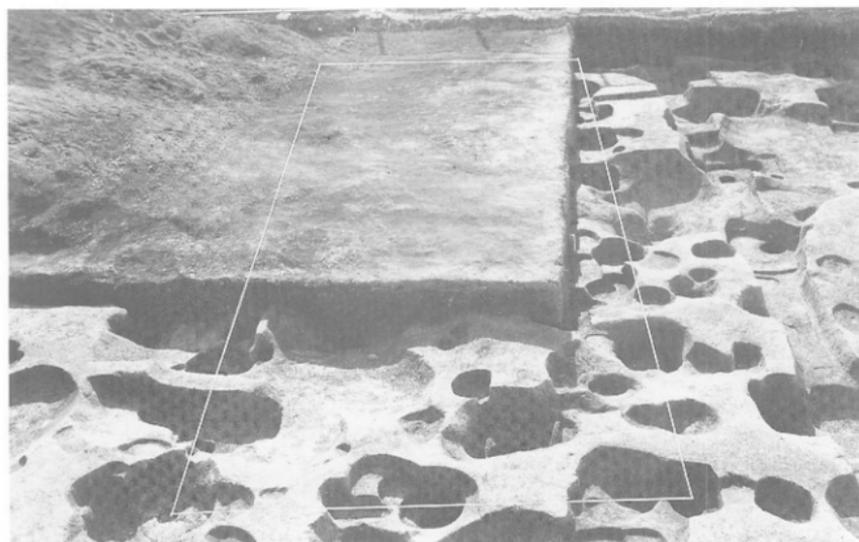
S B 7300 (東から)



S B 7299 (東から)



S B 7310 (西から)



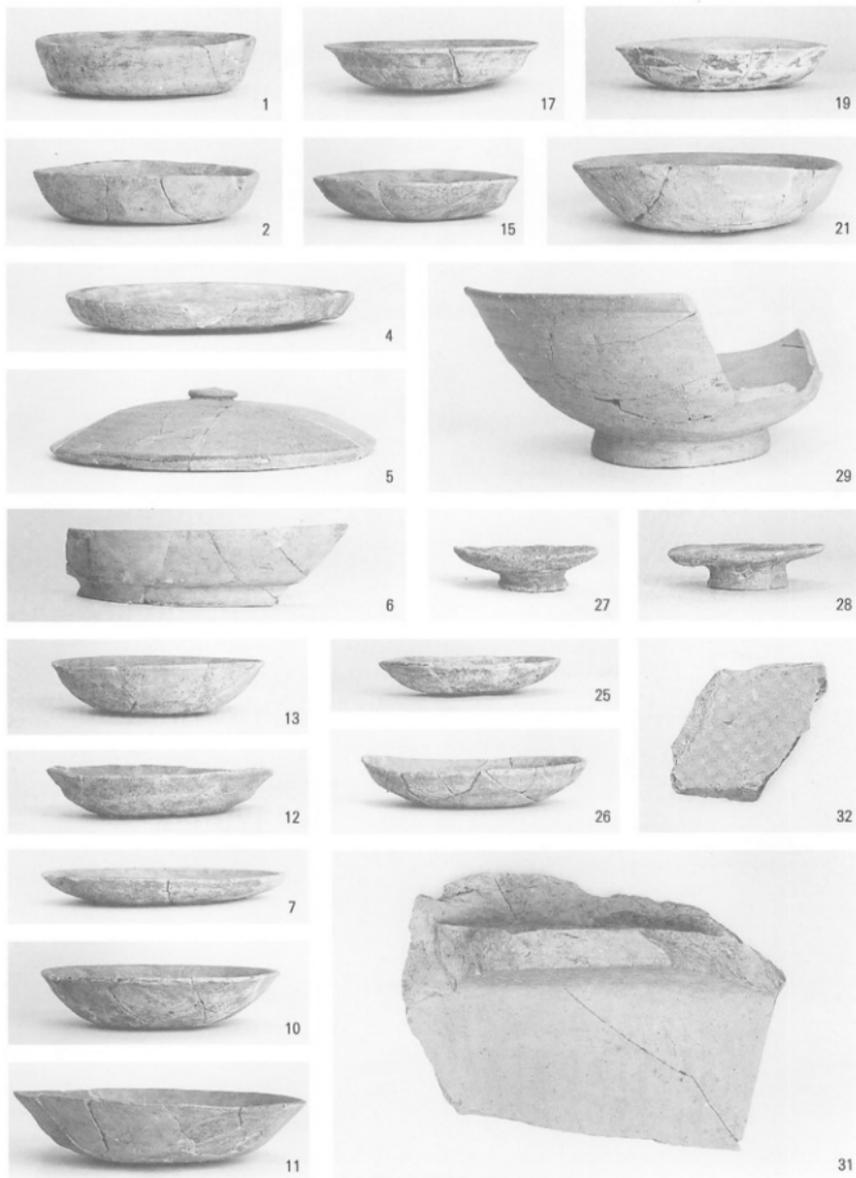
S B 7313 (北から)



S D 7269・7307 (北から)



S K 7281埋土断面 (東から)







53



44



47



54



45



50



46



59



52



49



62



61



64



38



40



39



41



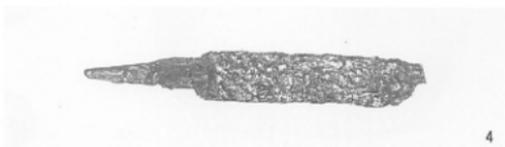
3



2



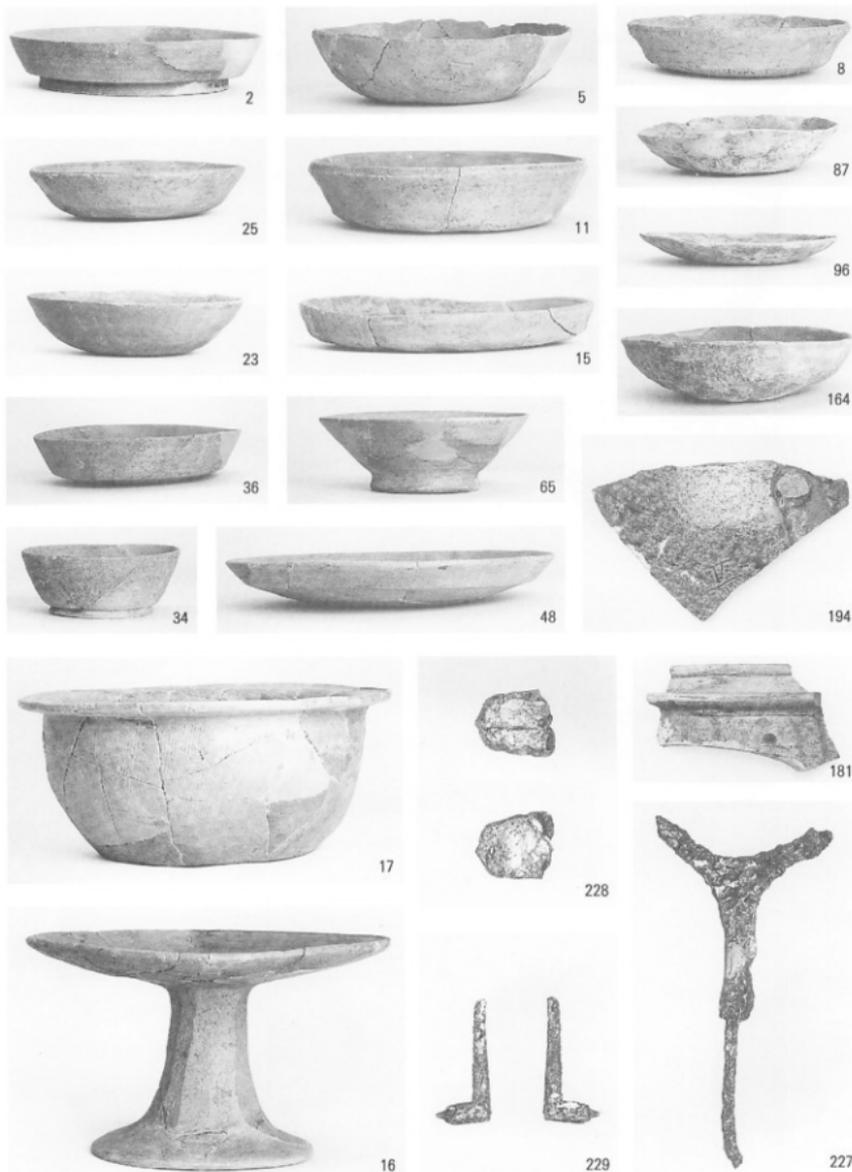
1



4



出土遺物 38~41 (1:6), その他 (1:3), 下段・包含層出土 (スクレイパー 1:2)



出土遺物 227~229 (1:2), その他 (1:3)

---

史跡 齋宮跡

平成6年度

発掘調査概報

平成7年3月31日

編集発行 齋宮歴史博物館

印刷 光出版印刷株式会社

---